（每月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

明治三十五年八月廿四日發兌

女鑑

第貳百五拾九號

東京國光社


M.yoshinuma
時計ハ器械堅牢時間正確美術品ハ意匠卓絶製作精妙
商品ハ正札附陳列縦覧御随意撰擇ノ便ニ供ス
圖入定價表ハ送料郵券四錢ヲ添ヘ御申込次第送呈ス
東京市京橋際南傳馬町
時計及寶玉類
貴金屬美術品商
吉沼又右衛門
特電本局三三
仝一〇四〇
大坂市心齋橋筋順慶町角 仝出張店 特電東一八八〇


品質精撰製作巧妙價格至廉責任保證書ヲ添付ス
商品ハ正札ヲ附シ陳列シテ随意御縦覧撰擇ノ便ニ供ス
無料進呈(營業要覽但圖入定價表)送料四錢ヲ要ス
東京市京橋際南傳馬町
時計及寶玉類
貴金屬美術品商
吉沼又右衛門
特電本局三三
仝一〇四〇
大坂市心齋橋筋順慶町角特電東一八八〇
仝出張店

女鑑第貳百五拾九號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

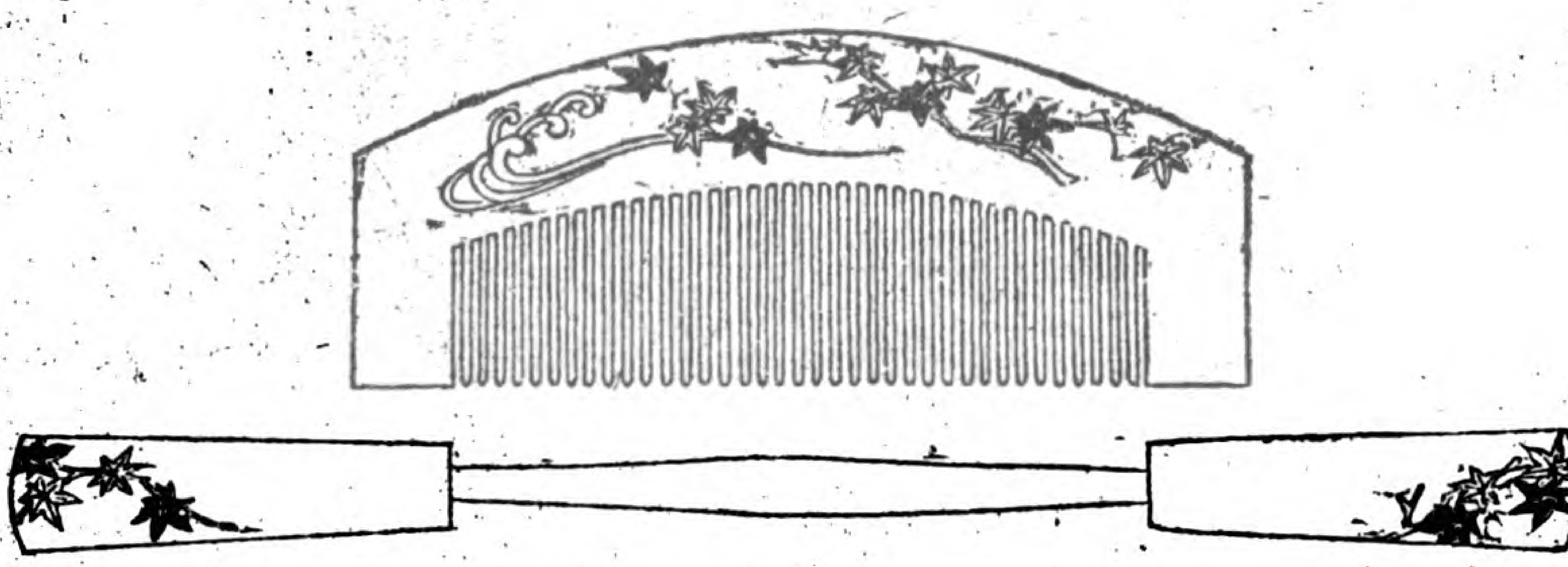
定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓八拾錢
全國無逓送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年八月十九日印刷
明治三十五年八月二十日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊榮一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木貞雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發賣元 株式會社國光社出版部
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八)

新案夏用櫛笄



上圖櫛笄は純白なる象牙を以て流行の半京形に造り模樣は『紅葉に流』『露芝』『秋草』其他新撰の圖案を佳麗なる色具にて芝山象嵌せしもの或は金粉銀泥を以て漆工大家の手に成たるもの等自ら清凉を覺え盛夏の御召用には最も佳品と存候

一組の價格

甲種十圓以上十五圓 ◎乙種五圓以上九圓半 ◎丙種二圓以上四圓半

右の外枕香白檀等の香木を以て半京形又は新案形の格好に造り花鳥風景等淡泊なる模樣の墨繪薄蒔繪を施せし風雅なる櫛笄一組の價二圓半以上五六圓八圓位迄各種取揃有之候に付何卒御來車の上御用命の程奉願候

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

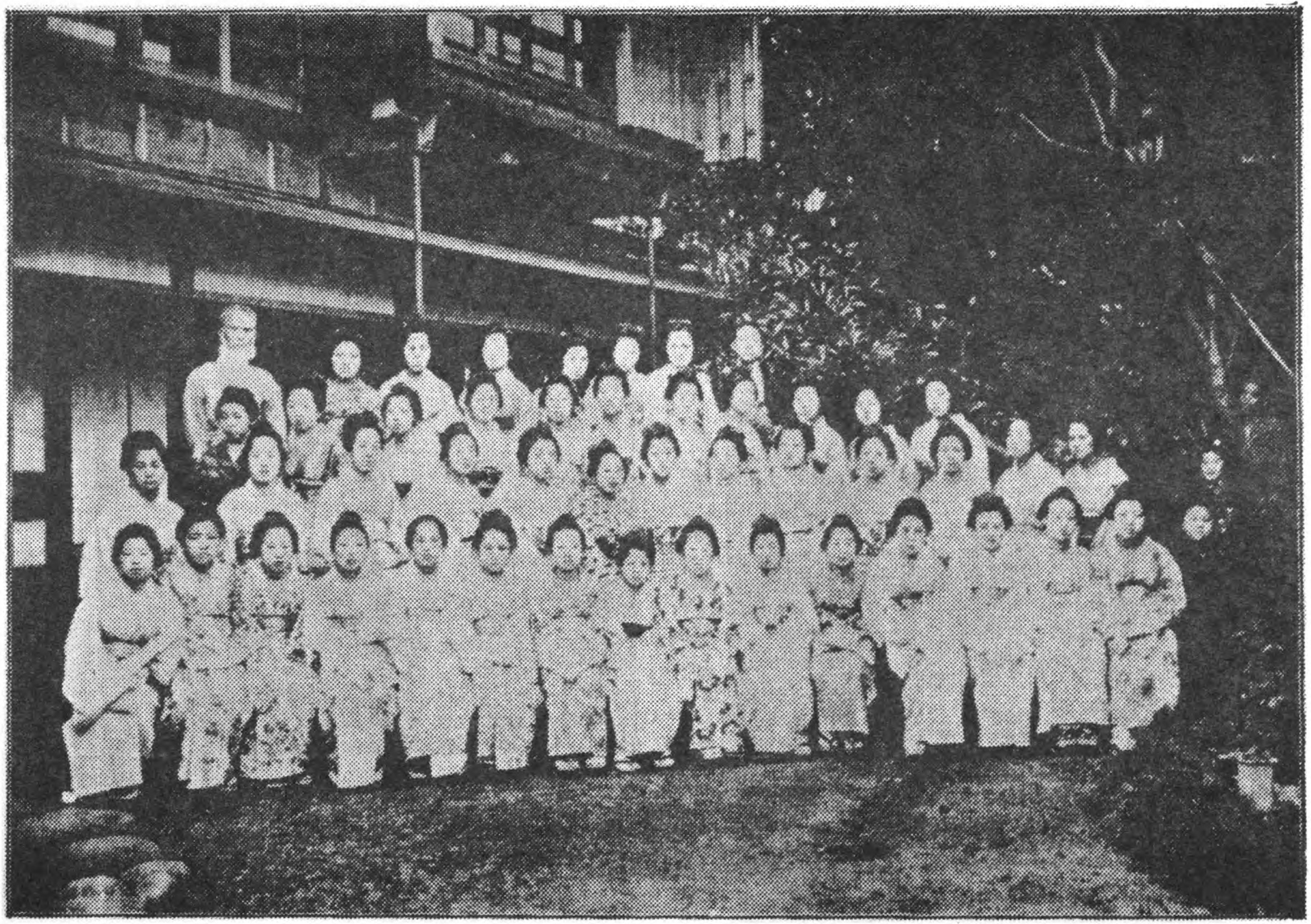
特電話新橋 五五一番



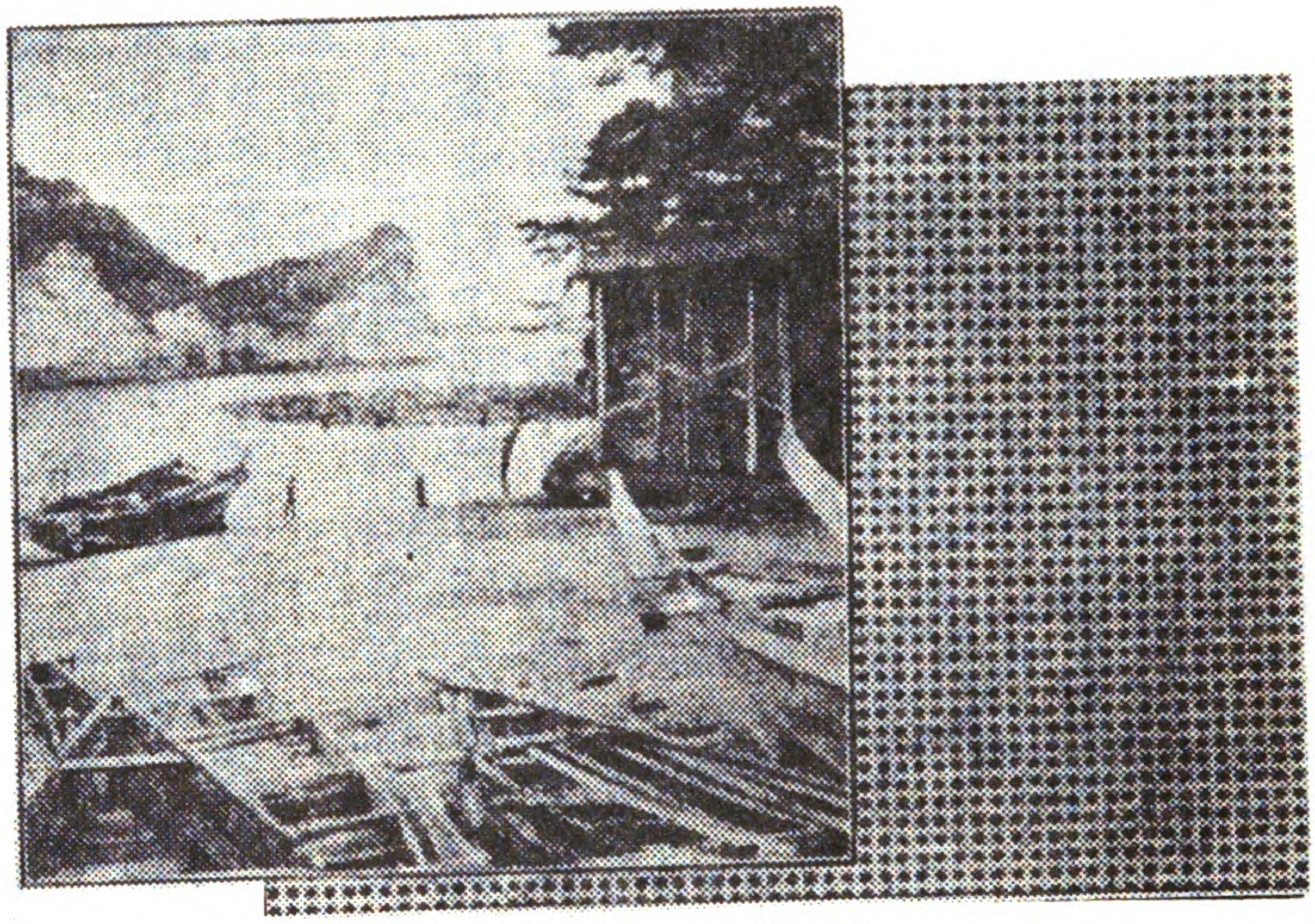
英國皇帝エドワード第七世陛下



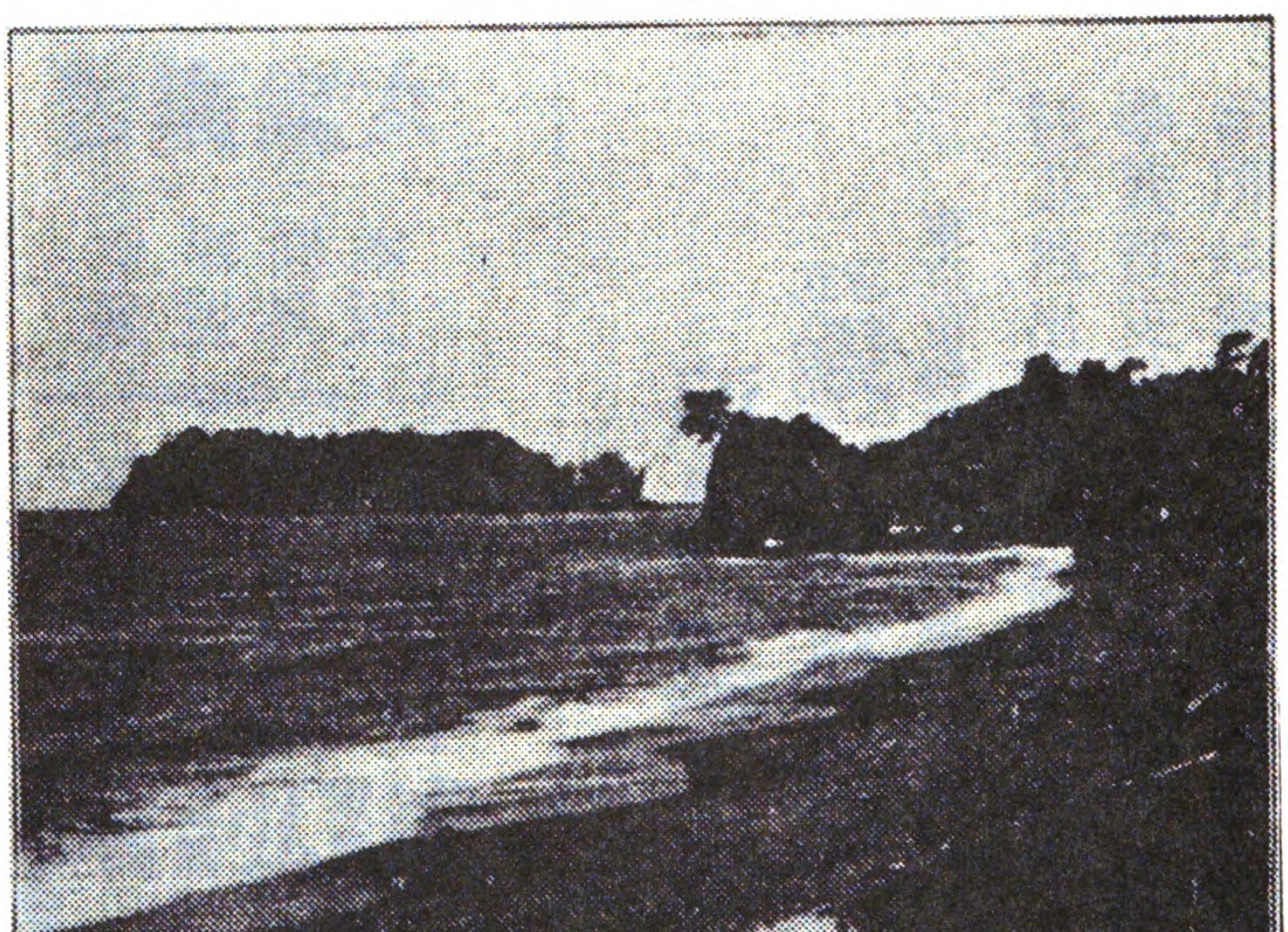
同 皇 后 陛 下



野口裁縫專門女學校職員及び生徒



常陸平潟濱岸



相州鎌倉七里ヶ濱

操行論

操行と學藝とは、常に隨伴して、相膠離すべからざるものたるや、固より論なし。個人品性の昇進や、社會品位の發達や、皆な繫りて此の兩者の並行に據りて存する也。今日の學校敎育に於て、倫理修身の課と、科學藝術の業とを併せ敎ふるは、夫れ唯之が爲のみ。

然るに世運の漸やく開くるに隨ひて、人或は重きを學術の一方にのみ措きて、偏へに之が研究琢磨に力を致し、汲々日も亦足らざるの有樣あるが爲め、倫理修身の學の如きは、纔に學期試驗及第の得點を有すれば乃ち足れりとするの傾向を生じ、必ずしも之れが躬行實踐を問はざるが如きの狀態あるを見るは、寔に嘆ずべき現象といふべし。

吾輩は操行と學藝とを比較して、遽に之が輕重を論せんとするものに非ずと雖も、人生自然の本分よりして之を見れば、操行の高きは、學問藝能の優れたるに比して、人心に高尚なる觀念を起さしむるによりて考ふるも、操行なる者が、他の人間萬般の行事に對比して、最も重んずべきものたるを知るに難からざる也。而して操行といふもの、元と人生日常踏むところの常徑なるを以て、男性たると

女性たるとを區別して、その踏行を一方にのみ責むるは、頗る謂れなきが如しと雖も、由來貞操、潔行を以て最上の美徳とせる婦人に取りては、寧ろ學に淺く、藝に不能なるも、貞節正しくして、守操の完からんことを希望せざるを得ず。而も之れ啻に吾輩の希望のみにあらず。今日女子教育の局に當る者の之を口にして敎へ諭し、概ね餘濫なきところなるにも係らはず、世間往々女子の操行を論議して、酷評を加ふるものさへあるは、夫れ何の故ぞ。

坊間の流言、評論、固より傾聽に値ひせざるもの多しと雖も、亦以て一概に之を否定して反省の資料とするに足らざるものゝみと爲すべからず。例へば彼の今日の女學に在る者を呼びて、蝦茶式部の異名を附し、或は女ハイカラなる戯評を下すが如きは、一場の冷評に過ぎずとせば、それ迄のことなれども、その異名の中には、幾多の嘲弄的意味を表せずや。その戯評の下には一種侮辱の意味を含まずや。乃ち女生一般の品格、面目を汚辱する亦決して尠少ならざる也。殊に新聞紙に廣告して求婚する男性が、女學生は謝絶すとの意を明々地に表示するものあるが如きは、誰れか又女子教育の爲に哀しまざらんや。蓋し斯の如きは、固より一概には論ずべからざれども、女學生中の或者が、徒に學問技藝にのみ重きを措きて、女子最上の美徳たる操行に意を用ゐるの充分ならざる結果にはあらざる乎。

勇壯、快濶といふもの、人生に於て尊ぶべき品格の一たるに相違なしと雖も、婦人に在りては、動も

すれば、過激突飛とも見ゆる場合あるを免かれざるは、獨り古來の習慣に據るのみにあらずして、婦人本來の美徳が、必ずしも之に基づかざるを以てなり。又た學問技藝の人生に缺くべからざるは、云ふまでもなけれど、女性が學に專らにして、藝能にのみ堪能ならんことを求むるが爲め、意氣自ら揚り、傲然として男子を睥睨せんとするの甚だ不穩不當に思はるゝも、亦た實に古來の習慣が然らしむるのみならず、婦人本來の美徳の之が爲に埋沒せらるればなり。歐米の婦女子が快濶にして、勇氣に富めるは、その氣象頗る愛すべしと雖も、是れ數百年來踏襲せる因習が、自然に陶冶して然らしめたるに他ならず。然るを今一旦夕の間に於て、急に之に倣はんとするも、果して正鵠を失せざるを得べきか、若し一歩を過たば、恐らくば虎を描きて狗に類するの誚を受くるのみに止まらざるべし。況んや、歐米婦女の勇壯快濶なるもの往々弊害の之に伴ふありて、必ずしも嘆美すべきものゝみにあらざるに於てをや。夫の學問技藝の如きも亦歐米の婦女が、男兒に讓らざらんとするの勇氣なるは甚だ欽すべしと雖も、是れもまた社會進歩の必要に迫られ、生存競爭の狀態に追はれて、自ら此に至りたるものにして、一時の好奇心に驅られたるが故にはあらざるなり。吾國の女性が學問の蘊奥を究め、技藝の昇達を求むるは、乃ち可しと雖も、之が爲め倨傲鮮腆の風を生じ、驕慢自ら居りて、一種厭ふべき女丈夫たるを見るに至らば、婦人の最も重んずべき操行は自ら闕如たらざるを得ざる

べし。近時歐洲の識者中婦人が學術のみに力を用ゐるの弊害を論ずるものあるに至りたるも、亦唯だ之が故ならざらんや。幾百年來因襲の歷史を有する歐米に於てすら尙ほ斯の如しとせば、新進の我國婦女が、一足飛びの進步を爲して、歐米の婦人と駢肩馳驅せんとするの危險なるは、何人も亦疑を容れざるところなるべし。

吾儕豈に螢窓雪几の下に孜々として、勉學に餘念なき可憐の女性を責めんと欲するものならんや。否な多くの同情を今の女學生に寄せて、以て其の完全なる成功を祈りて止まざるものなり。唯だ頃來聞くところのこと甚だ遺憾に堪へざるものあるを以て、特に此に之を言ふのみ。希くは操行と學術とをして倂行して兩つながら完全なる發達を遂げしめよ。而も若し倂行する能はざるが如きあらば、必ず先づ操行を全からしめんことを勗めよ。是れ女子の品位を高めて、本來の美德を完ふせんが爲のみにあらず。又以て社會道德の爲に、國家進運の爲に、女子敎育將來の發達の爲に、最も重要なることと信ずれば也　（青眼子）



論説

家庭的教育の必要

三輪田女學校長兼日本女子大學講師　三輪田眞佐子

女子教育は、一國の文明進歩と大に關係するのみならず、個人の生活幸福と少からざる關係あるを以て、吾れも人も共につとめてこれを奬勵せし結果、今日の隆盛を致せしは、實に歡ぶべきことにこそ。

されど、就學者の多きを以て直に滿足すべからず學校舍の多きを以て直に雀躍すべからず。されば、今日隆盛の觀ある女子教育を以て善美なる効果あらしめざれば、眞に隆盛の實ありと言ふ可らず。

さて、女子を教育するには、單に種々の學藝を以て教授せんも、殆ど目的を達すること能はざるべし。如何となれば、種々の學藝は、完全なる女子を作る材料たるに過ぎざればなり。決して材料を以て目的とな思ひそ。

これを以て女子教育を完全にせんと欲せば、教授よりも訓練を必要とするなり。然るに訓練は、教育を受くるもの丶生活全般に周到なる注意を要するものなれば、僅に五時間ばかり坐を占むる學校のみの、能く目的を達する所あらんや。故に女子教育は、家庭と學校と相待ちて始めて目的を達し得るものなれば、女學校に通ふものは、必ず家庭の注意を要す。即ち女學生にして父母の許より通學するものは、上の上なるものなり。次は親戚知人にして、父母に代るべき監督をするものあらば可なり。決して宿屋風の所、若しくば間貸樣の所に

身を安んずべからず。

幸に近來は、志あるものにして、往々女學生を監督する任に當るもの出づるに至れり。實にその責任大なり。その業務美なりと言ふべし。されど監督者たるものは、單に女學生をして、李下の冠瓜田の靴と言ふべき疑を防ぐに留る消極的の注意のみを以て足れりとせず。家庭的思想を以て、家庭に居ると同一の感情を起さしめざるべからず。

加之、學校全體をして成るべく家庭的分子を含ましめざるべからず。勿論學校たる以上は規律あるを要するを以て、校則の嚴なるは可なりと雖も教師たるものは、生徒をして苛酷なる罰則を犯すに至らざるやう、豫め精神上の感化を要す。蓋し、教育は藝能なりと信ずる人は、學校にたゞに委託せば、完全なる人物となり得るとて放念する事あり。然れども教育の效能は五分あるものを七八分にし、七八分なるものを十分十一分にするものなれば、素質の劣等なるものは、容易に完全なる人となること難し。たとへば、必ず死すべき病人をば、名醫に委託してその全快を妄信し、一朝死せしとて醫を怨むは、怨むものゝ理なきが如し。故に女子教育は、學校のみに一任すべきにあらずかし。

これにつきても、おのれは國民一般が家庭に對して、大なる趣味を有し、その暖かき春陽の天地に於て成育せし天眞爛熳たる女子の世に多きを望む乾燥無味なる家庭に成育し、苛酷なる法則の下に屈服せし女子の、姦佞、嫉妬、殘忍などの惡癖あるを經驗せり。これ今日家庭的教育の必要ある所以なり。

母親の心得（承前）

愛敬女學校長　棚橋絢子

○小學校時代の家庭教育

兒女漸く生長して、小學校に通ふに至るも、家庭教育は決して忽にすべからず。益々努めて學校家庭双方相俟て教育を施すべし。家庭教育にして宜しからざれば、如何なる良師が如何に心血を絞りて學校教育を施すも、僅少時の學校教育は、多時間の家庭狀態の爲めに忽ち流去せらるゝなり。學校に於ては教師數多の生徒を帥ゐ、一定時間に一定所に於て一定教育を施すものにして（生徒、師の感化を受くるの非常なるは論を俟たずと雖も）家庭に於ては、父兄は兒童と寢食を共にして、兒童は其父兄が社會に立ちて煩雜多樣の言行をなすを見るを以て、學校の感化は家庭の切なるに及ばざるべし。學校に於て教ふると難きをも家庭に於ては教化しうべし。學校に於て受けたる教育は家庭に於て練習せしむべきなり。學校は教場なり、家庭は練習場なり。然れば父母は練習場の教師として躬行模範を垂れざるべからず。父母に於て一點不良の行爲あらば、是れ最愛の兒童に不良を教ふるものと知るべし。（予は玆處に重に女兒に付て云はんとするものなり）女子教育の目的は完全なる品性の女性を作るにあり。完全なる品性の女性とは賢母良妻たる女性を云ふなり。女子教育の目的は賢母良妻を作るにあり。彼の獨立の生活を營む女性を作らむとする教育の如きは、予は是れ社會に毒を流すものとして排斥せんとす。女子は嫁して人の妻となり、温柔方正の女德を守り、能く內助の責に任じ、舅姑に奉仕し、小舅小姑を扶育し、夫をして內顧の憂なく力を專らにして其事業

に盡すを得せしめ、家道の隆盛を計り、兒女を敎養すべきものなり。斯の如きを完全の女性と云ふ然れば其父母たるもの能く此意を體し、未來の賢母良妻を作るを目的として其兒女を訓養せざるべからず。之に付て、予は二三思ひ付きたる點を述ぶべし。

女兒をして奢侈に誇るの癖を付けしむべからず。勤儉の美德を養成せしむべし。驕奢は主に女子より起り、而して是れ家を亡ぼし國を滅する源なることを思はゞ、悚然として恐るべきものなり。驕奢は德を滅ぼし身を害ひ、勤儉は家を起し德を積む所以のもの也。父母たる者は常に兒女をして人の價値は衣食住等瑣末の事に存せるを知らしむべし。勿論女兒に德の德たる所以を說くも到底解せしむる能はず。又空論は何等の益する處なきを以て、須らく之に勤儉の氣風を養成すべし。衣服等は其家其地位に依りて應はしきものを要すと雖も、其較々美なるを以て他の弊衣のものにはてるが如き素振意志の見ゆるあらば、嚴に之を匡正すべきなり。此の事頗る明白の事なれども、日常等閑に附せらるゝの觀あるのみならず、父母が却りて其兒女の美裝に誇る事實往々見らるゝなり。深く注意すべし。又物品を麁末に扱ふの習を附けしむべからず。一紙片一糸屑たりとも丁寧に取扱はしめ、濫費の癖を生ぜしめず、貯蓄利用の習を附すべし。天物を暴殄するは其德を損ずる所以なれば也。

勤勉を愛するの習慣を付すべし。女兒をして怠慢ならしむべからず、怠慢は衆惡の基なり、人は食はんが爲めに生れたるにあらず、衣んが爲めに生れたるにあらず。衣食何の要ぞとならば、之れ皆事業を成さんための資なることを思へ。人は働

く爲めに生れ來りし也。事業を除けば人生畢竟何等の意義なし。「成すなくして費したる一日は悔ゆべきの一日なり」と云へり。されば無爲の一生は悔恨すべき一生なりと云ふべし。勤勉は徳の一なり。之を缺けば徳を損ず。勤勉ならずんば卑屈賤陋の人たるべし。賢母良妻は勤勉の人ならざるべからざるは明白なり。故に女兒をして勤勉を愛し之を求むるの習慣を作らしむべし。習はやがて性となるを以て、若し遊惰怠慢の習をつくれば終に固性となりて、人の一生を損ふに至るべし。されば此時代より家庭に於ては、學科の復習の外に女兒の智能を啓發し、技藝を進歩せしむる樣の年齡相當の仕事を課すべし。勿論遊嬉は之を充分行はしめざるべからず。唯これを怠慢の氣なく行はしむるを要す。遊嬉を直に遊嬉ら敷行はしむべし。遊嬉は必要なり、能く注意して遊惰に流れしむべからず。

節制の習慣を養はしむべし。情を圓滿に發達せしむべし　物のあはれを知ることは、男女共に完全なる性格を作るの大要素なり。君臣の道親子の情、夫婦の愛、忠と云ひ孝と云ひ貞愛と云ふ、皆人間固有の美情の併發したるものゝみ。人情とは「物のあはれ」なり。感ずべきに感じ、心を動かすべきに心を動かし、泣くべきに泣くを心ある人とは云ふなり。枯燥せる理窟にのみ依りて冷淡死灰の如きは、之を心なき人、無情の人と稱して排斥すべきものなりとす。月に花に心のたのしみかなしみ起りて、悲しかるべきは悲しく、戀しかるべきは戀しきをきよき人の心とす。かゝる情あればこそ忠孝貞女の道も行るゝなれ。節を守りて義に殉するのこゝろざしも生ずるなれ。これうるはしき情なれども、固僻となりて中庸を失はゞ、一方に於

ては冷淡となり酷薄となり、他方に於ては放恣となり痴情となる。冷淡放恣無情痴情皆共に不義背徳なり。夫れ道義は大なる情を立てむが爲めに比較的小なる情を抑ふるものにして、換言すれば人情を完全圓滿に發展せしむるもの也。若し誤解して此の情を抑壓し芟除するものとなさば、大なる謬見とす。古聖人が詩三百を編して諷誦せしめられしは、畢竟詠歎讃美の間に物のあはれを知らしめ、人情を正しうせんとの意に外ならず。情は中庸を得ざれば不義となり、背徳となり、之を除去すれば道心を滅却す。人情中和を致して天地位し萬物育す。然らば兒女に能く物のあはれを知らしめ、情を圓滿に發展せしむべし。俗語を以て女子教育の目的を云へば、女らしき女を作るにあり女くさき女を矯正するにあり。女らしき女とは、女の知るべき物のあはれを知り、孝に貞に女子の本分を盡す女にて、女子の情の度にすぎ中庸を得ざるもの、之を女くさき女と云ふなり。女兒をして能く物のあはれを知らしめ、やさしく正しき心情を有する淑女たらしむる樣心掛くべし。

此やさしく正しき、女らしき女となる樣に教育せむには、文學的趣味を注入し、史傳をよましむべきなれども、是小學校時代の兒女にはあまり六ケしき事あるを以て、この方法は小學校卒業後の兒女をして、能く物の美點を感得せしむる樣務むべきなり。これやさしく正しき淑女をつくる所以なり。

閑雅婉美の態度を作るに注意せしむべし　女兒をして取りみだしたる風體なき樣に自ら注意するの習慣を作らしむべきなり。美は婦人の一大要素なり。婦人は、すがた、みなりをたしなまざるべからず。是幼よりたしなみを習はせざるべからず。み

なりをたしなむは禮儀なり、作法なり。なほ家庭に於て殊に注意すべきは、禮義作法なりとす。あまりに幼童に之をきびしくするは宜しからずと雖も、年頃に應じて之を仕付くべきなり。交友にも、父母たるものは注意を怠るべからず。交友の感化の大なる事は云ふ迄もなきことなり。世には女兒をして、卑猥なる樂器を弄び、淫靡なる唱歌を習はしむるあり。是輩の害毒を社會に流すことの劇しき事は、今さら云ふまでもなし。政府既に學校令を布き、兒童の教育を强制するに於ては、此學校教育を破壞する是等の事は、正に亦法令を以て禁ずるに充分のものと信ず。

此外種々述べたき點あれども、冗長をさけて小學校卒業後の女子教育を述べむ。

以上述べたることは、皆悉く父母の身みづから行ひて模範を垂れざるべからざる事也。かく模範を垂れて訓戒養成せば、獨り兒女が完全の人物となるのみならず、父母も亦德行方正の人となりて、一家和合し、富み榮え、子孫顯達して光榮福祉之にすぐるものあらざらむ。

（未完）



橋本むめ子

文學士　大町桂月

かつて明治九年、東京繪草紙にさへあらはされ、汎く世の龜鑑とたゝへられたる孝子、橋本辰次郎及びむめ女の兄妹は、栃木縣下野國安蘇郡富岡の民にて、母をますと呼び、祖母をせんと呼べり。

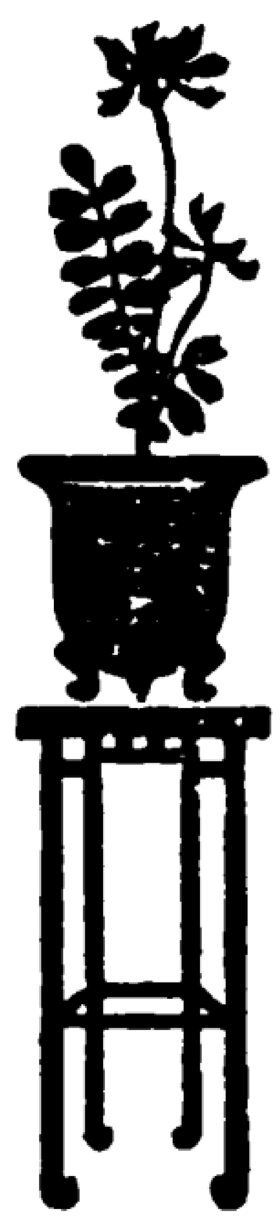
其父と祖父との名を詳にせず、共に養子に來りたる者なるが、祖父は祖母なる人が中年の折り、母をも捨てゝ家を出で、何處へか行きけん歸らぬに、祖母はひとり田に下りて事をとり、歸りては孤燈のかげ寂しく、機などおりて母を養ひ、長ずるに及び、某を容れて婿としたるなれば、もとより女の手一つに長き月日を送りし故、家いと貧しく、かつ〳〵朝夕をくらせしばかりなり。某入りて、春のあら田すきつ、かへしつ、力をつくして耕せど、追ひつくべくもあらず、いよ〳〵困窮に迫りぬるに、いとひはてゝ、遂に緣を絶ちけり。これ未だ兄弟が東西を分かぬ程の事にて、兄妹は實に父が面影をだも覺えぬ不幸の孤兒なり。

さらでもかつ〳〵世を送る家、夫に棄てられては、いよ〳〵困難を極め、路頭にも迷ふばかりなるを、祖母、母、共に勞働して、やう〳〵二人の幼兒とも四人糊口をしのぎしが、或時母起つて厠に入り出で來りしが、俄然うち仆れて、息もたえけるに、祖母をはじめ、幼兒どもおどろき、やう〳〵床に舁き入れ、醫師を招きて診察を乞ひしに、慢性子宮炎症にて、この病は如何なる治療法をほどこすとも叶ふまじといふに、家内いたく歎き、なほ醫師をあまた招きけるに、皆始めの如く云ひぬ。實にそれより母なる人は頭あがらず、頭痛はげしき樣子にて、始終眼を閉ぢ、物をもいはず、人なきをり、祖母と少しく話するのみ。如何にもあやしき病、もしは狐狸などの憑りたるものならむかと、祈禱醫藥手をつくしたれど、其効はつゆなかりけり。これ實に慶應二年七月のことにて、兄辰次郎はやう〳〵八歲、妹は七歲にて、何の辨まへもなき頃なるが、二人は天性至孝、いたく之

を憂ひ、母を看護し、またよく祖母の意に從ひて其命に背く事なく、兄は朝より祖母に伴はれ出でては、田の草を拔き、水をかへなどして、祖母と勞を同じうすれば、妹は終日母の傍に座して藥をあたゝめ、腰をさすりなどし、さま／＼に心を盡くして介抱せり。かくて、兄妹やう／＼年をつみて生長せしに、今は祖母はいたく老い、年來つかひつくしたる腕もはやきかずなりぬ。時に辰次郎は十二歲、夙に起きて田に下り、畠に出で、たゞ穀物蔬菜を取りては祖母と母とに供するを得るを以て樂みとすれば、妹は十一歲、みどりの髮のまだ短く、額にこぼるゝを、かゝん術はしらねど、はやく機おることを習ひおぼえて、朝にとく露もおかぬほどより起き出でゝ、まづ食を炊ぎそれより機にのぼり、祖母が用より外何も心に入らぬばかりに一心に織り、臥まちの月の上る頃までも、なほ臥さず、一年三百六十五日、元旦と雖も機杼の聲の聞えざる時はなく、二兒力をつくして、生計をとゝのへ、己れは飢餓を覺ゆるも、二人には好餌をあがなひすゝめ、手作と丹精とに獲たる新穀菓物を供し、老祖母が喜悅の顏色と、病母の愁眉を開くとを見るをこよなきたのしみとし、露霜いとはるゝ、撫子の盛りを、兄はたゞ雨にうたれ、風にくだかるゝを、つゆ其勞れたるさまを見せず、妹は、炊事を初め、病母が看護、汚穢の片づけ、殊に春秋晝夜、機に玉の緒をつくしても、曾て、一度も、機織り蟲のよを悲しと泣きし事もなく、祖母と母とを養ふより外、他念なかりければ、近里近鄕いたくそめそやし、事遂に縣に聞えて、明治九年四月、縣廳より兄妹を呼び出し、金圓を賜ひて、其善行を賞されけるが、爾來いよ／＼孝養怠らず、ます／＼はげみて、一は農

をとり、一は機をおり、兄は左に祖母が背を叩きて、其老いをいたはり、妹は右に母が腰をさすりて苦痛を慰め、互みに四方山の話などして、偏に病を慰めんとつとめ、實に病母あるを知つて、己が身體あるを忘るゝばかり、殊にむめ女は、片時も母が病床をはなれず、たゞ庭外の地をふみしは賞金下賜の砌り、栃木縣廳に召し出されし折りと暴風のため居宅を吹き潰され、かりに居を移せし折りとのみなり。

人、その謹孝、正勉なるを愛し、婚嫁をすゝむる者數々ありたれど、此老人、病母をおきて去るに忍びずとて、固く辭みて從はず、兄もまた、婦を娶らば、孝養を欠く處あるも圖るべからずとて、敢て親戚近隣のすゝめを容れず、兄妹誓て孝養を盡くし、介抱くまなくつくしたれど、母が病は癒ずして、遂に明治二十三年一月十九日みまかりけるに、兄妹がなげきはいふばかりなく、天に哭し、地に泣き、弔問せし人の袂をしぼらせけるとなり。實に母病の發せしより兄妹が心づくしの年を積む事廿有四年、其間の難苦は如何なりけむ、拙き筆にはつくしがたし。明治二十三年三月官遂に兄妹二人に褒章を賜はり、其善行を表彰せられたり。



海上の名花

文學士　濱田廉

○長石島の燈臺

英吉利ノーサン、バーランドの海濱を距ると遠からずして、すさまじき不毛の群島あり。その數約二十五ばかり、形狀廣袤倶に一樣ならず、世に

之を華蓮島と名づく。その中最大なるものを長石島と云ひて、グレース、ダーリングと稱する少女が、こゝに大膽なる事業を成しゝより、人口に膾炙するものとなりぬ。

長石島の一端に燈臺ありて、其下に番人の家族の住みし小舎あり。この外にこの島の住者と云へば、數萬の海鳥にして、或は岩が根に浮き並び、或は空中を鳴き渡れり。浮世の外なる島の景色は今も尙昔のまゝにして、グレースがその父母とここに住みし時と異ならず、この人げなき小島にてグレースはいかに暮を消しゝか。

あはれ閑靜なる生活よ、見渡すきはみ目も遙かなる海原より、寄せ來る大浪小浪の、濱邊にをたけぶ外は訪ひ來る人なく、語らふ友なく、英蘭のかしましき熱鬧を遠く離れて、浮世をよそなる仙境にぞありける。かゝる境に起臥するグレースは、浮世に求むる慾念なく、日影うらゝかなる日は、母と共に戶の前に坐して裁縫の手をとゞめず父は洋燈を拭ひつゝ、往來の船をまもるを常とす又嵐の吹きすさぶ夜は、親子三人爐の側に團欒して、篠つく雨の聲狂ひ騷ぐ風の音に耳傾けつゝ、過ぎし嵐の夜のことなど憶ひ起して、難破船の岩に碎けて、その船材繩索などの所狹く橫りし有様を回想せりき。

凡そ女丈夫と云へば、體軀偉大莊麗にして、黑み勝ちの眼鋭く、その音聲も擧動も男らしきを想像するものなれど、グレースはそれとうらうへにて、尋常の風采別に著しき點はなけれど、かくしてもかくされぬ天禀の怜悧と温厚と親切とは自らその容貌に現れたり。

○公道海峽の難破船

西暦千八百三十八年、玄冬十二月の某日、暮色蒼

然として遠きより來りしとき、長石島と華蓮島との間なる公道海峽に當りて。一艘の瀛船北進しつゝあるを見たり。そよ吹く軟風は正南より吹き來り、浪もやう〳〵高き荒海を航行せしものから、この瀛船のさきの港を出でしより、暫時にして一つの裂口を生じたり。されど大工は直ちに止るべしと思ひたれば、やがてさし措きたりしに、この海峽あたりに至り、裂口再び開きて、海水はすさまじく浸入し來れり。

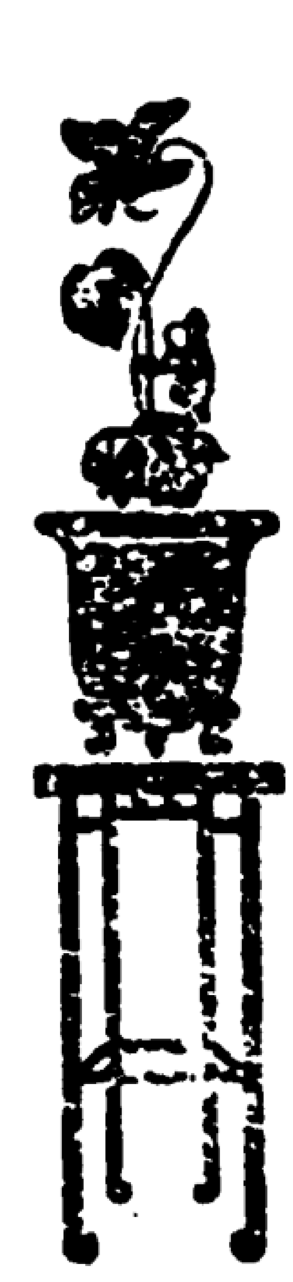
船員乘客の双手は悉く喞筒の柄にかゝりて、一意排水に盡力せしかども、海水の浸入はいよ〳〵烈しく、形勢やう〳〵穩ならず、濃き雲は海を越えて降りしきり、軟風は强風となりぬ。すさまじき空のけしきよ。濱邊をさして飛び去る海鳥の群よ。その他種々の徵候は、恐るべき暴風を豫報せり。この船の彼方此方に漂ひしとき、雪雨はます〳〵はげしく、一しきりきほひ起りし早手の風よ。逆卷く浪は山の如く、霧は文目も分かぬまでに立ち渡れり。汐はいとゞしく退きて、船は木の葉の如く飄揚して、賴すくなに見えにけり。海水は既に機關の火を消滅せしかば、曩に嵐を恐れて卸されし帆は、再び揚げられぬ。滿帆風を含んで、船體の傾斜おそろしきまでに甚しく、あはれこの船こそ風前の燈なれ、深底の鯨鰐時ならぬ犧牲を仰いで、珍味を味はんと待つなるべし。

日は全く虞淵に陷りぬ、夜色正に闌干たりしとき霧は少しく晴れたり。恐怖せる水夫は風上に當りて泡立つ大浪の淡黑き線を認めたり。華蓮燈臺の光はこの暗鬱の夜を鈍色に照せり。されど船は進まず浪は高し。嗟乎この幾十の人の子を奈何。海峽の一方は岩根こゞしき濱、又他の一方は鋭く

嶮しき島にして、その間にたゞよふ滊船は、宛も死の神の掌裡に陷りたるが如し。浪のまに／＼かしこにたゞよひて詮方つき、萬の望はこの運命短き船より絶え果てたり。噫この滊船よ、裂口より浸入せし海水のために沈沒するか。或は岩に衝突して破碎するか、二つに一つの斷末魔、哀れはかゝなき命なる哉。

曉の頃船は果して衝突して、滅裂し了りぬ。風と浪とはその難破船を吹き流して、一つの島の上にその船首を吹きあげて、堅き中甲板すら打破りぬ。退潮は舳を呑み去りて、たゞ艫のみ巖の上に殘れり。船長及び乘客の多くは底の藻屑となりて魚腹を肥やし、十二人の遭難者は九死の中に一生を得て、餘勇を振ひつゝ破船に縋りて、空頼なる救助を待ちわぶるこそ心もとなけれ。されど饑餓と疲憊はやう／＼増り來て、狂瀾頭上に碎くる毎に、かれ等を奥底に脅し去らんとす。すさまじきかな公道海峽の嵐踸、陰氣森々として、鬼哭啾々たり。

（未完）



西比利亞の孝女

宮館さだ子

『プラスコヴィー』は、やうやくにして、父の承諾を得、『ツボルスク』太守に宛てゝ、旅劵下付の願書を發送したる後、日夕門閭に倚りて、只管、其指令をのみ待ちけるが、いとも、切なる思の、神や憐み玉ひけん、六月あまりを經過したる或日のこと、旅劵を收めたる一通の封書は『ツボルスク』の太守より、父『ロポーロフ』に宛てゝ送達せられたり、此時に於ける『プラスコヴィー』のよろ

こびは、實に、譬ふるに物なかりき、されど、憐むべし、是れまた一時のよろこびに過ぎずして、父の强硬なる反對は、例によりて、毫も弛むことなかりき。

彼は天に叫び、地に哭し、はては悒鬱として病をなすに至りしかば、今や父『ロボーロフ』の取るべきの途は、娘の懇請を容れて、非常なる冒險の道程に上らしむるか、はた、また、飽くまでも其請願を拒絶し、終には最愛の一女をして絶望の極病の爲に自滅するに至らしむるか、二者其一を擇ぶの外なかりき、或日『プラスコヴイー』は例の如く、父に請ひけるとき、父は其決心の到底翻へすべからざるを見、妻に向つて言ひけるやう『最早此子の意のまゝに任すより外なかるべし』とて只途方に暮るゝのみなりしが、『プラスコヴイー』は、さしも執拗なりし父の、終に我が意を容るゝに至りしを見て、狂舞して打ちよろこび『父よ、御身は決して、妾の願を聽き容れたることを、悔ゆることなかるべし、妾は妾をして初めて此決心を起さしめ、幷に終に御身の承諾をも得るに至らしめたる、上帝の御恵に依り、聖彼得士堡なる皇帝の足下に伏し、親しく、特赦の恩命に接することを得べし』とイ、限りなき天祐の、常に其一身に纏はれつゝあるをば、確信して疑ふ所なかりき父は尙も我が子の前途を危ぶむの情に耐へず、何等の勢力も保護もなき貧民の子女が襤褸を纏ふて威嚴赫々たる皇帝の面前に咫尺することの、到底出來得べからざるものなることを、細に說き聞かせ、切に思ひ止まらしめんとはなせしかど、『プラスコヴイー』は飽くまで天祐の厚きを確信し、如何なる障礙も、得て之を妨ぐるに由なかりき。

『プラスコヴイー』は終に父の承諾を得てしより、

一日も早く其征路に上ることとの、萬事に都合よきを信じ、直に其準備に取り掛りぬ、されど、貧家の悲しさには、一家の全財産を擧げて、唯僅に一『ルーブル』（一ルーブルは我が壹圓六錢位に當る）を剩すのみに過ぎず、父は尚多少の旅費を作らんが爲に、百方苦慮する所ありしも、全く其効果なかりき、嗚呼此少額の金子こそは、實に、幾千哩の道程を踏破するに要する、一切の旅費にてありけるなり。

聖母『マリヤ』の祭日は、孝女『プラスコヴィー』の其兩親に訣別すべき、至慘なる門出の日として定められたり、出發の前夜此少女が其危險なる使命を帶び、明旦いよ／＼露都に向つて出發すべしとの噂、普ねく村内に喧傳せしより、村内の知人皆な『ロボーロフ』一家の詫住居に訪ね來り、口々に其計畫の無謀にして、危險なるを說き、切に思ひ止まらしめんとは爲したりき、唯だ村人の中最初よりして『プラスコヴィー』の考案に贊成を表したるもの僅に二人あり、常に言ひけらく『人々の擧げて成功すまじと確信したるものゝ立派に仕遂げ得られたるもの、敢て少なしとせず、思ふに彼の未だ聖彼得士堡に到達せざる前、其優しき孝心に感じて、彼を救助する有力ある保護者を發見するなるべし』とて、常に村人の說を排し、深き同情の念を以て、事の成行を觀望したりき。

明くれば、少女『プラスコヴィー』がいよ／＼其大膽なる遠征の途に上るべき門出の日にてありけり昧爽、此同情ある二人の村人が、訣別の爲め訪ね來りしときには、出發の準備既に整ひ、最後に父の手よりして、一『ルーブル』の銀貨一片を渡しけるとき、二人の村人は亦た各自の財嚢を傾けて、あらむ限りの餞を爲しぬ。『プラスコヴィー』は

強て其驅を還せしかど、深く其厚意に感ずる所あり、若し天祐の變の兩親に下るあらば、御身等兩名も亦た均しく之に酬ふことを得べし』とて、異日此厚意に酬ゆることあるべきを語らひける折しも、旭日地平線上を躍り出で、光彩眩ゆきばかりに、彼等の集ひたる室内に投射せしかば『プラスコヴィー』は最早出發の時到れるを告げ、やをら身を起して最後の訣別をなしぬ。

あゝ慈愛限りなき、兩親の膝下を離れ、住み馴れし舊廬を後にし孤影飄然として長途に上りたる時の彼の感慨は果して如何なりしぞ、顧みれば父母門に倚り、双影動かざること石の如く、遠く我を目送して、斷腸の思に耐へざるが如きものあるを見て、さしも氣强かりし彼も、胸中萬斛の感に打たれ、血涙の滂沱たるを覺えざりき。

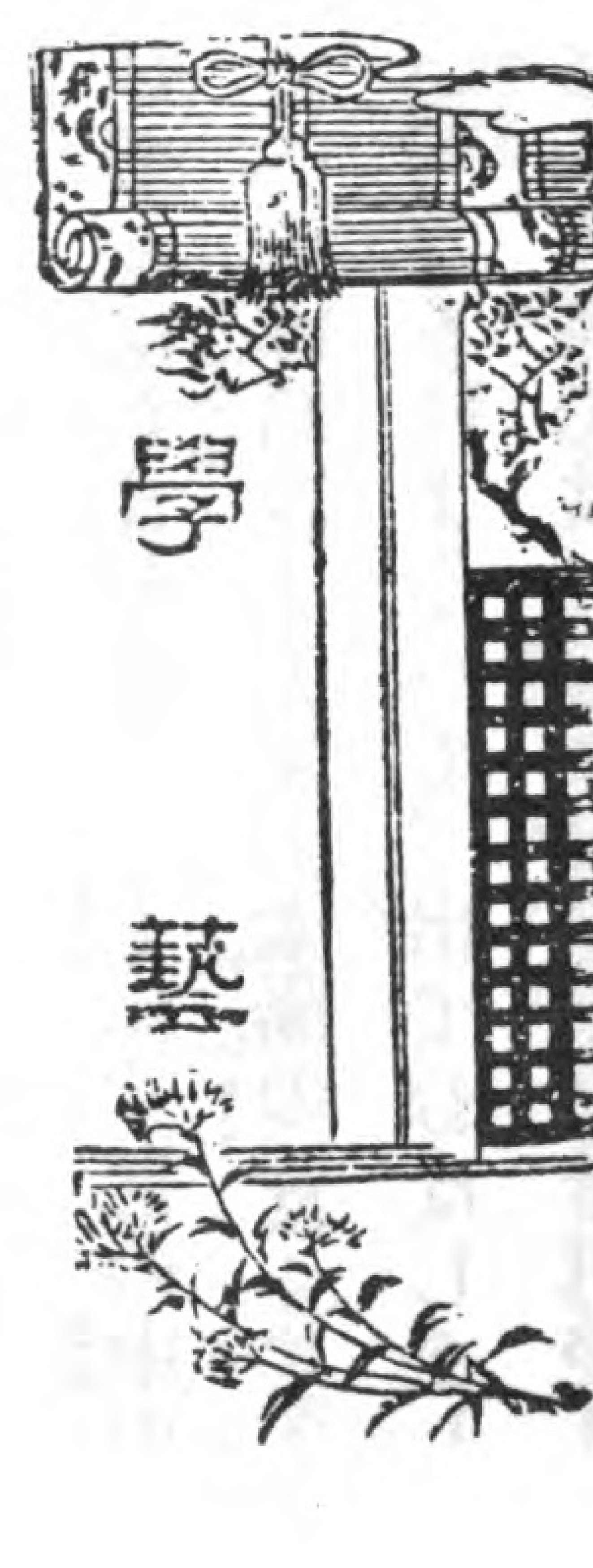
遠く前程を望めば、寒烟斷續して鷄犬の聲聞ゆることなく迢々たる荒原天と相連なりて窮まる所を知らず、識らず天涯何くの處か是れ露京?

『プラスコヴィー』の最初の旅行日には、幸にして女の道伴れを得、且同夜は其家に一泊せしも、翌日よりは全くの獨り旅にて、剩さへ道不案内なりしかば、心中少なからざる危惧の念を抱きたりき、同日彼は數時間の道程を歩みたる後、端なくも路の左右に岐れたる處に來り、其孰れに由るべきやを判定するに苦しみ、路傍に佇立し居りたるに、幸にして該處を通行するものありしかば、彼は其人に對し眞面目に聖彼得士堡に到る路の孰れなるやを尋ねたるに、唯だ苦笑するのみにて、速に答へんとも爲さゞりき、蓋し露京を隔つること幾百哩の遠きにありて、斯る問を爲すことのいとも馬鹿げたることなりければなり、『プラスコヴィー』に於ても己が質問の餘りに突飛なりしことを

覺り直に亦た『キーヴ』に至る路の孰れなるやを尋ねたり。されど、『キーヴ』と稱するは聖彼得士堡とは稍々其方向を異にし、同一の路に由りて達すべきにあらざれば、該通行人は其質問のいよ〳〵出でゝ、いよ〳〵奇異なるに失笑し、答へて言ひけるやう『只御身の好む所に從ふべし、孰れの路に由るも終には『キーヴ』にも、巴里にも、はたまた羅馬にも達することを得べし。されど、よく其目的地に達することを得るには、一に僥倖の力に依賴せざるべからず』と。

（未完）





國文學講義

紫式部日記講義（三十八）

井上賴文

五日の夜は、殿の御うぶやしなひ、十五日の月、くもりなく、おもしろきに、池のみぎはちかう、かゞり火どもを、木のしたにともしつゝ、とじきどもたてわたす、あやしきしづのをの、さへづりありくけしきどもまで、色ふしにたちがほなり。とのもりがたちわたれるけはひも、おこたらず、ひるのやうなるに、こゝかしこの、いはがくれ、木のもとごとに、うちむれてをる上達部の、ずゐ

じんなどやうのものどもさへ、おのがしゝかたらふべかンめることは、かゝる世中の光の、いでおはしましたることを、かげに、いつしかと、おもひしも、およびがほにこそ。

そゞろに、うちゑみこゝちよげなるや。

まして、殿のうちの人は、なにばかりの、かずにしもあらぬ、五位どもなども、そこはかとなく、こしも、うちかゞめて、行ちがひ、いそがしげなるさまして、ときにあひがほなり。

○釈　義

○五日の夜　五夜の御祝なり。五夜以下は、道長公の奉仕せらるゝ御産養なり○とじき　屯食は、河海抄に、つゝみいひといふ物なり、下臈に給ふ飯なりとありて、今いふニギリメシの類にて、包みたる飯なり○たてわたす　屯食を載せたる机などのやうなるものを庭上に立列

ぶること○あやしきしづのを　賤しき下司男○さへづりありく　下司男らが、いやしげなる言葉にて話し歩くをいふ。さへづるとは、下臈のものいふさまを、鳥などの啼くに比していへるなり。源氏物語須磨の巻に、あまども、あさりして、かひつ物もてまゐれるを、めしいでゝ御らんず云々。そこはかとなくさへづるも、心のゆくへは、おなじこと、なにかことなると、あはれに見たまふなど見ゆ○とのもり　主殿寮は、宮内省の被管にて、殿庭を洒掃し、薪炭、燈、篝火などの事を掌る役所なり○世中の光　皇子の御降誕あらせられたる事をさしていへり○いでおはしましたる　上に、世の中のひかりといへる椽語によりて、太陽のはなやかにさしいでたるによそへて、出でおはしましといへるなり。出では、俗に御出來なされたといふ

意〇およびがは　願の叶ひたる顔色〇こそ
釈は、こその、こは、かならず術あるべしといへり。されど、こゝは、下に、あれといふ辭を含めたりとみて文意もとゞこほらぬこゝちす〇そゞろ　清水氏の釈に、そゞろは、伊勢物語に、すゞろなるめを見ることゝ思ふにとあるを、師（藤井高尙）の新釈に、さはあるまじきめを見るといふことにて、云々、　大和物語に、すゞろなるものに、なにか、ものおほくたまはん、といへるも、さはあるまじきものにと見て、よくかなへり、と、いはれたるによらば、物かずならぬ隨身などやうのものゝ、さは思ふまじきを、猶思ひしことのおよび顔に云々の意なりといへり〇なりや　やは、よといふにおなじことなり。

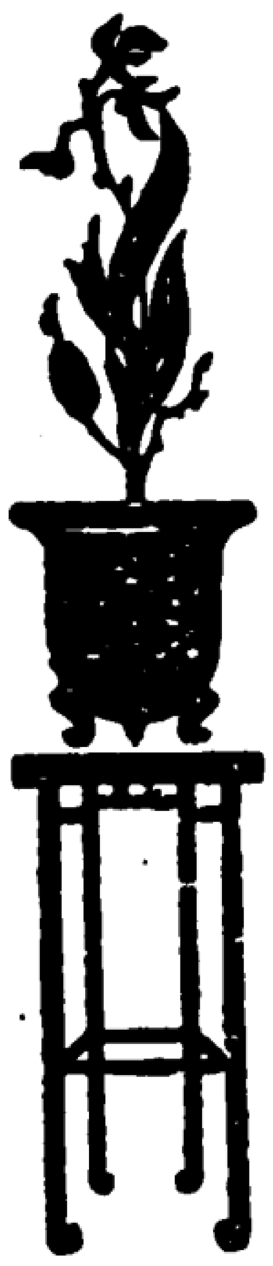
〇譯　解

五日の後産養の夜は、殿（道長）の奉仕せらるゝ、御産養あり。
十五日の夜の月影くもりなく、おもしろきに、御庭の池の水際ちかく、篝火どもを、木の下ごとに燃しつゝ、景色も一段と花やかなるに、庭上には、また屯食を載せたる机どもを立て列ね、また賤しき下司男の、がや〳〵と話しながら歩く樣子などが、はれ〴〵しく、かゝる折には、其の場の興味を添ふる樣に見ゆ。
また主殿司の役人が、おのれ〳〵の受持ちたる場所〳〵の篝火を、消えぬやうに守り居る樣子も怠らず、明かるくて、さながら晝の樣なるに、此處、彼處の、岩の陰、木の下毎に、集りて居る上達部のとも人なる隨身などの樣のいやしき者どもさへ、おもひ〳〵に、今日のめでたさを談しあひて居る樣に見ゆるは、實に、世の中の

光とも仰ぎたてまつるべき、皇子の御出生ましましたる事を、これまで、かげにて、何時のことでアロウか、何とぞ、早くと思ひし念願の叶ひたる顔貌にて頗る得意のさまあり。

されば、いづれも、みな、何となく心もちよきやうすなることよ。

かく、他人さへ喜べるを、まして、殿（道長）の家に仕へて居る人は、取るにも足らず、人の數にも入れられぬ位なる五位どもなども、彼方此方となく腰打屈めて、東西に行きちがひ、いそがしげなるやうすして、ニコ／＼と時を得顔なり。



和畫通信講義（第卅二回）

山崎彩峨

墨畫にては、淡墨にて、花瓣を畫き、莖は挾墨にて畫く。葉は、淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して畫くを例とすれど、時には、また、濃墨にて葉縁に打つこともあり。かくて、花心、葉脈は、濃墨にて入るゝなり。

顏料なれば、先、筆を薄き胡粉に浸し、藍か或は藍に少量の胭脂を和したるものか、もしくは、極めて薄き黄がちの青色かをその先きに附して畫く。花心は、黄がちの青色にて畫く。莖は、花心の青色より、稍藍暈多き青色を、藍にて挾墨となして畫く。葉は、鮮緑色にて畫き、藍墨か濃墨かにて線を入るゝなり。

花心





葉脈



ラムネの話

M M 生

ラムネは英語のLemonadeと云ふ詞から轉化したものださうであります、けれども、レモネードはレモン水と云つて市に賣つてゐますが、印度や亞米利加に出來るレモンと云ふ密柑によく似た果物から取つた汁を、酒精や砂糖分のある水にとかしてつくります。

ラムネに色々製り方がありますが、大抵は炭酸ソーダをつかひますから、英語ではSoda-Water（曹達水）と云ひます。

普通に行はれます製り方は、炭酸曹達に硫酸を加へまして、さかんに炭酸瓦斯を發生させ、丈夫な鐵の器械に入れおきまして、ラムネ瓶の中に甘みをつけた水に橙皮油の樣なもので香をつけましたのを適當に入れまして、此の中へさきの瓦斯をつよい力で無理におしこんで、水の容積の大抵五六倍のものをとかします。

そこでこの瓦斯は、幾部分は水にとけて炭酸と云ふものになります。それだからラムネをのんだときに舌をさす樣な、酢味を感ずるのであります。

此の炭酸と云ふものは、炭酸瓦斯にある傾をもつてゐます上に、無理におしこまれた炭酸瓦斯は、どこかすきまを求めて瓶の外へ出でやうとしてゐますから、ラムネ瓶の口にあります硝子球を内の方からおしつけて、たやすく落ちないのであります、口ぬきで硝子球をおとしたときに、さかんにラムネ水から泡が出ますのを見ても、此の理は解ります。さてラムネ水にとけてゐる瓦斯は、いよいよ炭酸瓦斯であるかないかを證據立てますには、石灰を水にとかし、上澄の方の透明なものをとり

まして、その中へラムネを少しばかり入れまして
ふりますと、すぐに牛の乳の樣な白い濁り水が出來ます。これは石灰と炭酸瓦斯とで炭酸石灰と云ふもので、大理石や石灰石や筍石鐘乳石やは、皆此のものから出來てゐます。

そして一たん白い濁り水が出來た中へ、又少しばかりラムネ水をつぎますと、今度はすつかり白濁がきえて、元の通りの透明な液體になります。これは炭酸石灰に炭酸が結びついて重炭酸石灰と云ふ水にとけやすいものになるからであります。此の重炭酸石灰を含んだ水を硬水と云ひまして、此の水で石鹼をつかつても泡がたゝず、石鹼がむだにつひへてしまいますから、一度湯にわかして炭酸瓦斯をとつてさきの樣な白い濁り水にするか、又は石灰を入れて、炭酸石灰にして、之を漉して用ゐるのであります。鐵瓶や茶の湯に湯垢がつきすのは、重炭酸石灰をふくんだ水を入れて湯を煮ます際に、やはり炭酸瓦斯が湯氣と一所にとんでいつて、炭酸石灰がだん〱につくからであります。

ラムネ水の中の炭酸瓦斯が、炭酸になつて反ると云ふは、青い色の試驗紙をラムネ水にひたしますと、赤くなるのでも知れますし、又のんだときに酸味のあるのでもたしかに酸があると云ふ事はわかります。

何せ夏分ラムネを呑んだときにすゞしくなるかと云ひますと、凡て液體が瓦斯體になりますには、大變に熱がいるものでありますが、ラムネもその中の炭酸が口の中から腹へゆきます間に、咽喉食道や諸方の熱をとりまして、瓦斯體になりますので、たゞの水をのんだときよりも、割合にすゞしく思ふのでありまして、沐浴をした後から、體が

すゞしくなりますのも、エーテルやユヂウムチンキをぬつたときにすゞしく感ずるのも、これと同じ理屈であります。

ラムネは、かう云ふ工合にして出來てゐますから、別に害になるものを含んではゐませんけれども、夏分は、ものが凡て腐敗しやすい上に、水が純粋でないときには危険でありますから、決して舊いのはのんではなりませぬ。田舍にまゐりますれば、あまり信用が出來ないラムネがありますので、近來は炭酸瓦斯を氷の様にしたのをもつて、旅行さきで水に入れて呑む人があります。

炭酸瓦斯が、空氣の中に澤山出來ますとき有害な事は誰でも知つてゐる處でありますが、それにも係らず、うまく利用して、害處か、夏分の飲物としては欠く事の出來ない程有用なものにする様になつたのは、全く學問の進歩した御蔭である。



海水浴の話

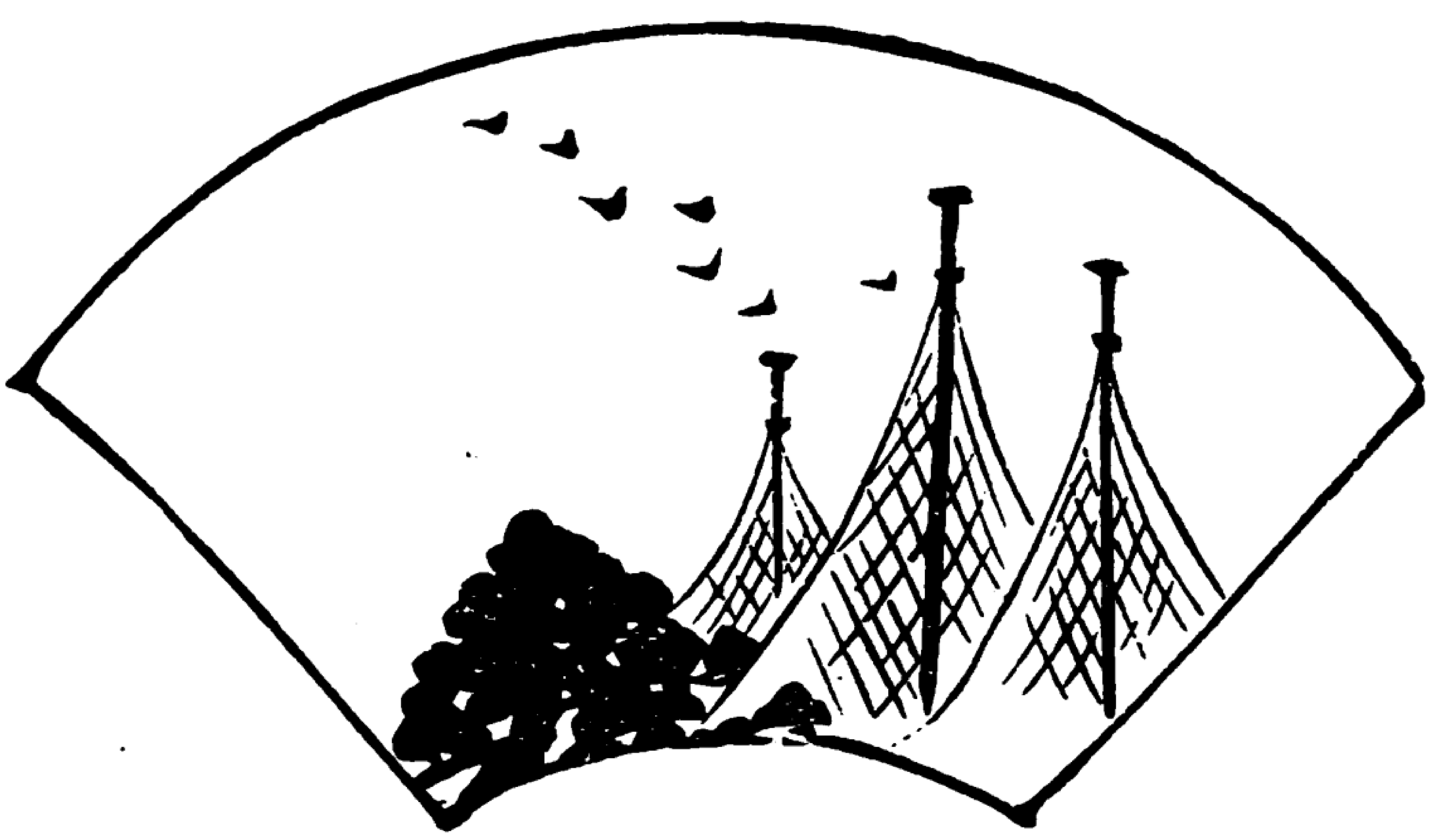
醫學士 高田不非

◎海水浴の話ですか、少し季節おくれの氣味ですけれども、例年ならば、燬くやうな炎熱に、肉溶け骨ゆるみて、身躰の置き所もない筈の、土用のさなかに、虚弱な人は、袷羽織でも引つ張らねばならぬといふ、不順な氣候、東海道沿岸は申すに及ばず、常磐一帶の海水浴場も、今の様子では、殘暑が當てだと申す位ですから、おくればせに極々手短なお話をいたしませう。

◎全體海水浴は、温浴の様に、後で身體の倦怠を

覺えないのが特長でして、假令海水に浴さないまでも、鹽分が多くて、濃厚で、壓力の強い、海の空氣を呼吸するばかりでも、至極身體の爲めになるのであります。その譯は、海水の温度と體温との差が甚しいので、海水の温度が忽に體温を奪ひ、變轉極まりない波濤の爲めに、血液の運行が盛になつて、自然に新陳代謝機を活潑ならしむるといふ理屈になるのです。

◎夫で、普通海水浴を行ふべき時の心得方を申しますれば、先づ、七月中旬から九月の下旬迄は、空氣の温度と海水の温度に、大した差違がありませんから、この期間が海水浴には最も適當な時期で、入浴は一日に三回位が通例で、その時間



は三十分から四十分間を適度といたします。

◎海中へ這入る時には、手拭か何かで頭部を包み、兩手の指先をぬらして、兩方の耳を兩三度しめすことが肝腎です、而して海浴中に、冷氣を感じる樣な事がありましたならば、一先づ砂の上へ上つて、温まるのが宜しうございます。

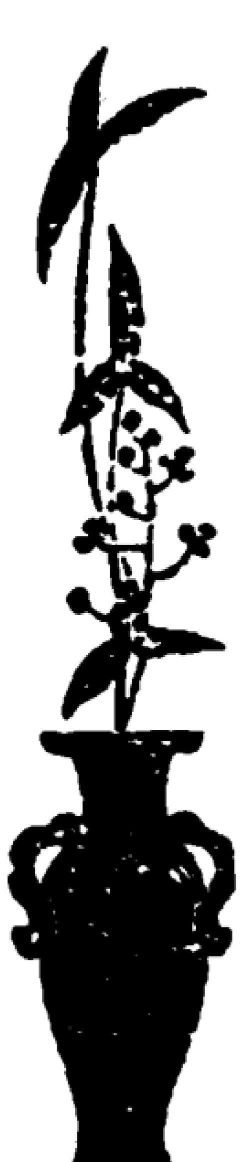
◎浴を了りましたら、直に湯などに這入つて、殊更に、折角の鹽分を洗ひ落して仕舞はずとも、乾いた手拭を以て、充分に身體の各部を摩擦するのが、却てくすりになります。夫から海水浴をすると、非常に食欲が増進するものですが、いくら空腹を感じましても、無暗に腹一抔詰め込みますと、身體に障りますか

ら、よく〳〵注意して、急激に大食をしてはいけません。

◎平素強壮の人ならば、朝飯前に入浴しても差支はない位ですから、朝はいくら早く起きても宜しいのですが、夜分はなるべく早く眠に就くやうにするのがようございます。

◎子宮病杯をなやむ婦人方は、腰部を海水に浸して、夫から燒けた砂の上へ來て、砂を腰部へふりかけると大層効能があるのです。六才未滿位の小兒は、強て入浴させてはいけません。

◎以上が在り來りの海水浴心得でございますが、胃弱の人、神經過敏の人、感冒の習癖ある人、肺病初期の人、リウマチスを患ふる人、憂鬱無聊の婦人等はいふまでもなく、健康の人でも、夏期に於ける保養としては、波靜かにして水清き邊に、海水浴を試みるのが、至極宜ろしいことであらうと思はれます。



慈母と愛兒（つゞき）

みむら

●生兒の大さ

前回述べたる各條を堅く守れば、かの世の諺に「案ずるより生むが安し」と云へる如く、げにもいと安〳〵と何の苦勞心配なく、玉の如き愛兒は生れ出づべし、かく胎内前より注意に注意をかさね、安らかに生れたる愛兒の大さは、

●●身長＝＝＝歐洲人は大凡男兒一尺六寸五分、女兒一尺六寸にして、滿一年に達すれば、六寸五分を増し、二年には二寸九分三年には二寸三分、四年乃至五年には二寸一分、以降十年間は一寸九

分位づゝ增加するを常とす、されば滿六歲に至りて三尺四寸三分、滿十四歲に至りて五尺二分となるの割合なるが、我國の兒童は統計上少しく少さきが如し、則ち男兒は一尺六寸、女兒は一尺五寸五分を普通とし、年々增加の度も上の比例よりは少なかるべし。

●●**體重**＝＝歐州人は七百九十八匁より百三十八匁位なれども、我國の兒女は、大凡男兒七百六十匁、女兒七百四十五匁位の如し、

茲に注意すべきは、此體重たる出生の當時より日々減量するものにて、人乳を與ふる兒は、第三日乃至第四日目に其減量を止め、第四日乃至第五日より增量を始め、第七日乃至第十日に至り、始めて初量に復すれども、牛乳等にて養へる嬰兒は、減量幷に回復の日數など更にこれより長し、されば生兒は生れて數日間は大にやするを通例とすべければ從つて大に注意を與へざるべからず、能く注意して、此減體量を回復せし後は、增量實に多く、健康なる兒は、一年の終に二貫四百目位より二貫五百目に達し、滿二年の兒女は三貫目に、滿三歲の兒は、三貫三百目に達すと云ふ、

●●●●**頭圍及胸圍**＝＝西洋人は大凡一尺一寸あり、我國の兒女は一尺五分を平均とし、七ケ月を經れば、一尺四寸五分となり、廿一ケ月にて一尺五寸六分とあり、略々胸圍と同大にして、同等に發達するが如し、頭は人智の根元、胸は人體中大切の機關を包藏する所あれば、其大小には大に注意せざるべからず、特に生兒は比較的大頭を有するものあれども、餘りに腦髓を刺戟し、之を過勞せしむれば、益々之を增大せしめて、遂に愚鈍に至らしむる事あれば、頭の大ならんより

は、寧ろ胸部の大ならん事をば心掛くべし、然かせんには、衣服などなるべくゆるやかなるを主とし、臥せしむるにもかたく緊束すべからす。

（未完）

挿花の話（承前）

小畑いく子



「一」の見かへり、と申す形があります。それは材料の都合に依りて「一」の頭のみにて自然に枝が分れて小さく、本花の形をなすべき枝を持て居る事があります。其分れた枝をかりに「一の分れ」と號けて説明致します。其「一の分れ」がいづれも捨てがたく、されば迚て共に用ゐるにはあまりに強さに過ぎて、安定上引き倒さるゝ感じを起すこととなります。其場合には、上部の枝即ち「一」の尖端となるべき處をもと矯め來りた反對の方向に矯め返し、小さき「一」をこゝに造りて、全體の形の逆に本花の小形を造ります。これを俗に見かへりと稱します。これは元來付枝より生ずるものなれども、草物などに至りては、故意に此形を造りて全體の平均をとることがあります。「ながし」物などの場合には、

多く此種を用ゐることがあります。

高ながし及び中ながし

本花「見かへり」の條に述べました通り、材料と塲合とに依りて生じました本花の變形であります。それは本花第三圖に示せる如く「一」の枝の上部に當り、自然に出でたる「一の分れ」が「見かへり」のよりも猶強く長きこととがあります。それを切りとらずして、其まゝに長く引きたるに始まりましたるものでありまして、段々變化に變化して、草木とも塲合に依りて別の枝を用ゐても、ことさら是を長くする事があります。これを高ながし、或は中ながしと申します。此ながしの枝の長くなるだけ全體に變化を生じます。それは力量の平均上より自然全體が前にかゝらねばなりませぬ。而して「一」の尖端は「見かへり」の如く反對の方向に矯め返して、花器の中心よりながしの方へ多くよらぬ樣に致さねば引倒さるゝ感が見えます。ながしの枝の高低に依て、高ながし中ながしの區別があるのであります。其ながしの枝が「一」の枝の半程より出た時は、これを中ながしと申まして、それより高く出たのを高ながしと申すのであります。またながしものゝ「二」の枝は、可成短く使はねばなり



ませぬ。大抵「一」の枝の半若くは夫よりも短く致じます。「三」の枝もやはり短く致します。總て圖をよく御覽になると分ります。

凡そながし物は、草木とも其性質によりて出來る者にて、例ば、這杉、金雀子、或は梅の如きはながし物に適しますが、紫苑、女郎花、松、槇の如き直なる性質の者を故意に造るは宜しくない。其は度々前に申したる挿花の本旨に背きます。其等詳しい事は各論の條に讓まして、玆には單に花形ばかりの説明に止め置きます。（つゞく）



裁縫の栞

野口裁縫專門女學校長　野口兼吉

○裁縫の心得

凡そ衣服を仕立てるには、その着手前に、必ず反物の寸尺を改むべし。新らしきものにても、古きものにても、仕立てる前には火熨をかけ、仕なしをすべし。新らしきものにても、往々織きず、しみなどあるものなれば、表面に出でぬ樣、よく〱注意すべし。又、古きものは、色變りの箇所あるものゆゑ、見

えやすき所に現はれぬ樣、氣を付けて、成るべくは、晝間のみにして、夜間は見合はすをよしとす。

○綿入の心得

綿を入れるには、普通男物なれば、眞綿二十五匁、木綿綿女物摸樣染拔なれば、五十匁を通例とす。木綿綿は袋にて極めるものゆゑ、各々適宜に入るべし。綿は一蒲團丈は、凡そ四尺八寸を以て通例とす、三布蒲團布につき、三百目を入れるものなれば、其の外すべてこの割合をあれば、九百目を入れ、其の外すべてこの割合を以てすべし。夜着は、綿二貫目を入れ、小夜着は、一貫三百目を入れ、かいまきは八百目を通例とす。

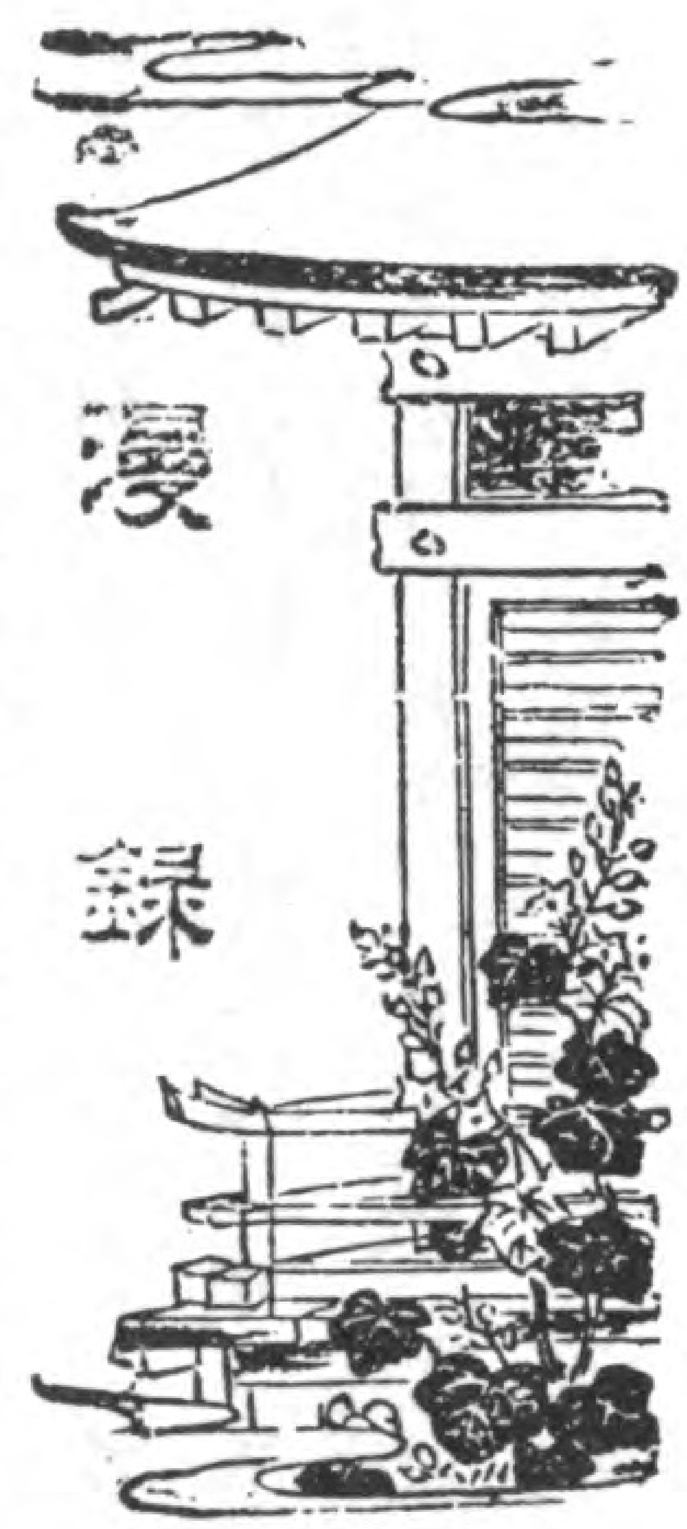
○襟丈を早く知ること

普通女物は襟方を二寸六分あけ、丈四尺上りにて襟下二尺なれば、襟丈二尺三寸つき、丈三尺九寸にて襟下二尺なれば、襟丈二尺二寸つき、丈三尺八寸上りにて襟下一尺九寸あれば、襟丈二尺二寸つき、丈三尺七寸にて襟下一尺八寸なれば、襟丈二尺一寸つき、大いなれば褄に切下ぐるゆゑ、襟丈二分又は三分長くすべし。

普通男物なれば、襟方を二寸四分あけ、すべて丈三尺七寸上り、襟下一尺八寸なれば襟丈二尺一寸九分つき、丈三尺六寸上りにて、襟下一尺七寸なれば、襟丈二尺一寸九分つき、丈三尺五寸上りにて、襟下一尺七寸なれば、襟丈二尺九分つきと定め、襟を上げる時、又は下げる時は、その割合にて仕立てるものと知るべし。

○下着の仕立方を知ること

下着を仕立てる時は、上着の身の丈より一分つめ、袖丈を二分つめ、うしろ身巾を二分つめ、前身巾を二分つめ、襟方を一分つめ、襟丈を二分つめ、前のだきの巾を一分つめ、其の外は上着通りにてよろしく、上着糸織、結城紬の類にて、下着縮緬のたぐゐなれば、身の丈を二分か、又は三分短かくするをよしとす。(同校柿沼くま子筆記)



女子服飾の沿革（十二回）

椎園信成

○男子装束着用次第

○禮服（天子着御）
玉冠。大袖。小袖。單。表袴。裳。綬。玉佩。牙笏。襪。烏皮舄。

○束帶（公卿着用）
冠。赤大口。襪。表袴。單。衵。下襲（裾）半臂。袍。石帶。魚帶。帶劔。平緒。笏。靴。

○衣冠（公卿着用）
冠。下袴（或腰次）。襪。指貫。單衣。（或帷子）位袍。腰帶。衛府劔（餝革緒劔）。檜扇（或蝙蝠）。淺履。

○直衣（公卿着用）
烏帽子。下袴。指貫。單衣。直衣。腰帶。檜扇。

○小直衣　○狩衣　○直垂　○素襖　○水干

○女子装束着用次第

○晴装束（一云十二單則改正服也）
内衣　白練緯、若年紅梅　紅袴　平絹板引謂緋袴
單　綾、文幸菱、色、赤或青、　打衣　綾、文重菱板引色紅、又は萌黄
五衣　綾文色不定裏平絹　表着　浮織物文色不定裏平絹
唐衣　二重織物色不定裏綾、文重菱、板引　裳　白穀織桐鳳凰の袷
大腰　引帯浮織物、文簾二霰裏白綾文繁菱　掛帯　唐衣に同じ
大垂髪　釵子平額　衵扇　扇板數廿五枚

○褻装束（一云小掛姿即内々之服也）
内衣　打袴　緋袴也　單　打衣　五衣を着することもあり

表着。小内着浮線物色文不定

○采女装束

内衣。緋袴。單。

袷衣。掛衣。

大垂髪。釵子平額。

童装束　男童女童共に通用す

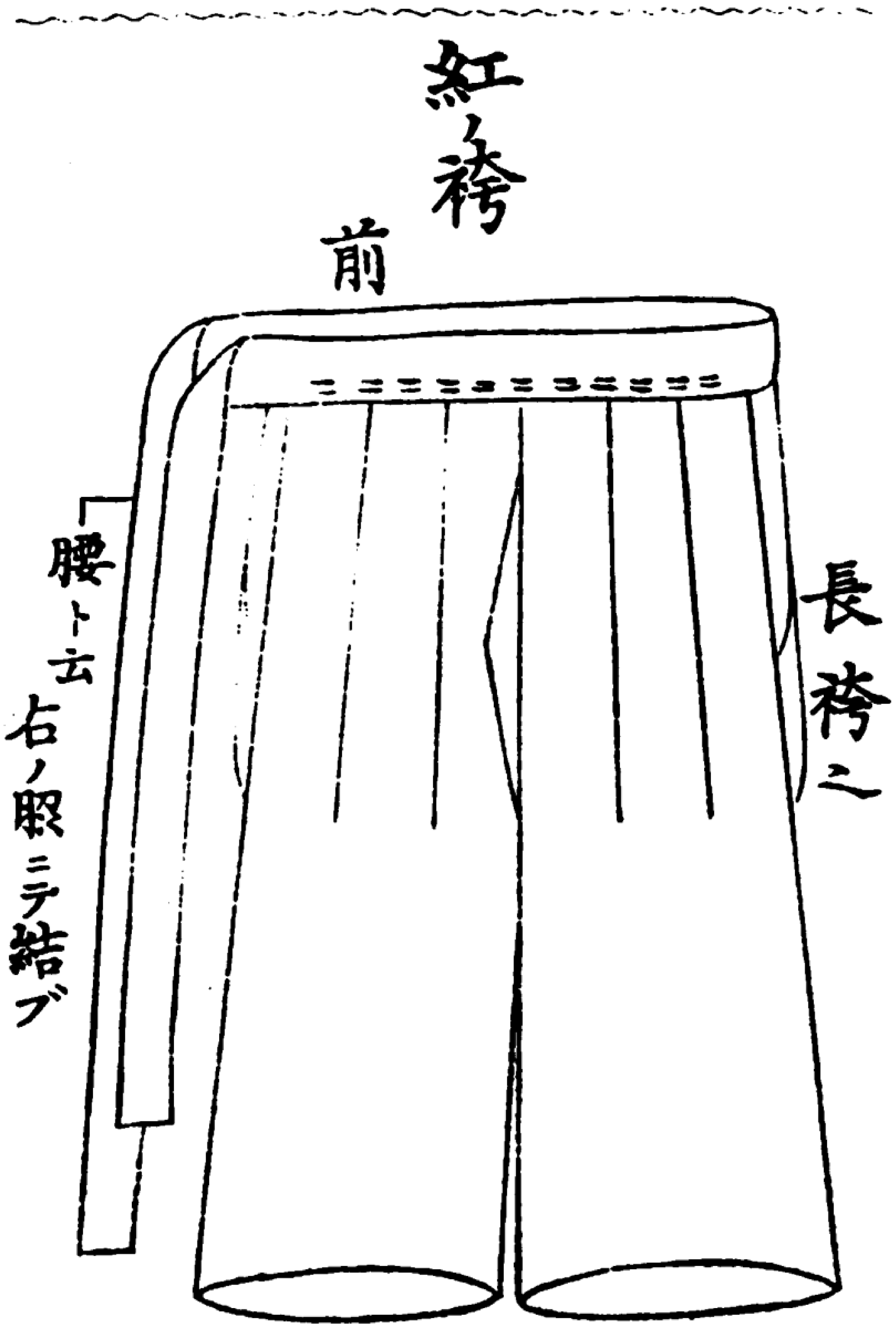
細長　水干

以上記しましたのは其概略でありますが、此制は此時代より通じて徳川時代に至るまで、用ゐられたのでありますから、少し長くはなりますが、一々圖を擧げて説明いたしませう。併し男子の方はこゝに必用がありませんから、略きます。

先づ婦人の禮服、即ち晴の装束から説明いたしませう。

一、内衣――丁度小袖に當るべきもので、地は白の練緯である。即ち一番最初着る服である。

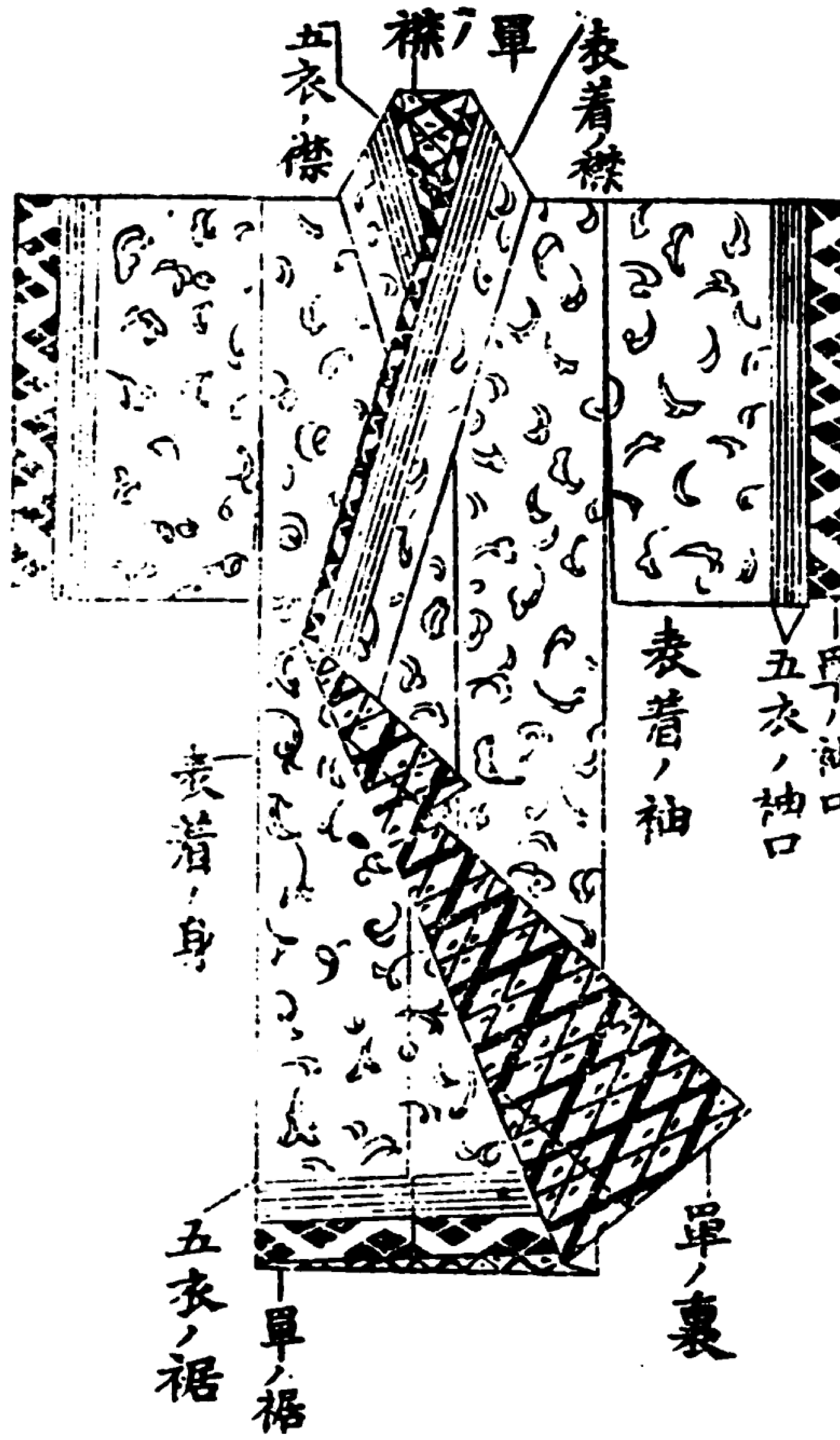
二、紅袴――打袴或は緋の袴とも云ひまして、地質のこわ〳〵したのを張袴とも云ひます。こは晴の時も褻の時も必ず着用するものであります。地質は一定しては居ない。其丈けも着用する人の、身の長短によりまして定まつて居ない。其製法は圖に就て御覧下さい。



三、單――名の如く單衣で在つて、内衣の上に着

用するものである。地は大抵綾で、文は幸菱通例としてある。色も夏冬に依て違ひますが大抵紅或は萠黄を用ゐ、夏は板引と、冬はねりひとへを着用するのであります。

（單、五衣、表着、着用之圖



（挿圖參照）

四、打衣――表着の下に着用するものであるが、通常は畧して用ゐなかつた樣子である。故にこれは、褻の裝束の條に說明いたします。

五、五ッ衣――表着の下、單の上に着用するもので、表は何色でも同じ色なる衣を五つ重ねたものである。裏には一枚々々に紅の平絹を付け裾及び袖口には、少しづゝの綿が這つて居る。又色變りとて五枚ながら別の色を重ねたのもある、地質は大抵綾であるが、文からは四季折々人々の嗜好に依て、一定して居ない。（挿圖參照）

六、表着……五衣の上に着用するもので、必ず浮織物を用ゐます。五衣よりは丈けも袖幅も短かく作つた者です。文から及び色合は一定して居ない。

（挿繪參照）

筆のしづく（二）

文學士　田淵芙蓉

徳川の流れ末清く、女大學などの教草世にあらはれし時代はさもこそあれ。初世漢學の勃興せしこの方、頓にをみなへしの花も咲き出で丶、婦道もやう〳〵確定せられにたれば、ゆかしき匂ひを放てる貞女烈婦、濱の眞砂の數々あれど、その上平安朝に遡れば、なか〳〵に口惜しき事のみ多かるめり、到るところみだれがましき行爲行はれて婦德を全ふせしもの曉天の星に似たり。さればにや、其苦樂の志を舒べし歌の如きも、いまはしき文字を連ねたるもの實に少なからず。世に古今集に修めたる一千餘首中、戀歌を以て其精粹となすもいかで之を否定するの辭あらむ。然れども男は恣に跋扈して女はあはれ果敢なき身、殆ど囚獄にいましめられたらむ境遇、偶々比翼の交をなし、連理の枝をかはすといへども、あだし男の常として、心に秋風吹き初むれば、赤繩の結び解けて、茲に班女が閨の怨を懷く。時に或は女子の勢力を振ひしものあれども、おほむね男子の玩弄物たりしに過ぎざりし也、嗚呼われ今その多くをいふを欲せざれども、花はづかしき纎弱女が、容色衰ふると共に敝履の憂目に遇ひしもの相接せしを見て、一滴のあつき涙を灑がずんばあらず。されど、熱血をしぼりし歌はよく人を感動せしむるものなり。かゝる場合に臨み、歌を夫に送りて破鏡長く僅に止まり、夏の夜の短き夢をかこつもの踵を接して起りぬ。誰か歌を閑文字として斥くる者ぞ、男女のなかをやはらぐる歌德、豈また尠く少にして已まむや。

世は平安朝の頃とかや。荒夷とまでそしられし下野の片ほとりに詫住居せる夫妻ありけり。その名は知れざれども、共に心優しく和光堂に滿てり。されど果敢なきは男の心なるかな、聊かの事より二世を契りし妻を捨て丶異妻の許に住めり。あはれなるは妻の身の上なり。關睢の夢破れたるだに煩悶やる瀨なきを、無情き夫はなほ飽き足らず、やがてはその命脈をも縮めむとす。其妻の許にありつる調度家具の類を悉く新らしき妻の許に運びぬ。これを目睹せる妻の心やいかなりけむ。憤怨の焰內に燃えたれども、さすがは鄙めづらしき名花。いかでか徒に怒を移さん、苦しき涙をのむでたゞ己をせむるのみ。云はぬは云ふに勝る苦しさあれど、夫はその理を解せず、たゞ馬船一槽を殘せし程にて、空屋風雨の至るに任せ、門前また露草滋し。今は憂き節の數も積りぬれば、うるはしき花顏しぼみ、なよやかなりし柳姿もやつれぬ。たとへわが夫は永劫變心せりとも心に誓ひし人、いかで異人に見えて浮名を後世に流すべけむ天をも恨まじ、人をも怨まじ。まことに過世因緣こそ是非なけれど決心せし貞女が心中、後日榮華の其身に來る事を期せんや。彼は全く絕望の



淵に沈めるなりき。されど天は此潔白なる眞情を憐むで好機會を與へたり。、夫の從者に眞梶丸と呼べる童ありしが、主命によりてかの取殘したる馬船を取りに來れり。解脱出塵の人なりとも、此期に際して多少心の動かざらむ。互に語を交へけるほどに、夫の消息も明かになりにしかば、かれこれくやしきふしを聞えなむと思へど、夫の見ざる事もや侍らむとて、泣く〳〵一首の歌を言傳に賴みけり。

　　舟もこじま梶もこじな今日よりは
　　　うき世のなかをいかで渡らむ

童は家に歸りて、この歌を主人に告げければ、さすが剛欲無情の夫も、人知れぬ涙やこぼしけむ。かねて運びつる家具一切を送りかへせり。かくて前非を悔ひて、つれなかりしことの苦しかりけむなど打とけて語らひにたれば、妻の喜び斜ならずいとねむごろにかしづきて、樂しく幾千代かけて過しけるとぞ。

あゝ女子の最も愼むべきは嫉妬心なり。高潔花の如き至誠に對しては、天魔破旬といへども之に加ふる事能はず。妻の溫順貞節なるを見ば、五里霧中に迷ひたる夫の夢も、などて醒めざる事やある。然れども、いさゝかの事にも嫉妬の相をあらはし而も重きが上の小夜衣かさねて恬然愧ぢざる婦人ある今の世に、かゝる美跡を殘したる婦人の行爲誠に好き模範ならずや。全く歌の德のみにもあらざりけらし。

　　かりそめの言の葉草に風立ちて
　　　露のこの身の置所なき

これ小川ちか女が、夫に離別せられて、孤鳳離鸞のかなしみに堪へで、其熱腸を絞りたる歌なり。

一たび獻身せし夫に捨てられて天下に身の置所なく、あはれ露の命も消えなんとす。やさしきは彼の心なり。

ちか女は關東の郡代伊奈半左衞門の家の子、小川藤藏有香の妻なり。いかなることにかあるらむ、物言ひいとさがなしとて、夫は痛く怒りて遂に離別せり。この時かの歌を詠じて悔悟したれど、落花枝に還らず、再びえにしを結ばむとすれど、覆水つひに盆にかへらず。こゝにうきふし滋き月日を送りけるが、このうたはしなく冷泉家に聞えたり。冷泉家にては之をあはれに思ひて、關東の御門下へ使を出しぬ。歌の心いとかなしき事に侍るかりそめのことよりやさしき女を顧みざるは、夫もあまりかたくななるや。再び妻となしえさすべしと云ひこされしかば、直に伊奈半左衞門に此よし告げけるに、半左衞門もかく／＼とありのまゝに傳へしかば、草木ならぬ有香かしこまりて、やがてちか女を呼び迎へ、高砂の浦波靜けく、數多の子さへ設けて、いやつぎ／＼に榮へけるとなん。

右は僅に一二の例を擧げたるに過ぎざれども、和歌が當時非常に勢力ありしのみならず、實際心より出でしものなれずこそ、初めて效力を致したるなれ。殊更に題を設けて形式的に、心にあらぬことまでうなりたるをのみ和歌といふべけむや。

諸道の歴史

文學士　宮崎鳥府

（三）香道

香をきく（嗅ぐこと）ことは、今日茶湯挿花などの如く盛に行はれざれば、其いかなるものなるかを知らざる人も多かるべし。されど、中古以來の物語、

歌集などをひもとかれし姫達は、茶湯挿花などの弄ばれざりし以前、即ち平安朝の頃より、薫き物あるは合せ物と稱して、上流社會の雅遊とあれりしことを知らるゝならん。其一二の例をあぐれば、

〔紫式部日記〕御たきもの合せはてゝ、人々に配らせ給ふ。まろがしゐたる人々集ひゐたり云々。

〔源氏物語〕香どもは、昔し今のとりあらべさせ給ひて、御方々にくばり奉らせ給ふ云々。

〔榮花物語〕この頃たき物合せ給へる人々にくばらせ給ふ。御まへにて御火取とり出で、さまざまに御こゝろみさせ給ふ云々。

とありて、古くより弄びたること明か也。さて香は、聖武天皇の朝(千百六十余年前)、百濟より貢献したること國史に見えたれども、此時代に果して弄びしや否やは事實の徴すべきものなければ、たえて知るに由なし。然れども平安時代に至りて、歌合などと共に、香合せと稱して、其優劣を爭へり。されば、貝合、根合、菊合と同じく、全く一の雅遊として、專ら上流社會に流行したり。もと香には二種あり。一は天然の香木と、他は種々の香を合せたるものとなり。此時は、專ら「合せ」もの行はれて、其種類も亦一ならず。春は梅花、夏は荷葉、秋は菊花、冬は落葉、その他黑方、薫衣香、百和香等樣々の法ありて、馥郁の香嫺雅の名を爭ひぬ。鎌倉時代を經て足利氏の中世に及び、一條兼良、將軍義政等によりて香を弄ぶこと一時に勃興し、其種類又數多あらはれたり即ち香木には十炷香、競馬、花月、源氏、呉越等を始め、六十三品の法あり。かくて東大寺、法隆寺、逍遙、三芳野、枯木、法華經、江塵、八橋、中川

盧橘を十種の名香と云ひ、此他、宇治、承殿、山陰、澤水、無名、名越、林鐘、初秋、神樂、手枕中白、早梅、疎柳、岸桃、桂、菖蒲、艾、葱、富士根香、旋風、蘭奢待、伽羅木等を始めとして、五十種、百八十六種の名香など出で來にけり。合香は、沈香、丁子、貝香、薫陸、百檀、麝香の六種に、詹唐、鬱金、花橘、甘松、零陵、乳香等を加へて製したるものにして、平安朝大に行はれたりしが、此時に至りても、なほ流行せり、かく香を弄ぶこと一時に流行したれども、未だ一定の法式をまうけず、只思ふがまゝに、各自の流を以て愛玩したるにすぎざりき。

抑々香を一の技藝として、茶道、挿花などゝ並稱するに至りしは、東山慈照院殿、足利義政の時なりとす。義政は足利七代の將軍にして、三代將軍義滿の孫なり。文明五年十二月職を子息義尙に讓り、十五年東山銀閣寺に閑居して、風流華奢をつくし、香の如きも茶道についで愛好せられ、春の朝、月の夕、雨窓雪案薫炷せずと云ふことなし。時に茶道を以て義政に仕へし珠光、相阿彌、尤も此術を得たりしかば、義政用ゐて香の薫法を立てしめぬ。珠光の門人志野道甘之をよくして、名を天下に轟かせり。文龜の頃、其門より出でたる志野宗信、大に斯道を研究し、一定の法式を定めて遂に一派を創始したり。世に之を志野流の祖と呼べり。是より香を弄ぶこと一の技藝と變じ、茶道挿花と共に大に流行するに至れり。されば、つぎ〳〵に名ある人多くあらはれ、殊に、相阿彌、二階堂行二、松田長秀、(丹後守)肥山兼直、內藤元種、志野祐憲、夢庵肖伯などを重なる人と。就中、相阿彌、宗信の二氏は、專門家として各々門戸を張り、互に反目して、茶道、挿花などの如く

秘傳、口授など稱するいまわしき事さへ始めぬ。かく茶道は、茶人の手によりて養成せられたる故に、これより「香の茶事」と云ふ詞さへ起り、又點茶式の內にも香技を加ふることゝなり、公家にても、三條西、轉法輪の兩家互に門戸を張りて、斯道を近世に傳へたり。

蓋し香の式は、十炷香をもととして、種々の組香をつくりたるものにして、十炷香とは、香三種を



聞香之圖

三服に分ち、三々九葉とし、更に一花を加へたるものなり。而して十炷香三種に一種を加へたるものを系圖香と云ひ、三種を加へたるものを稱して源氏香と云ひ、連理香、蹴鞠香、星合香の三品を所謂秘傳の香とせり。凡てこれ等を嗅ぎ試むるを試道に限りて聞くと稱し、其法は右重左半とて、右の鼻穴にて、二息或は四息、左にて、二息或は三息きく也。若し數人にてきく時は、座上より一

通りさゝ、又かへして一通り二度宛きくを法とせり。

併し當時は、其式も簡單にして、其道具の如きも灰押、香筋、火筋、の三種にて事足りしが、後世種々の、組香出づるに及びて、儀式は更なり、器具の如きも、火取、フセゴ、香炉、香合、火箸、火匙香臺、香袋、香裏、香鋸、香刀、香臼、鐵杵等を用ゐたりき。

徳川時代に及びて、上下共に其流行甚だしく、少しにても華奢風流の志あらむものは、皆之を弄ばざる者なし。殊に女流間に流行して、茶道花道と共に三徳と稱して、女子第一の要義となせり。この時尤も行はれたりし香木は伽羅香にして、衣服などにとむるは、全く此香のみなりし云ふ。俗謡に「伽羅の煙と命の君は、いくよとめてもとめあかぬ」とうたはれしにても知るに足らむ。

元文の頃大森流芳と云へる人、此技に長じて香道秘傳秋の光、千代の秋、瀧の糸、軒の玉水、深緑など、云へる書を著はして斯道を奬勵せしかば、上下の人に翕然として之に靡き其結果香名に應じて盤上に種々のものを作り幷べ、これを進退して勝敗をするに至り、香道はやゝ變則的に發達せり今この系圖を示せば左の如し。

香道家畧系

○珠光—志野道甘—志野宗信（吉野流祖）
- —足利義政—坂内松軒—米川常伯
- —吉野宗温—宵巴

○相阿彌

百夜譚

林きく子

第四回　假名の事

餘程お暑いので、父の恒山も困つて居りますし、

又お聽の方々も暦などの小六ケ敷ことはお困りと察しまして、一寸代りに妾が假名のお話を致さうと存じます。御存の通り假名には幾種もございまして、普通にも片假名即ち五十音と申すのと、平假名即いろはと申すのとを用ゐますが、片假名は吉備大臣の拵へられましたので、平假名は弘法大師から始まりましたといふことでございます。我邦にはもと文字といふものはございませなんだとも申しますが、又太古から文字がございましたとも申して、今日でも神代文字だと申すのが幾種もございます、假令太古から文字がありましたに仕ましても一般に行はれて居ませんでしたので、支那から傳はりましてから、支那の文字即ち今日の漢字が次第に行はるゝ樣になりまして、總ての事柄が支那の眞似を爲る樣になりまして、益々行はるゝといふことになりましたが、此漢字で我邦の詞を寫さうとしましても、何しても出來ぬことがございまして、已むなく其處で此漢字の音を借りまして我國語を寫すといふことが出來ました、今日でも神樣に御願ひ申す詞の祝詞文などに遺つて居ります文體が此假借音字の文でございます。尤も後には音のみでなく、訓かたも借りて遣いまして、彼萬葉集などが、此假借字で書いてありますから、今日でも之を萬葉假名と申します。處が萬葉假名は字畫が多く、中々六ケ敷ございましたが、前に申した片假名が、吉備大臣の拵へられたものと仕ますれば、丁度彼萬葉集が出來ました頃で、此吉備大臣と申すは我邦の漢學に大功があつて、漢字の元祖とも申す程の方でございますが、其上此片假名まで拵へられたと仕ますれば、實に我國の文學上には此上なき功績のあつた方で此片假名といふがございまして吾々の受けまする

恩惠は誠に少なからぬのでございます。今其本字はと申すと、確には比りませぬが、

阿伊宇江於、加喜久氣已、散之須世曾、多知通天止、奈仁奴禰乃、半比不反保、末尾牟女毛、也以弓衣與、良利流禮呂、和韋宇囘乎、

の畫から取つたものと仕まするが普通でございまして、此中でケ。は箇、サ。は茶、ツ。は門、ヘ。は邊、ミ。は三、又美、ユ。は勇、ヰ。は井、ヱ。は惠より取りましたのといふ説もございます。又ネ。を何時頃よりか子とも書きまして、其原字は子とございます。閑話休題まして、斯いふ至極便利な文字が出來ましたが當時は一向に行はれませんので、却つて平假名といのが出來ました。此平假名も前に申した通り、弘法大師からと仕ますれば、吉備大臣より幾何も間がございませんで、弘法大師が佛經中の語を今樣の歌に譯されまして、同じ音は一つもなく、上手に我國音の入用な音のみ四十七文字で出來て居るので

いろ(色)はにほへ(匂)どちり(散)ぬるを、わがよ(我世)たれ(誰)かつねならむ(有常)うゐ(有爲)のおくやま(奥山)けふ(今日)こえて(越)あさき(淺)ゆめみ(夢見)しゑひもせす(不醉)

で、諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅爲樂の四句の意であるさうでございます。此平假名は漢字の草體で、其原字はと申すと是も種々の説がございますが、

以呂波仁保反止知利奴留遠和加與太禮曾川禰奈良武宇爲乃於久也末計不己江天安左幾由女美之惠比毛世寸

を普通としまして、右の中つ。は門、ゐ。は井などいふ説もございます。

此平假名は元は萬葉假名の草體から來たのでご

ざいませうが、和歌を書いたり。又女子の文などに用ゐられましたので、彼名高い藤原行成卿などの誠に流麗なる書體で書き出されましてから、此假名の書き樣も一種の艶麗ある書樣に發達されまして、最早支那流の草體ではなく、特別の書體となりましたのでございます。

併し女子の手習と申す事は延喜、天暦の頃から隨分女子にも學者がございまして、彼紀貫之が女子となつて和文といふを世に示されまして、此頃から女子の手習といふのを怠らなくなりましたといふ事でございますが、其時分の手習などには

なにはづにさくやこの花ふゆごもり
　いまをはるべとさくやこのはな
あさか山かげさへ見ゆるやまの井の
　あさくも人をおもはざりけり

といふ二種の歌を用ゐて稽古いたしましたといふ事でございますから、いろはを用ゐて手習する樣になりましたのは、是より後の事で多分お寺の僧侶に手習を敎はる時に用ゐられて、其れより寺子屋時代となりまして、一般に之を用ゐる樣になりましたのであらうと思はれます。（未完）



●婦人と訪問（承前）

YT散人　土肥半次郎

●其十　至愛至敬の意を表すべき新年若しくは盂蘭盆、歳暮の禮問は必ず其の期の過ぎざる内に於てすべし。

●其十一　總て禮問は下たる位置の者より初むべし。而して、其の順序は專ら敬愛の深淺に依つて次第すへし。

●其十二　假令禮問にもせよ、餘り多人數にて推しかくべからず。故に家族多き者は幾組にも分れて、禮巡りすべし。殊に元日などには小供を伴はざるを可とす。

註に曰く、物日に當り、幾多の小供を伴ひつゝ他を訪問するは、先方をして一々禮を爲すの煩勞を覺えしむると共に、又た物を貰ひに來りしかの狀あるを以て也。

●其十三　若し他家を訪ふて名刺を置かんとするときは、其の家の婦人の數だけを置くを定則とす。

註に曰く、總て名刺を置き去る如きは理屈上より論ずれば、兒戲の贅事に屬するも距離遠隔せる爲めに容易に音信通じ難き家に己の名刺を置き去ることは、先方をして、依つて以て時々親愛の情を喚起せしむるの益あり。

●其十四　女子は男子に對して、名刺を置き去ることなきを法とす。

註に曰く、但し特別の招待を受けたるときは此の限にあらずと知るべし。

●其十五　或る人を訪問し、不在なるときは左の如く名刺を折りて置き去るべし。

○○様へ

梅子

●其十六　祝言、哀悼、弔詞を述べ、或は遠來の友、或は自分の世話になりし婦人の安否を訪ふ爲めには、必ず時日を遷延すべからず。

●其十七　姙娠は他人に面會せぬを以て禮とするが故に、隨て外出を禁ずるを法とす。故に訪問の爲め他家に行き、見物の爲め劇場に行くなど

は、頗る非禮の事に屬し、且つ衛生上の注意より云ふも、頗る害ありて些も益なき事共なり。

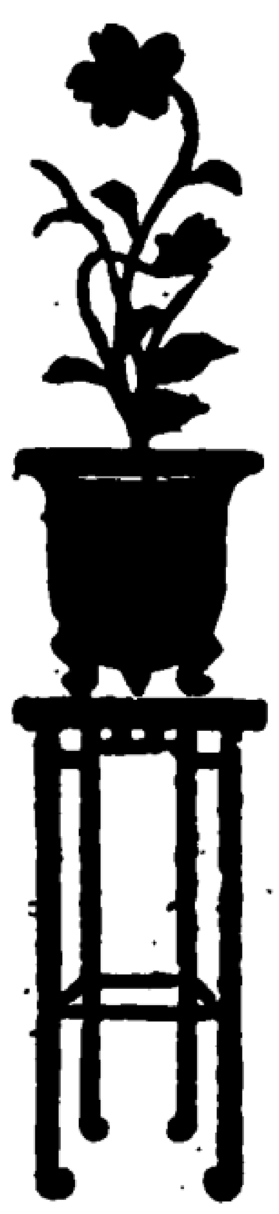
註に曰く、姙婦或は誕生の件に就ては、後日更に詳しく述ぶる所あるべし。

●其十八　夜間は女子の訪問を禁ず。若し己むなき事情ありて他を訪問するときは、必ず午後九時より遲からざるを要す。而して辨用の爲めにする對話は、成るべく一時間を過ぐべからず。

●其十九　振舞などに招かれ、之に應じて出會するを得ざりしときは、其の催の後速かに訪問して、不參の廉を謝すべし。

●其二十　他方より友の家へ賓客到着し、暫時逗留する旨を聞かば、若し其の家族と別懇あらば、速に訪問するを可とす。

（未完）



蓮

藤翁

◎春は花、秋は紅葉と賞すめれど、夏の蓮ぞなかなかに捨てがたき心地こそすれ。碧蓋風に翻りて冷露玉と散るすがたえも云はれず。艶麗なる花、馥郁たる香り、恰も俗寰を脱して仙妃の傍にあるが如し。されば、古來風流の士に賞揚せられ、その水莖の跡に名殘を止めたるもの數々あれど、こゝにはそのあらましのみを記すべし。

◎試みに寺院に詣でゝ、伽藍の畔に至れば、釋迦如來の蓮花の上に座して五色の光明を放てるを見るならむ、これは佛教の清廉潔白なるを示さんとにや。兎に角此花の太古より如何に珍重せられたるを知るに足るべし。されば佛教隆盛なりし我國にても、つぎ〳〵に之を賞するもの顯れたり。僧

正遍昭は、「蓮の葉のにごりにそまぬ心もてなど白露を玉とあざむく」と、三十一文字に托して、道徳亂れにし當時を諷刺し、その欝屈せる思想を抒べぬ。其後代々の家集などに散見する歌あれども徳川の末なる中島廣足と呼べる國學者は、「かくしつゝとめ來ても見ん朝ごとに花さき云はる池のはちすば」と詠じて、其風情のめでたきを賞せり。

◎されど、戀愛の痴情に驅られて、身動きも出來ず、互に絶望の淵にしづみたる男女が、此世の無情を觀じて、未來は蓮の臺に半座を分たんなどゝはかなき希望を懷いて浮名を流せるうつけものもありき。蓮は常住清けれども、かゝる白徒に目ざゝれたるこそ不運なるべけれ。

◎から國にても亦之を賞せしもの少なからず。晋の陶淵明は菊を愛し、李唐の世となりては牡丹を愛するものありしが、宋の周茂叔はひとり蓮を愛せり。泥より出て、泥に染らず。清漣に洗はれて妖ならず。中通り、外直く、蔓せず、枝せず、香遠くして益々清く、亭々として淨く植ち、遠く觀べくして褻翫ぶべからずとて、痛く賞讃せられぬ。これより詩に詠じ、文に作りしものまた多く蒙齊といへる人の蓮池求酌の絶句には、一池風露碧蓮開、涼夜凭レ欄索二酒盃一、移二却青燈一就二明月一、偶然螢火恰飛來との詩あり。善く光景をうつして、清豔掬すべし。

◎されど、世にかろはづみなる女子を蓮葉娘といへり。蓮の輕佻浮薄なる婦人に比せらるゝは口惜しけれど、ある書に、難波の浦は日本第一の大港にして、清國の商人茲に集りぬ。上問屋下問屋數をしらず、客馳走のために蓮葉女といふものを拵へ置きぬ。是は飲炊女の見よげなるが、下に薄綿の小袖に、紺染の無紋に黑き大幅帶、あか前だ

れ吹鬢の京からがい伽羅の油にかためて、細緒の雪駄、延のはながみを見せかけ、其身持かくれなく、面の皮あつくして人中を恐れずびらしやらするが故に此名を付ぬ。物のよろしからぬを蓮葉ものといふ心なり云々。蓋し京大阪にては、下女を蓮葉者と稱して、下女はやがて風敎を壞亂する涸濁の身なりし也。



白蓮は雪のごとく高潔に、紅蓮は天つ少女の唇にも似たらぬ無垢の蓮を、たゞに風にそよぐ葉の形より、汚らはしきもの〻稱呼とせしは、誠になさけなき事ならずや。

◎もと蓮の名は、その房の蜂窩に似たる故にはちすといふ。

然れども、はちすと稱する木あればにや、常に略してはすと呼ぶ。其稱類六十餘種の多きに達し、

巣鴨の栽種家内山卯之吉氏は、その種類を集めて培養せり。

◎蓮の中の肥後絞といへるは、白爪紅青絞と稱へ最も佳品なり。此は文祿年中豊太閤征韓の際、鬼將軍加藤清正が彼土より持ち還りしものなりと傳へらる。

◎蓮は池沼に生ずる者なれども、遂には之を瓶中に培養して目を樂しむるに至る。大小中蓮ありて小蓮は、茶碗にてもなほよく培養せらるゝが故に茶碗蓮ともいふ。白單の小輪を白茶碗といひ、本紅單の小輪を紅茶碗と稱し、すべてその小輪を貴べり。

◎蓮を植ゑかふる期節は、清明の後を適當とし、根は芽さきより二節つけて取放し、横になして瓶の底に入るゝなり。かくて畑の土に豆腐のからを交へて堅く錬り、瓶の半分程入れて一日乾かし、之に水をそゝぎて靜に置く。若し蕾の水中に現れたる時動かさば、その儘憔悴して花を開かざるものなりといふ。

◎現今東京にて食用とする蓮根は、概ね埼玉の一地方及び、上總下總より出づ。これを食ふに堅くして人之を嗜めども、近來支那産を培養するもの尤も多く、其味甘く且つ柔かなり。之に二種あり。一は蓮根を食ふを主とし、一は實を食ふを主とするものにして、邦人は、その實を食ふことなけれど、支那人はこれを砂糖漬とし、また、實七八粒を煎りて茶碗に入れ、蓮子湯とて之に湯をさして食ふに、味甚だ美なりとぞ。

◎畢竟實用と、賞觀とに供せらるゝも、一度杖を不忍の池塘に曳かば、東臺のほとり翠綠したゝり、池のやゝ中央なる辨財天の宮柱高く聳えて根岸の里の眺めをかしきに、青蓮漣に洗はれて紅白

の荷花うるはしく、そよ吹く朝風に露の白玉くだけて馨氣鼻をつく。げにや自然の美しさにはたとふるものなく、かの瓶中兒戯に類する眺めの能く及ぶ所ならむや。

◎嗚呼蓮葉娘の稱こそいまゝしけれど、淸廉潔白なる蓮の如く、泥中にあるも之に染まず、牡丹のごとくあだ〳〵しからず、其天性を發揮して、而も香りの千里に走るゆかしさは、移して人の模範とするに足りなんかし。

音樂雜話（二）

大日本音樂會　中川愛氷

◎三月ばかり前の事であるが、淺草厩橋の増野病院長が、予に向つて女子の品格に付ていろ〳〵の話があり、何うしたら女子の品格をよくすることが出來るかとの問題が出たから、それは音樂を敎へるに限ると答へた、すると話が横にそれて、内君の和歌の敎授をたのまれた、音樂を習はさうとは云はぬので、それは和歌の御指南もせうが、音樂を習はせてはどうかと云ふと、醫者の家から三味線の音色が洩れるのも妙でない、それから内君は毎日和歌の稽古に來たが、音樂の話を仕向けると、すぐに耳の方角を替へる、

◎そこで増野ドクトルに何うして細君に音樂を習はせぬ、と厭がるから猶すゝめたくなる、すると外聞ばかりではない、三味線の音を聞くと頭痛がする、琴ならば面白く感せぬでもないが、否快く聞かるゝから、偶には琴ならば聞かして貰ひたいと言ふ、やゝ話せる、然らば拙者の組織して居る音樂會に一度遊びに來てくれと招待して、一日音樂を聞かせた、さて翌日になつて、何が面白か

つたかと聞くと、琴もよいが長くて閉口したり、頗る面白くて、今一段をと思ふたのは花園節であつたと答へた、流石に人は正直なものである、

◎其時の琴は東京でも女流では第一の腕利と評判のある小山喜美、曲は三宅玉童の尺八に合せて小督の一段、琴の音を意氣地なしと云ふ予も、この曲には我を忘れて聞取れたのであるが、琴ならば快く聞かるゝと云ふドクトルの早くも飽いて、花園節と云ふは、新内の親類で、富士松の如く太掉で語る浄瑠璃で、語つたのは花園一聲、流石に家元だけに下手ではないが、三味線の音色を野卑なる者として、頭痛をさへ催すと云るゝドクトルが、三味線音樂中でも下等として排斥されて居る新内節の、其の出店の花園節が、猶一段をと思ふばかり面白く感じたと云ふは、實に理屈に合はぬ話である、否實際これは眞の理屈で、これが平素の痩我慢を自首させたのである、

◎新内節の下品なと云ふは徳育上の問題で、美術として聞く時はなか／＼價値のあるものであつて細掉浄瑠理即ち人間を踊らせる浄瑠理の、總名代とも云ふべき豊後節の、最も正しき系統を引いて居つて、感情に訴へて恐ろしき力のあるものはこの新内節である、美術として聞く耳の、浦里なるが故に、梅川なるが故にと云ふは、己れの根性が美術の中へ收まらないからである、併し學校では流石の予も、この曲を聞いてくれとは云はれぬ、併し音樂と修身書とは効能が違つて居るから、それは大に區別して貰ひたい、

◎されど學校で歌ふ唱歌は、あまり甘味に乏しくて、時間つぶしに歌ふ位なもので、學校外の歌ひ物が甘過ぎるのとはくらべ物にならない、つまり音樂は、人の心を樂ましめ、伸びやかにせしめ、

愉快に人を働かせるお茶受であるから、そのお茶受に食傷さへせねばよいのである、

◎しかし今の音樂は、どうしても改良せねばならぬ、德川時代のやり口では到底今日にうまく適るものではない、併し下手に手を着けると、却つて取かへしの附かぬ事が出來する、現時ではこれに手をつけられる力のある者は數ふる程の人で、まづ音樂を談ずる資格あるものが、野の遺賢は知らず、名の知られたる人では、田中理學博士は、これは世界の名物で、別看版にして、其他の側では上原六四郎、北村季晴、岩崎武一郎の諸氏位で、其他は一流一派の歷史を知つて居る位で、節の聞分が滿足に出來る事さへむづかしいのである、

◎節といへば、細棹淨瑠理の第一といふべき宮本節でさへ、微力なる予の丹精で、漸く芽を出した位で、荻江節、半太夫節、園八節、細かくきざんで文彌節、繁太夫節、正傳節、外記節、隆達節、弄齋節、投節、梛節、繼節、土手節、雛節、加賀節、芝垣節、道念節、古今節、小室節、小六節、潮來節、說敎節等、それ〳〵特色のある歌曲が、日一日と影をかくして行くのは、實にあはれなことで、人間の身體を不具にして、倒すか倒さるゝかの二道に餘念なき、あはれむべき角力取の世渡をさへ、笑うて見らるゝ不人情な世の中に、無理ならぬことであるが、日一日に消失せる音曲に目もくれる人のなきは、實に歎かはしいことである されど時なる哉、こゝに注目する大家が現はれ、淚の出る程熱心に此の古物の保存をくはだて、名は今云はれぬが、無論大なる功績を揚げられるであらうと思はれる、

◎かゝる事で多くの熱心家といふのは、卑しい根性で唯嗜むといふだけの話、それ故に音樂が形に

現はれて野卑になつたのである、



いとし子

柳川春葉

(上)

『籠目々々、籠の中の鳥は何時々々出やる。晦日の晩につる〳〵つッぺつた。』

夏の日は何時しか暮れて、長者が屋根の一つ星、其よりも高く低く飛交ふ蝙蝠の忙しさ。駄菓子屋の廻燈籠に涼風通ひ、長唄教ふる路次に蚊の聲細く聞える折から、七歲八歲の子が五六人、眞丸に手を引き合ふて、先刻の夕立の名殘の行潦を飛越えながら、

『籠目々々、籠の中の鳥は何時々々出やる。晦日の晩につる〳〵つッぺつた。』

と面白げに唱ふて引く。駄菓子屋の店には近所の女房やら、婆樣やら五六人固つて、涼みがら、世間話に興じてゐるところへ、十八九の肥つた下女が襷を片手に小腰を屈めながら入つて來て、

『お暑うございます。』

『オヤ河田樣のお女中さん。』此家の女房は愛相よく迎へた。

『彼の家の坊樣は此處に遊んでゐらつしやりはしませんでしたか。』

『左樣ですねえ。先刻しがたまで此處で遊んでおゐでなさいましたが、未だお家へお歸りには成りませんか。』

『ハイ、何時もお夕飯にはお迎へに參らないで

も歸つておいでなさるのが今日に限つて何うなすつたのか見えないのですよ。』
と店の隅に腰を下して、
『御免なさいましよ………然し何時も大抵此方のお店の近所に遊んでゐらつしやるから、大方此邊だらうと存じましてね。』
女房は効々しく團扇を出して、
『ハイ〳〵仰有る通り何時も私共をお心易くなさいましてね。其は町の子供と同じやうに私の事を小母さん〳〵なんぞと全然家の常と兄弟のやうにね。貴方まあ勿體無いではございませんか、何程お幼少からといつたつて私の事を小母さんだつてさ。』
『お子供衆は懸構ひの無いものだよ。』
近所の婆樣が横から口を出した。
『眞實ですよ。其ですから決してお世辭でも何でもありせんが、私も他所のお子樣とは違つて、それ溝の端は危い、犬を打つと惡いなど〻、餘計な事までお世話を燒きます。』
『嘸御面倒をおかけ申す事でございませう。何分彼の坊樣お一人で、其に御兩親の無いのですから、何うしてもお世話が届きませんのです。』
女中は氣遣はしさうに四邊に氣を配りながら言ふのであつた。
『然樣でございませうとも、祖父樣の手一つでお育てなさるのですもの、其れは何う致しても、肉身の母親でなければ貴方眞實のお世話は届きません。』
『三年前までは乳母さんが居りましたけれど、是も田舎へ嫁くのでお暇を戴いてからは、私共のやうな奉公人ばかりですもの、其を思ふと眞にお可哀さうですよ。』

『エヽ〳〵然うでしやうとも。』
此家の女房も並居る連中も齊しく頷いた。
『御常人は未だ何にも御存知無いのですけれども、考へると涙が零れます。』
『何不足の無い家へ生れて來ても又斯樣な不幸がおなんなさる。人間といふものは何うも圓く行かないものですね。其は然うと彼のお子は何うなすつたのでしやう。』
『最早お歸りなすつたかしら。』
女中はやをら立上る處へ、大きな聲で流行唄をうたひながら歸つて來たのは此家の伜の常造といふのである。
『オヽ常、お前、河田樣の坊樣を知らないかえ。』
『一雄さんは彼方へ行つたよ。』
『彼方へとは。』
『他所の人と一緒に彼方へ行つた。』
『他所の人とは何んな人です。』下女は目を丸くして驚いた。
『知らない人。』
『知らない人では解らないよ。瞭然と云ふが可い。何んな人だい。今お家から御迎にいらしつたのだよ。』
『女の人だよ。何でも知らないのだけれど、僕やなんかで遊んでゐるところへ來て、一雄さんを連れて行つた。』
『サア大變だ、而して何方の方へ行きました。早く敎へて下さい、解らないと私が大變ですから。』
『サア常解るやうに敎へておあげ。』
『通りの方だ。』多勢の顏を見比べながら言ふ
『其は今しがたですか。』

『エ、先刻。』
『では追蒐けて行つて見ましやう、お内儀さん何うも難有うございました。萬一私が行つた後へ歸つておいでなすつたら、直に家へお歸しなすつて下さい。』
『畏まりました。其では兎も角も行つて見ておいでなさましよ。今時の事だから眞逆人拘引も出まいけれども、迷子にでもお成りなさると困るから。』
『眞實に心配ですよ。其では皆樣御免なさいまし。』
下女は慌てゝ驅出して行く。
『ヤレ〳〵驅けて行つたよ、嘸暑からう。』
例の婆樣が見送りながら言つた。
『だがお内儀さん、彼の河田樣の坊樣の御兩親は何うしたのだえ。』
『其が斯うなのさ。』
丁度話も途絶てゐた時とて、女房は物知顔に説出した。
『彼の坊樣のお父樣といふのは、何とかいふ學士で、年は若いが、大相評判のあつた方ださうな。而して學校を出ると直に奥樣をお貰ひなすつたのだが。お氣の毒な事には其から彼のお子がお出來なさると間も無くお亡なりなすつたさうさ。跡には唯一人の親御と乳呑を抱えた奥樣ばかり。其からといふものは家中頓と火の消えたやうに成つたが、奥樣といふのは河田樣へ來てから未だ二年經つや經たず、此儘後家に爲ては氣の毒だからといふので、兩方の親達が御相談の上、奇麗に緣を切つて實家へ戻り、其から何處へか再緣でもなすつたのだらう。
家には血統の御子を殘して、其から乳母の手で育

てたのが最早八歳にお成りなすつた。祖父様は其を楽みに、旦暮傍も離さず大事に爲ておいでなさるのださうだ。』

『成程、初めて聞きました。然し大切に爲れる彼のお子は幸福のやうだけれども、お父様やおッ母様の顔も御存知ないといふのはお氣の毒なものさね。』

『能くある事さ。』

と無人相な近所の内儀が口を出して、

『腹は借物、御亭主が無くなつたら反つて後の爲に可く無いと舅姑から嫌はれるのは隨分例のある事だよ、其所へ行くと女は損だ。ねえお内儀さん然うでは無いか。』

『まあ其様なものさ。』家の女房は蚊遣を煽りながら答へる。

『ねえ然うだらうお婆様。』

『其はお前様の言ふ通りだが、今も此處のお内儀さんの話のやうに、來てから二年と經たないうちに御亭主に別れて、其まゝ他人の家に居るのも辛からうではないか、其よりも今迄の事は無い事と諦めて、離縁に成る方が反て身の爲だらう。』

『けれども貞女は何とやらで、二度夫を持つといふ事は耻だものです』

『オヤ〳〵お前様は大層物知に成つたねえ。何時其様な事を覺たえ。』

やう〳〵白く燃揚る煙を風の來て弄れば、横さまに店の椽臺に靡くので、何れも面を背けてハタハタと團扇を鳴らす。家の女房は目を擦りながら、

『何事も運次第さね。立派な方が始終氣樂に世の中を送るかといへば、又然うでも無いものさ。貧乏暇なしで、何程働いてもピー〳〵言つてゐる代には、此方徒のやうに家中至極息才で暮らす。

二つと可い事は無いものだ。』
『然うとも〳〵天道樣は能くしたものさ。何處も一樣に日を照して下さるが、人の運で陰に成るものもあり、又日和へ出るものもあり。』
『隣の雷干は能く乾いても、此方の雷干は夕立に遇ふ。』
『其は油斷大敵といつて、能くある事、何でも油斷なく一生懸命に働きさへすれば、屹度其だけの惠もあらう。』
婆樣は借りた煙管を返して、
『然ういひながら年寄の癖に納涼なぞと利いた風な事を爲るのも猶且油斷だらう、どれ歸つて寢ましやう。
『私も一緒に行きましやう。』
『然う皆一度に行つて了はなくつたつて可いではないか、もう少し話しておいでなさいな。』
家の女房は聲をかける。
『又明晩來ましやう。然樣なら。』
打連れて歸つて行くと、今迄人の間に好い心持さうに寢てゐた猫が不意に起上り、思ふ樣欠伸を爲て、其まゝノソ〳〵と臺處の方へ行つて了つた。

福島少將夫人（二）

森林黑猿

福島貞子夫人の賢女なる事は、前回の談話にても能く解るので厶いますが、猶茲に夫人の爲に特筆大書して讀者に紹介しなくてはならぬ事がある、それは何であるかと、云ふに、同少將が今の住宅の事であります、少將今は牛込區矢來町三番地に住はれて居りまして、宏大たる門構への邸宅、門を入れば正面は玄關にして、其の右手は樹木欝蒼

たる庭園、古木あり、花あり、紅葉あり、泉水ありて、春水、夏雲、秋月、冬松、居ながらにして四時の眺めが出來まする、併し決して奢つた造りにあらずして、何處までも軍人的に質素に出來て居まするが、兎に角天晴れ帝國陸軍將官の邸宅として恥かしくないので厶います、然るに此の邸宅は將軍が未だ少佐の頃、爾も露國漫遊中に、貞子夫人が買入れて良人の遠征の苦を慰さめんと、其の歸國を待ちつゝ居られたと云ふは、ナンと好いお心懸けではありませんか、良人が少佐の頃に、今將官となつて住まはれても、恥かしくないだけの邸を買入れて置いたと云ふは、並々の婦人には、決して出來得るもので厶いません、それですから福島將軍が單騎遠征の功を終へて歸國され、新橋へ着されて、彼處から迎ひの馬車に乘りて、吾が邸へ着かれた時、流石の福島君も意外の感に打たれて、殆んど夢の樣に思れて夫人に向ひ

福島「和女、何時怎樣邸を借りたのぢや、是は家賃を餘程取られるぢやらう」

と物に頓着しない將軍も、此時は家賃の事を突然尋ねられたと云ふは、今以て御夫婦間の時々笑ひ話しになつて居ります。

夫人は「オホ、、、、」と微笑て

「阿郎、是は借家では厶いません、買入れたので厶いますから、決して御心配なく居らしつて下さい」

と其價までお話しになりますと、將軍は益々意外に思召して

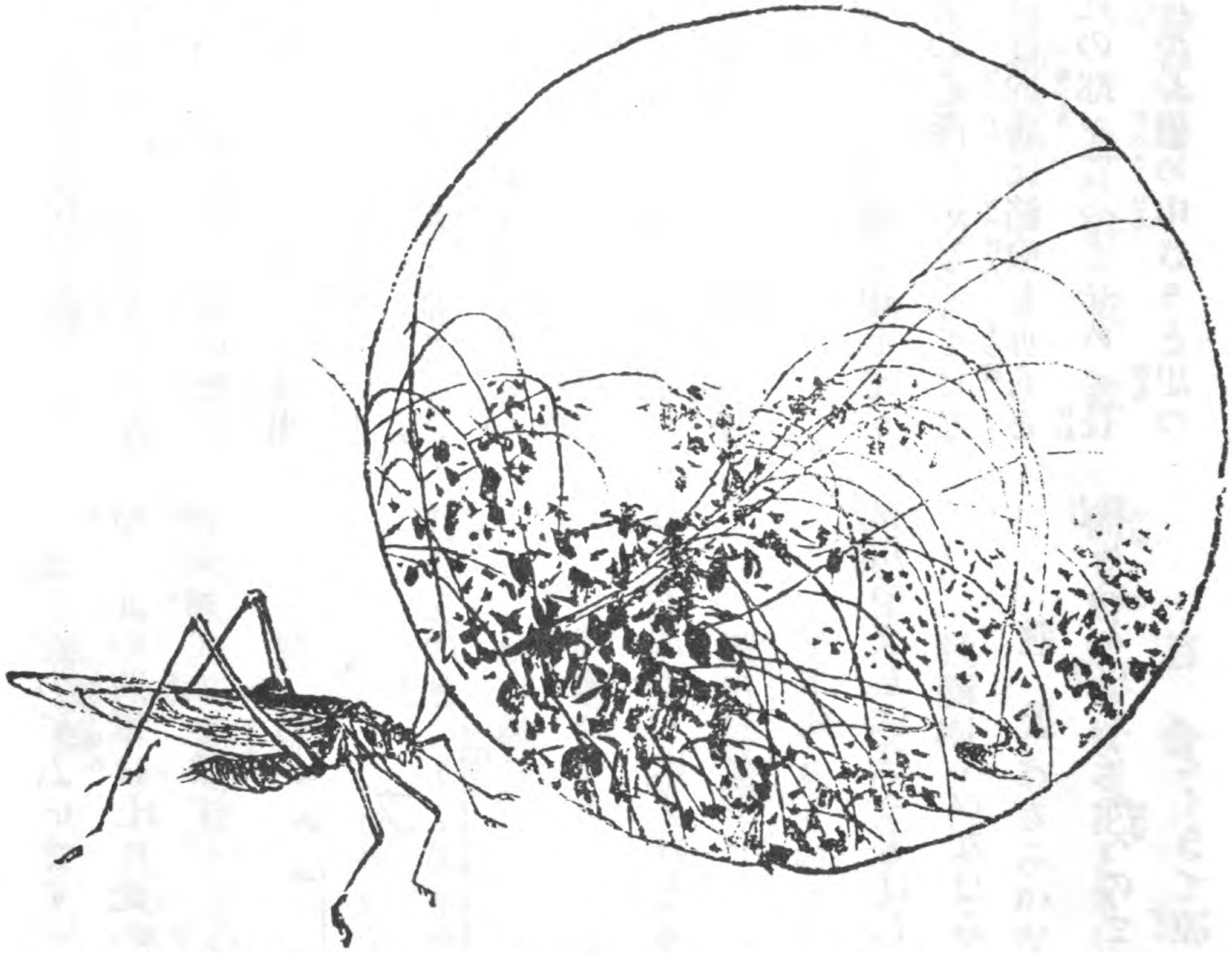
「怎麼して和女にそれだけの金額があつたのぢやね、借金でもしはせぬか」

夫人「阿郎……………正可妾しは借金して家を買ふ樣のことは致しません、阿郎の御不審に思召すは御道

理で厶いますが、慥です、何時でしたかズッと前の事で、未だ宮比町に住んで居て、時計を買ふお金にも困つた時分でしたが、阿郎が或夜のお物語に、昔し山内一豐の妻は、良人の爲に名馬を購ふたと云ふお話しをなさいました事が厶いませう」

福島「ム、そんな事があつたかのう」

夫人「有りましたとも、妾しは餘程感心しましたから今以て忘れは致しません……彼の山内一豐が始め織田氏に仕へた時、折節關東から駿馬を販る人が來て、一家中の侍衆が皆共の馬の好いのには驚く位で、人々慾がつたのですが、餘り價の高いので購ふことが出來ないから、馬商人は徒らに馬を牽ゐて還らうと致したのを、山内氏が見て怎麼かして買ひたいと思ふて、家に歸つて妻女に此事を語り、世に貧困ほど情ないものはない、貧困なる故に彼の名馬を買ふ事が出來ないと云つて嘆



じたら、妻女が鏡箱の中から黄金十枚を取出して、之を良人一豊の前に置いて云ふに、昔し妾しが當家へお嫁入をする時、父が自ら此金を鏡箱の底に納れて妾を戒めて云ふに、若し良人の身の一大事あらば之を用ゐよ、妄りに使用ふ事は出來ないと呉れ〴〵も申しました、今阿郎が名馬を獲て、之に乘つて戰場に出るは、一世の擧れで厶いますから此のお金を出しましたと云つたので、一豊が泣いて謝したと云ふお話しを阿郎がなさいました」

福島「ム丶〳〵それは歴史に在る話ぢや、實に女子の模範ともなるべき美談ぢや」

夫人「ですから妾しも其のお話しをお聽き申してから、是は軍人の妻たる者其の心懸けがなくてはならぬと思ひまして、阿郎には内密に節儉を專らとして貯蓄したお金を以て此の邸を買つてせめて長々の御勤勞を廣々した自邸でお慰め申さうと思つて致したので厶います」

噫、此の將軍にして此の夫人あり、實に好一對の御夫婦で厶います。

文林

和氣公　久我建通

波かせはわしにふけとも眞心の
　その一ふしはをられさりけり

夕水鷄　高崎正風

夕川のきしになくとはしるけれと
　くひなはみねす聲はかりして

避暑　前田利鬯

我ものと思ふをかへのまつかけに
　とくきて凉むひともありけり

飛石のかたへに葵おひたり　長谷信成

すゝしくもしけるみとりは神山の
種をうつしゝあふひなるらむ

水道　宮地厳夫

水をひく道もひらけてうつせみの
よはすみやすく成にけるかな

兼好法師　小杉榲邨

言のはの花とならひのをかのへに
つれ〳〵草やつみあつめけむ

田上螢　鎌田正夫

さと遠みおふ子もみえぬ小山田の
螢のかけのしつかなるかな

山家夏　大口鯛二

尋ねきてすゝしと人のいはさらは
なつともしらしやまかけの庵

百合　加藤義清

同し野にさける花ともおもはれす
あさみかなかにたてる姫ゆり

杜新樹　若崎勝従

松すきと一つみとりにかみかきの
もりのさくらもなつめきにけり

織田信長　下田春興

おけはさまおほひし雲をはらひてそ
そらにさよすの月はすみけむ

松有楸聲　鍋島榮子

吾やとのまつふく風も今日はまた
ちとせをうたふ心ちこそすれ

瞿麥　前田朗子

うつくしく咲しまかきの瞿麥の
かさしの玉とおけるしらつゆ

水族館　小池道子

波の音は聞えすなからうなはらと
　おもふはかりに魚のつとへる

禁苑新樹　　北島以登子

世の中のちりもかゝらぬ御園生の
　わか葉のいろのうるはしき哉

海水開　　保科節子

うちよする波の上にもゝろひとの
　泳きてあそふなつは來にけり

船納涼　　坂田泰子

隅田川きよきなかれにふねうけて
　けふのあつさを忘れけるかな

玉　　中村禮子

たくひなき玉といへとも手に取は
　思はぬきすのある世なりけり

淵　　小川直子

千年へし老木しけれるやまかけに

　そこひもしらすすめるゐを淵

中島歌子

石川丈山

唐うたの花をのみなとしたひけむ
　せみの小川のきよきこゝろに

孟母　　河村重子

一もとのからなてしこは三度まて
　となりをかへて生したてけむ

滊車の内にて詠みける長歌　　下田春興

ひよとなるふえのひと聲
　山かたのこたまにひゝき
なかそらの雲井にみちて
　くかちゆく舟はゆるきぬ
其の舟のまとおしはるき



其の内になかめしをれは
道のへのみたのいはまち
まちかきは後にかけらひ
ことはきは共にうつろひ
いやつきにうつりかはれは
大地もめくるかことく
のる人もめくるめくまて
其の道のゆきのかしこく
おもはゆるかも



八月廿日兼題

野草花

天　札幌區南三條西三丁目 山田長治郎方　山田静子

名にしおはヽいさ宿からむ手まくらの
野邊のちくさのはなをしきねに

評、趣向たくみにして力あり。

地　大阪市西區薩摩堀裏町三六邸　伊勢村春子

あき風もこヽろしてふけつゆのみか
はなもこほるヽ野邊のはきはら

評、たくみならねど、すてがたき姿なり。

人

伊豫宇和島　竹村竹里子

ふく風に野邊の千くさのつゆちりて
はなすりころもぬれてかをれり

評、花すりごろもことに〻ほひふかし。

甲之部

肥後　坂本竹子

あきはぎの花すりころもきてみれは
たちかへられぬみやぎの〻はら

肥後　佐々琴子

をみなへしをはおなてして藤はかま
きそひてにほふあきの野へかな

栃木　青木たつ子

をみなへしをはなくす花さきいて〻
こ〻ろひかる〻あきの野邊かな

東京　近澤和子

今日もまた野へにあそはむ思ふとち
千くさのはなのしなさためして

東京　安井あや子

千草咲くわかたの野へにきて見れは
みやこにしらぬはなもありけり

和歌山　瀬戸榮子

秋の野のちくさのはなをわけゆけは
にしきまとへるこ〻ちこそすれ

三河　河合縫子

秋の野のちくさのはなをそのま〻に
子等かころもにすりて見てしか

三河　服部正子

あきの野をかゆきかくゆきわけ暮て
千くさのはなをつきに見るかな

三河　三宅中枝子

三日月のかけをやとしてゆふつゆに
にほふあきの〻をみなへしかな

乙之部

秋のゝにゝほへるはななつゆなから
いさいへつとに折りてゆかまし　長崎　八尾いへ子

むらさめはあとなくはれて秋のゝは
はなのにしきにつゆそこほるゝ　筑後　鏡山増代子

露にふしかせになひきてをみなへし
あたなるいろをのへにみせつゝ　筑後　武田龜子

秋の野のちくさわけゆくころもてに
にほひこほるゝはなの一とむら　横須賀　上田ゆき

野らゆけはおく露なからあさかせに
みたれてにほふはきのひとむら　横須賀　岩橋花子

秋されはつゆのたましくみやきのに
いろかもきよくはきそさきける　埼玉　前野壽賀子

もゝちくさ色さま／＼にさきいてゝ
あきのにしきとのはなりにけり　肥後　坂本美智子

の野をわけ行くからにさま／＼の
はなのいろ香にそてそゝみける　和泉　福原菫子

古さとへかさるにしきにいさゝらは
なりそへてまし野邊のあきはき　大阪　大阪谷信子

おのかしゝ千くさの花の咲きいてゝ
いろ香あらそふむさし野のはら　札幌　山田婦美子

もゝ千くさはなのかきりをあつめたる
あきの野のへのうるはしきかな　東京　北島功子

おのつから生いてし野邊の八千草は
うゑたるよりもあはれなりけり　東京　北島操子

たくひなきにしきともみんむさし野の
ちくさにましろあきはきのはな　東京　椎野清子

のへにさゝちゝさのはなは露なから
あきかせふけはみたれそめけり　東京　椎野薫子

ちくさ咲くあきの花野のみちせはみ
ふれなはあたらつゆやこほれん　東京　大木光子

野守にはあらぬ我か身も八千くさの
はなのいろ香にそむこゝろかな　東京　戸賀崎治子

たちいてゝ野へをし見れはいろ深く
さきみたれたるはなそゆかしき　東京　笹川ふさ子

秋の野にゝほひこほるゝ八千くさの
はなにおきそふつゆのさやけさ　肥後　江上千嘉子

秋の野の千くさのはなのさきしより
ゆきかふそてもにほひぬるかな　肥後　德永識子

八千くさの花のにほひをなつかしみ
野もりかやとにたひねしてけり　肥後　德永萬壽子

きてみれは袖もたもともあきの野の
千くさのいろにそむかとそ思ふ　肥後　下知波婦子

鳥狩するかた野の千くさをりしきて
みるもたのしきはなのいろ／＼　肥後　野口靜子

やち草をあやにもなしてうすくこく
にしきおりしくあきの野へかな　東京　林環子

あき風のふくやすゑのゝゆふまくれ
をはなかそてもみたれそめつゝ　岐阜　佐藤そう子

千草咲く野もりかいほにやとかりて
むしきゝかてらはなをみるかな　埼玉　横田秋子

なゝくさをおきては名さへしら露の
の邊の千くさのはなさきにけり　東京　矢野やす子

きのふまて嵐のすさみしいはれのに　あくかれぬへきはなそさきける　東京　片山あや子

花のいろ千くさに見ゆしあしたより　われも野もりとなりにけるかな　東京　片山ふみ子

野邊にさくはなにひかれて小てふにも　あらぬわか身もたちとまりけり　東京　平尾あさ子

八重きりのはるゝなみ野の原なかに　ありのひふきのはなのゆかしさ　肥後　佐々有鄰子

あけまきかしけれる野への草わけて　かさしもゆくかあきはきのはな　茨城　荒野たに子

八千草のはなさくあきは世にうとき　野もりもいかにたのしかるらん　茨城　内田さた子

八千草のはなのいろ〳〵なつかしみ　たれもこゝろなのへにゆくらん　長崎　内藤美輿子

露むすふ野邊のいと萩なひきあひて　ひとのこゝろや引きとゝむらん　東京　安居きやう子

見るかきりこゝろとまらぬ花はなし　いつれを野へのあるしとはせん　三河　永井さい子

おくれしと時をゆつらすさきいてゝ　いろ香あらそふ野への八千くさ　大阪　中舘圓子

あき風にはなのたもとのほころひて　かなるもゆかし野邊の八千くさ　大阪　中舘やう子

おく露はいろしなけれとあきの野に　さきこそに匂へ八千くさのはな　肥後　服部倫子

おもふとちきてこそみつれ八千草の　はなさくのへのあきのにしきを　京都　坪内りき子

にしきなす千草のはなをきて見よと　但馬　田尻保代子

袖ふらはみたれやせんとこゝろおく　野への小すゝきうちまれくらむ　大阪　桝田登子

やちくさの花野のにしきわけられぬ　つゆもしけのゝやちくさのはな　三河　服部萬子

ゆくみちもみゆぬはかりに秋の野は　はたおろむしのこゑもきくまて　三河　本多きさ子

おもしろく千種のはなの咲きみちて　千くさのはなそさきみたれける　山口　田村多豆子

むさし野のちくさをおきてひともとの　あきはのへこそたのしかりけれ　山口　村上操子

むらさきなのみたれかいひけむ

丙之部

あたし野の秋のあはれもしられけり　さけはうつろふはなの上のつゆ　和歌山　池田松枝子

おのつからそてこそに匂へ秋の野の　千くさのはなたゝりてかさせは　香川　鎌田光惠子

おもしろくちくさもゝくさ咲みちて　野へはぬならぬあきとなりけり　松山　上原のふ子

是もとてゆく〳〵野へに折りつれは　はなの千くさの手にあまりぬる　熊本　志方圓子

春日野のなきにすゝきにまれかれて　わけゆくそてにかゝるしらつゆ　東京　安井すな子

秋のゝにおくしらつゆのいかにして　はなをはちゝのいろにそむらん　東京　安井せつ子

うき秋のこゝろなのへにきてみれは　われなまれけるはなすゝきかな　岐阜　吉村せい子

小萩はらさくはなみんとわけくれは　いまをさかりにちくさにほへり　伊勢　池田梅子

秋の野におきそふつゆをかさしにて　さきこそまされ八千くさのはな　肥後　田代艶子

をみなへしゝほれしたれの生ひ出て　おもはぬのへにはなさきにけり　埼玉　横田音羽子

わけ〳〵てゆくも歸るもわするなり　野なかのくさのはなのさかりは　東京　川村まつ子

あきの野の花めつらしやかくなから　その生にこそはおほしたてゝめ　東京　新海わか子

しけりあふを草かなかにましれとも　かくろひかぬる野邊のひめゆり　東京　戸塚てつ子

かりのこすいはらかもとの花あさみ　野邊ゆくひとも手ならさりけり　東京　内田きみ子

なく虫のこゑもろともになりてまし　野への千くさのはなのいろ〳〵　肥後　鶴田貞子

秋の野のをはなかそてのみきひたり　なかになまめくをみなへしかな　肥後　吉富彦子

咲く花はいろ〳〵なれと野邊に向ふ　ひとのこゝろはひとつなりけり　東京　戸賀崎久子

野邊はいま千くさの花のさかりなり　こゝろして行けまきのうなゐ子　東京　戸賀崎梅子

をちこちに花のにほへるあきの野は　まよふたひちもたのしかりけり　肥後　徳永[illegible]子

秋の野のつゆの八千くさわけゆけは　ぬるゝたもとにはなかをるなり　肥後　徳永多瑠子

もゝくさのはな咲きいてゝみる人の　こゝろもまとふのへのかよひち　東京　椎野鐵子

わけてゆくたもとも露にぬれそめて　のもせにさけりあきくさのはな　東京　椎野秀子

やちくさのしけみかなかに咲そめて　はなめつらしきのへのあきはき　東京　椎野ぬき子

あさな〳〵露おきそめていろふかき　野へは千くさのはなさかりなり　東京　牛山紫子

秋ことにあらたに咲けるはな見れは　ふる野の名こそ我か世なりけれ　東京　吉岡竹子

雨によし木のしたつゆはまさるとも　はきのはなみむみやきのゝはら　東京　山本梓子

あさ風にたもとふかせてのちゆけは　あはれに咲けるあさかほのはな　横須賀　中山富美子

あきくさを賣る聲さはになりにけり　いまやはな野のさかりなるらん　名古屋　瀬木せき子

秋の野のちくさもゝくささきいてぬ　いつれおとらぬはなのにほひに　埼玉　前野ふさ子

さま〳〵のちくさの花もあきされは　おなしこゝろにゝほふのへかな　肥後　徳永雪枝子

家つとにつまゝほしくもおもふかな　野邊のちくさのはなのさかりは　大阪　橋本正子

見ぬ人のつとにたならんあきの野に　つゆをかさせるはきのひともと　大阪　伊勢村花子

はらからとたもと連れてはきすゝき　折りつゝたとろひとそたのしき　伊勢　緑友子

八月廿日兼題

雪月花の優劣を問はれしに答ふる文

天

長崎市新町十三番地　八尾いへ

花のすがたの艶なる、月の光りのさやかなるは更にもいはず、雪のけしきのおかしきにつけ、とりどりすき人の心にひかれ、かにかくあげつらはれ侍れど、人の心はよろづめのまへのものにうつりかはる習なれば、いづれがよし、いづれがあしとは理りがたうあん。昔の人の花をし見ればといひて、長閑けき世にすむ事をうれしび、殘りなくと歌ひて敷島の大和心によそへたるなんど、其句ひのけだかさ、世々もてはやさるゝもことわりなり。庭もまがきもましろにふりかくせる雪の朝、枯れたる梢に時ならぬ花をにほはせ、賤が伏屋も一夜に白がねしきたらんけしきにかふるも、をかしうはた豐年のしるしと、めではやさるゝぞいとうれしき。されどすみのぼる月の光りをあふぎては物のあはれも身にしみて、うら悲しき折もあれど、くもるならひの心をみがくには、こよなきたからならん。こゝろみに此三ッのまさりおとりをかいつらぬれば、月は年の内に見ぬ月もなければ、春のみ時めく花にまさる一ッならし。海川山野もてらさぬ隈なく、いとなき賤も心のまゝに見れどもつきぬ光は、盛りみじかき花にまさる二ッあらし。満ちてかくるは世の人の奢りのいましめとも見るべく、のこりなくちる花にまさる三ッなるべし。光きら〜しう千里の遠きをてらすは、山々につもりてもきえやすき雪のかけても及ばぬ影なり。葉末の露にも、瀧の白玉にも影をほそめてやどれる光りには、冬枯の梢に咲ける花も色なからむ。世には花のさかりを惜みて、家の業を忘れ、學の道をよそにあこがれさまよひ、あるはふる雪の深きおもひにのみこもりて、やうなきねふちなどとなふる人多かゝれど、已れは心のかげり、うつすべき月の光りにこそひかるれ。さはいへ、かならずとは定め侍らず。こは人皆の心々にまかせ侍らん。たゞおもへるまゝを、もらしつるさかしらにこそ。人にはつゝみ給ひてよ。あなかしこ。

評、文章の清豔なること恰も雲間洩る月の輝が伏屋を照らし

て、籬の邊りなる水も草もみな玉ならぬはなきが如し。上乘の出來といふべし。

地

大阪市東區平野町三丁目　桝田益子

楽しくも、かなしくめでつべき物、さはにあなるものから、月雪花のあはれさよ。呉竹の世にも、此三つを置きては、をさ／＼あるまじうなん。しかはあれど、そが中にも、まさりおとりのなきはあらざめるを論らひわいだめんは、いと／＼かたき業にて、言に出さんも口なしの花の口ふたがり、いはんとするも山ぶきのいはぬ色なるをいかにせん。そゞ／＼雪は、豊年の目出度名を初めとしてさしぐしの曉かけてふるは、有明の月と見えて、み吉野の里も忍ばれ、墨染の夕暮は、駒とめて袖打はろふ佐野のわたりも思ひ出られ、野山もひとつに白金しきたらんやうなる見渡は更なり、木々の梢は、み吉野の千本の櫻も物かはと、思ふ斗りの詠めのをかしさいひ知らず、とはいへ、花も露をねたみ霞にきはひて、枝もとを〻に散りも始めず咲も殘らぬは、雪かとのみぞあやしまれけると言の葉に薫り、佐保姫のま袖のひまより、こぼれいでたる花の香には、衣もふかく染てきんの、思ひを重ね、花の二ひら三ひら梢はなるゝが、やがてやり水に浮ぶを見れば、ふく風と谷の水としなかりせばの、恨みを流すなど、あはれ深く見すてがたしや、月もまた、飛ぶ雁の數さへみゆる秋はまして、明石の戸より見出たらん春の夜、郭公なく若葉の梢の露にやどり、青柳の糸の、いとゞ涼き下影、冬の外のすさまじく、氷に磨く光り、ひとゝせ四の時ともに、くまあくあはれに覺ゆるは月にこそあれ。かくとり／＼に、かなしきふしのいひつくすべうもあらぬを、此三つの品定めせんは、雨夜の某の君ならではと、思ひ侍るになん。

さき草の三つのみやびをいづれとも
　あはれしれらん世人定めてよ

評、妙に雪月花の景を敍して、いづれ優り劣りの定めがたなきを記して、結べるところ中々に趣きあり。

人

東京神田區美土代町三丁目一番地　田中さだ子

兎角不順の折柄、御わたりは如何御安否伺度存ながら、彼此取まぎれ、御不沙汰申上候處、今朝は御消息賜はり、御嬉しく拜見致候。御仰の月雪花の品定めは、古のみやびをもまち／＼に申候と、文などにも相見え候へば、いづれをかしからぬは

なく、たのしき物と覺え候。櫻の花の艶なる姿には物おもふ人々多く、敷しまの大和心にさへたとへられ、外國人にまでもてはやさるゝも花の德にこそ。空高くすみわたりたる月の光、誰か仰ぎ見ざらむ。見る人の心につれて、たのしとも、かなしとも、あはれとも覺え、或はうれしきまどゐの光をもそへ、或は世を捨てし人の友となりて、かばかりあはれ深きものはあらじ。ふりつもる雪の朝のけしきこそ、似るものもあらうすが〳〵しけれ。一夜のうちに、庭も銀敷延べたらんやうにて、さしのぼる日影に光あひたる、枯木の枝も時ならぬ花さきいでゝ、めなれし伏家も玉のうてなと見まがふやうなる。野邊も山邊も、ましろに見する面白さ、またならふ者もなし。されば月雪花のたのしみとて、皆人もてはやしいづれ勝り劣りはなき者と思はるれども、雪は豊年の印といひて、めでたき物にたゝへつれば、雪をこそ勝れりと思はるれど、そはおのれがひが心にや。何もつれ〳〵の御なぐさみにもなりなんかと、御笑も省みず、御請迄に一筆かくなん。

評、畫工として見るべき點はなけれど、簡潔にしてよし。

東京　山本梓子

草の庵の夜の雨に、淋しさもまぎるゝ方なきな、かの一日の御題思ひ出でゝやとばかり筆とり侍れど、奥もなき心の程には、いかゞ思ひわき侍らむ。さかしらに品定めせむこそ、月雪花の思はむ事もはづかしう打出でにくきものから、中垣のへだてぬあたりは、心やすくてとなむ。昔より、春秋のあらそひだに、倫思ひみだれて、時につけつゝうつる心といへりしが、まして、此みくさふ。見る人の心々にまかせてこそは定むべかんめれ。あながちけぢめ立てむは、かたき事に侍りけれ。花はしも、志貴島の大和國の物としもてはやされて、武夫の赤き心によそへ、あるは大宮人のかざしとなりて、奈良の都ののどけきさまをうたはしめ、咲ちるころのしづ心なきには、かの歌人をして、絶えて櫻のなかりせばとなげかしむ。あでに、なまめかしうなかしきものは、この花なりかし。さて雪は、鳥も翅をおさめたる深山路につもりたるは更なり、蓬が宿も一夜のうちに玉のうてなとみがゝれ、花なき枝にけしきを見する杯、いひもてゆけば、限も侍らず。されど、かれは、散やすきうらみあり。これは、消ゆるかなしみあり。月こそ今一際すぐれても見ゆ侍るかな。さやかなる影に向ひては、もろこしにふりさけ見し人の心もおしはかられ、千々にものこそと云ひしも、ことはりに、様々思ひ集めて、くもり多き心の鏡も、この清き影のごとく、朝に夕に、みがゝばやといましめられつ。虫のなく音、妻とふ鹿にあはれをそへ、千草の露の色みがくなど、櫻の花の艶なると、雪の清きとを合せたる。月こそ世にたぐひなきものといはまほしけれ。さるは、近づきぬる秋に、心のひかるゝにや侍らむ。そこにこそ、おほしさだめたる御事や侍らまし。中々うち出で給はぬぞうらめしうも、はた、いづれのしなに、かたひき給ふ御心にかと、床しうなむ。折かへしたる御かへしなたまは

せてむや。あなかしこ。

長崎　内藤美興子

御文承り侍れぬ。されば雪花の何れはあれど、月こそわきてをかしけれ。春の花愛でたからぬには侍られど、世の人の何となう靜心なく家路を忘れ、山にあくがれ野にくらし、蝴蝶の夢路を辿るらんやうなるこそあさましけれ。富貴の人はかくても楽しかるべけれど、いとまなき賤の心をなぐさむべしやは。まいて物學びする少年少女子の友とし親しまんやうはあらじかし。雪も遠山に積れるさま、或は枯れたる木々に春に知られぬ花咲くなど、几帳たてまわし火をけすびつ櫻炭の匂ひ床しきあたりは、愛でたしとも思ほすべかめれど、身をおほはん衣もなき身、寒さに泣子、ひれもす糧得んとすなるわざにいそしむ人々は、此上なう憂しとや見るらん。硯の海は凍りて、筆とる手のわなゝく日は、文の林を分くらん人は、涙も催しつべし。月こそは、四の時、山にまれ、海にまれ何れもをかしからぬはなし。春の夕暮、薄衣もて包みたらんやうなるが、櫻の枝にかゝりたる長閑さ言ん方なし。五月雨降り續きて、いといぶせき折ふし、夕さりつ方より晴れて、さし昇る月のくまなきに、時鳥のなのりいでたるなどいとをかし。流石に暑き日のやう\/暮果てゝ、夕顔のほの見ゆる頃、山の端に匂ひいでたる、或は川の邊に、涼風待つ折から、柳の髪に小櫛と見ゆる影又なかし、夏は月のよごろと、古人の言ひけんも、實にことわりや。靜さへのぶるこゝちこそすなる。冬の夜、木枯の吹はらふ雲間の月、磨ける玉かとまがふばかりにて、降りしける雪をてらしたる、明方は霜や置くらん、いとさやかなるは、塵もすゑぬ鏡に向ふやうに、自ら襟もかいつくろはるゝよ。秋は八月望の夜はさらにもいはず、滿ちくる潮に光さしたる。或は詫ぶるが如き蟲の音の聞ゆる。野邊の千種に置わたしたる、葉毎の露に宿りたるは哀といふもなかく\なりや。高どのにかけ渡したる玉簾のひまもれくる、物の音の床しきに匂ひそへば、めでたしともめでたし。雪花のはたゞ時の間に散りもし消ゆもすれど、月こそは暁が伏家海士の苫屋をも照らさぬくまなく、折にふれ物につけて、いと\/哀なれ。萬の業も成し果てし頃よりもてはやすものなれば、如何なる人も楽しむべし。さればこの三をくらべたらんには、月よりこそお指をりはじむべけれ。唐土人も来と共に樂むを真の樂と言へりとか。愚なる心にわくべうも侍られど、思へるまゝをかいつけ侍りぬ。御思し給ふよしをこそ聞まほしけれ。あなかしこ。

和泉　福原薫子

雪月花は、昔より人々心とゞめて、おのがじゝ、あらそひ言ふめれど、白金の雪、霞中に笑める櫻花、さやかなる夕の月、玉だれの小簾かゝげて、御帝を慰めまつりし其景色。人の心を浮きたゝしむる艶なる其色香。羽がはしてとぶ雁の数さへ見ゆる清き影。いづれがまさりおとるべう侍られど、おのづから、其人のほんぜうのけぢしきに相あふものこそ、優ると思へ給へらるゝになん。君は、いづれをかひかせ給はんとすらん。あはれ、雪は消ゆ花は散るならひなれば、中々に物學びわれ等にとり侍りては、月のさす軒端に出でゝ、むかしびぢりの数をよみ、さてはこし方行末など、思ひつゝかへり見つ、心の鏡を照らして、長き夜の程も打ち忘れ、曉告ぐる鳥におどろかさるゝをこそひかれ侍れ。あはれ、學び殘き此かへりごとを、よきに御はんだんねぎまゐらすになんあなかしこ。

肥後　佐々有鄰子

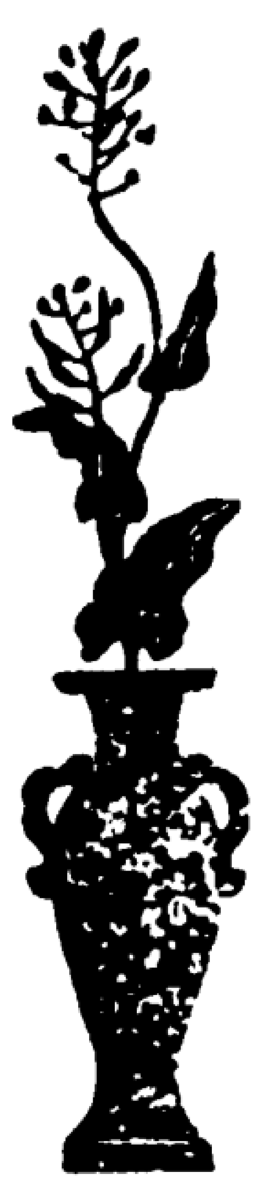
今年の八月二十日は舊暦の七月十七日なり。たそがれ時より月の出ぬまに友達と。雪月花の題をわかちて歌よまんとす。さらばと冬子がとりはし題は花。

蝶とりにわれはなりなん日もすがら
　はなにうかれてはなにあそびて

春子が題は月。
　れやの戸はたちまち月のたちまちに
　　かけうろはしくさしいりにけり

秋子は雪を得けり。
　ゆき佛いとなみたてゝなろがまん
　　むれのおもひのきにはつろまで

夏子は上の句のなりしころ早くも十七日の月、山のはにのぼりぬ。姿は遲吟なれば鈍兒のごとくもなり出ざりければ、この雪月花の優劣を品さだめせんとするなり。そもく月は一夜もなくてかなはぬ天像なれども、新月、上弦、滿月、下絃などいふみちかげあり。一ていならぬぞくやしき。雪はふりみふらずみ、年によりては賞すべきたのみなし。花は皇國のみにて外邦にはかつてなき植物なりといへば、ことさら貴くなつかしきものから、ひとつふたつの皇典をひき出でぬ●古史成文に。木花の佐久やひめ。亦名は櫻大刀自神と云とありて、木花はいともめでたきものゆゑ、贈正四位本居大人の歌に、しき島の大和心を人とはゝ朝日にゝほふ山さくら花と詠たまひしがごとく、大日本帝國民の木花を以て、朝夕心をみがく鑑とこそなすべけれ。あなうろはしくゆかしきは、木花のにほひに姿にますものは世にあるべくもなし。雪月はさもあらばあれ。論は花ぞ優れる。



雜報

●閑院宮御慶事●●●●●　閑院宮載仁親王妃智惠子殿下には、豫て御姙娠中の處、去三日午前八時十分恙なく御安産、王男子御誕生相成りし由にて、宮内省告示第八號を以て宮内大臣より告示せられしが、御母子とも至つて御健勝に渉らせられ、御名を●●春仁と御命名あらせられたりと承りぬ。

●皇族と公共團體●●●●●　親皇、王又は同妃殿下には從來公共團體の設立に際し、其主旨善良なるときは、其申請により、總裁又は會長等に御就任を御聽許あらせられしが、近來此種の團體益々増加

し、累を皇室に及ぼす恐れありとて、今後は設立後若干の年月を經過し、其主旨成績共に善良にして、基礎の鞏固となれるものにあらざれば、名義の如何に關らず、其役員に推戴を御許可相成らざることに御治定相成たりとぞ。

●戴冠式　英皇陛下の戴冠式は、御病氣のため延期せられ居たるが、本月九日擧行せられたりといふ。

●女子高等師範學校玉座の御杉戸　女子高等師範學校にては、曩に階上大講堂(三百八十坪餘)の正面奥に、玉座の建築の設計を議じ此程漸く竣工を告げたるが、此玉座の前には御杉戸を設けて、大講堂との經界と爲すことゝし、之が揮毫を帝室技藝員東京美術學校教授荒木寛畝翁に依囑し、翁は此程其業を了へたり。御杉戸丈九尺幅四尺五寸四分にて、畫がゝれたるは老梅の蟠屈槎牙たる趣にて、根に稚松と熊笹とをあしらひたるは、息子畝氏なり。泥引盛上の極彩色にて、結構老熟設色巧妙古稀を越えたる老翁の手腕としては、實に感ずるに餘りありといへり。

●女子教育進歩の實例　本年四月に於ける全國高等女學校入學志望者、及び入學者に關し、文部省にて調製したる統計に依れば、本科入學志望者總數一萬三千八百三十一人にして、內入學を許されたるもの九千百五人なり。而して更に之を各學年別にすれば、一學年志望者七千五百十五人、內入學者四千八百五十三人、二學年入學志望者二千四百七十七人、內入學者二千二百五十九人、三學年入學志望者二千四百三十四人、內入學者千六百八十一人、四學年入學志望者二百九十七人、內入學者二百四十六人、五學年入學志望者百零八人、內入學者六十六人なり。更に一學年入學者四千八

百五十三人に就て其經歷を區別せば、高等小學四學年卒業千零二十四人、同三學年修了千百二十七人、同二年年修了二千六百零二人、其他の者百人之れに依て見れば、入學者の最多數は、高等小學二學年修了者にして、次ぎは四學年卒業者なりとす。此の如く學級の高きものよりも却て卑きもの丶入學者の數多きは、高等女學校第一學年、入學資格は高等小學校第二學年修了程度のもの多きを以てなりと云ふ。



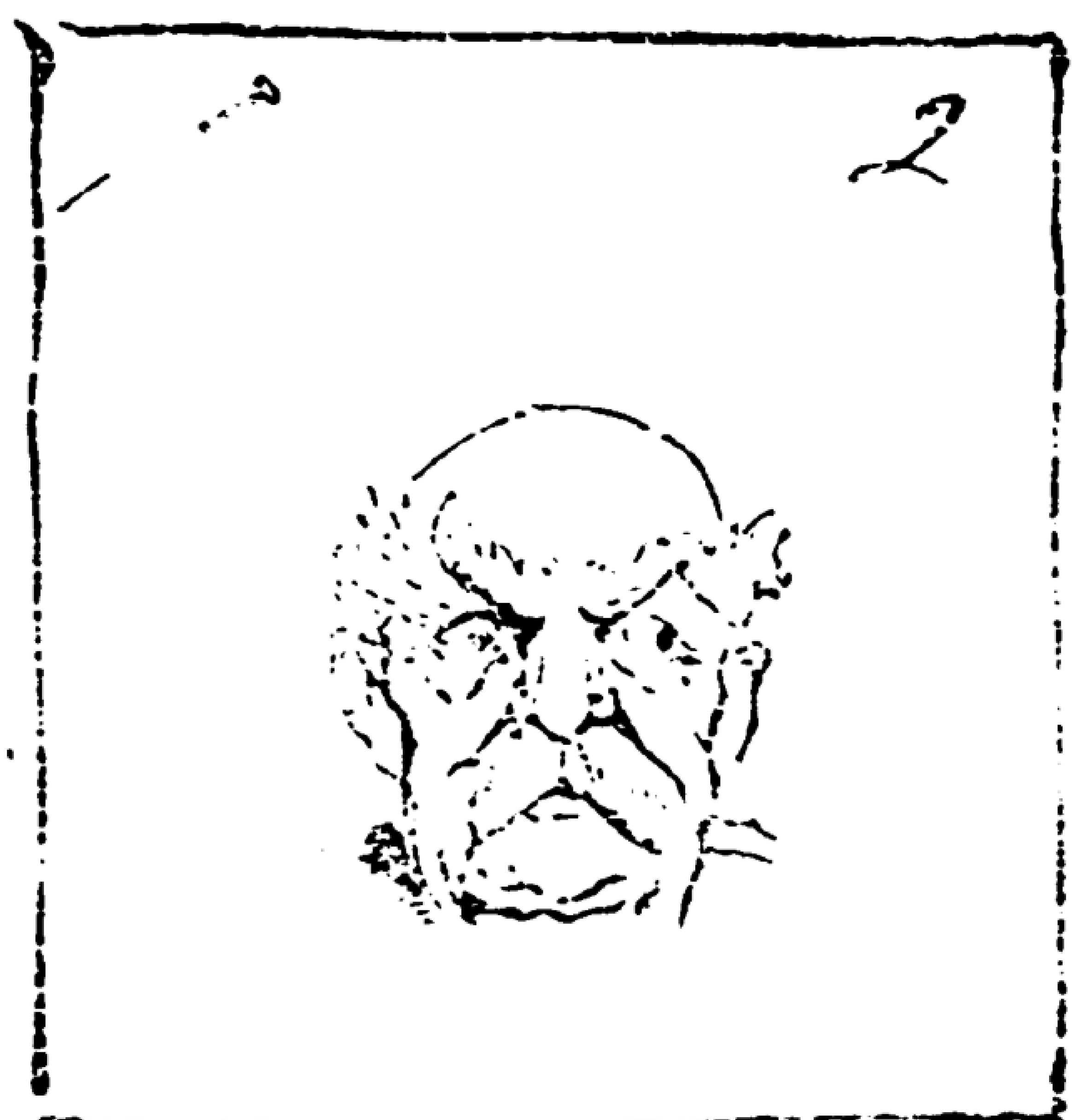
●●●●●●●●

●女囚携帶乳兒保育會　板垣伯爵夫人等の主唱に係る東京女囚乳兒保育會に於て市ケ谷監獄より二人の乳兒を引取て、鎌倉腰越の佐竹夫人が養育しつ丶ある事は、かねても記載せしが、此程又もや鍛冶橋監獄よりも同會に委托すべき乳兒ありとの通知に接し、伯爵夫人並びに澁谷喬子、佐竹くま子の兩夫人、取敢ず同監獄に赴き、二人の乳兒を引取り、直に乳母を雇ひ入れて、佐竹夫人の許に連れ行きしが、其中一人は母なる女囚刑期短かければ、出獄まで手許にて育てたしとの事に、保育會へも通知せざりしに、他の乳兒が引取らる丶光景を見て、俄に羨ましくや思ひけん、看守の前に進み出で丶云へるやう、此兒は須臾も手離すまじとて乳液の上がりしを押秘し麥飯を與へたるに、お腹の工合を損ねたる氣味にて、到底も獄中に養育し難ければと涙ながらの懺悔物語に、偖は腸加答兒にや罹りけんと、早速其旨を三夫人に訴へ、兩兒を倂せて引取られたしとの事に、異議なく乳兒を抱き歸り、伯爵夫人は乳兒の大使にて衣服を汚がされたるが、母の女囚は其

慈悲深き取計ひに痛く感じ、典獄に向つて、御恩の程は滿期放免の後永く記憶して、能く品行を愼み、再び惡しき事は爲さゞるべしとて、慈善の行の乳兒のみならず、女囚に及ぼす感化力の大なるをも顯しける。偖佐竹夫人の温かき慈愛の手に賴りて保育せらるゝ乳兒は四人となりしが、母と別るゝ時の悲みに反し、何れも喜色面に溢れ居れりと。

●●●●●●●●●

●全國小學校敎員大會　全國小學校敎員大會は豫定の如く本月三日午前九時より、帝國敎育會々堂に於て開會、出席者六百五十餘名、主幹多田房之助氏の開會の辭に次で、會員中八九名の敎育實驗談あり。次で辻新次氏の演說、及び文部大臣代理眞野實業局長の實業敎育に關する說演あり。正午休憩、午後よりは豫ての討論題に就き討論會を開き、終りて三輪田眞佐子、伊澤修二、德富猪一郎諸氏の演說ありたり。討論の結果左の如し。



一小學校敎員一人にて擔任すべき兒童數は、凡て幾人を以て適當とするか(未決)

二小學校訓導に小學校長適任證書を下附する制度を設くるの件可決(敎員不足の今日なれば大抵證書を下附すること)

三訓導を以て府縣師範學校の附屬小學校主事とする可否(可決)

四高等小學校二學年修了の者を直に中學校高等女學校に入學せしむるの可否(學力不充分なるを以て入學せしむべからず)

五女子の小學校敎員をして體操科を受持たしむるの可否(可決)

六石盤廢止の可否(否決)
総て、市内各書店より寄送に係る書籍七百餘部の福引を爲し、午後四時過散會せり。來會者は最初五百餘名の豫定なりしに、六百五十餘名の多數に達せしは誠に稀有の盛會なりしと。

●湘烟女史 母堂の膽勇●●●　去月廿八日の夜、相州大磯町の男爵故中島信行氏邸へ四人の强盜押入り、各ピストル等の兇器を持し、脅迫の末故中島湘烟女史の母堂(七十餘)を初め女中二人泊りに居し女客一人下男等を縛り上げ金品を强奪して逃去しが、其後警察署にて右の中三賊を取押へ、直ちに訊問に着手せしに包み隱すやうなく、一々白狀に及びしか三賊が自白中故湘烟女史母堂の膽勇には驚きしとていふを聞に、同賊は最初門番の爺より順次家人を殘



らず縛し、最後に奥の間の母堂が臥し居りし蚊帳の釣手を切り落とし、金を出せと脅迫せしに、母堂は更らに臆する色もなく、落ち着き澄して「五百や六百の金を遣かはすは易すけれど、銀行に預けありて、手元に無きゆゑ明日引出し置けば、明夜再び來りくれよ」といひ「女暮しの家内故、決して嘘は言はぬ、又他言もせねば今晩は引取り、明晩來よ、今夜は寛りと酒でも飲行べし」と床の間に在りしキリン麥酒を持出し、叮寧に三賊に酌してやりし後、小用を足しにと起ちしに、賊は其逃亡を防ぐ爲、腰繩つけて便所へ着き行きしに、母堂は靜に振返りて「女の事故戸は締めさせてくれよ」と云ひしも聞かずして、便所の戸を開け明したるま、見張りゐたるに、母堂は今は詮方なしとや悠

く々と小用を濟し出來れる其の膽力には、流石の賊も内心不氣味になり、言葉も尋常に「折角の事なれど、明日强盜の出直しといふは昔から例も聞かねば、金が無ければ在る品物を出せ」といひしに、母堂もさらば勝手次第に欲しと思ふ品を入用だけ持ち行くが好しと自ら指圖して品々を一纏めにせしを渡しやり、靜に賊の出で去るを見送りしといふが、其間賊は片時も油斷せずピストル白刄を擬して、隙間もなく母堂の身邊を取圍みし中に、此泰然たる應對の樣には、却て肝膽を拔かれたりと口々に係官に申立しよし。



●大倉光子刀自の美擧

大倉喜八郎氏の實妹大倉光子刀自は、若くして、良人を喪ひ爾來須崎村の自邸に寡居する數十年、今茲耳順の高齢に至るまで、儉素身を持し、口に美食を味はず、家に婢僕を養はず、家道一切の事言ふも更らなり、掃灑焚蕘の末事に至るまで、常に自ら手を下して經理したる末、尠からざる貯蓄を爲し得たる由なるが今年は恰も刀自が還暦に際會せるを以て、之が紀念として其貯蓄一萬圓を擧げて、實兄喜八郎氏の設立に係る大倉商業學校に寄附したるより、此程同校監督長石黑男爵、協議員末松男爵、穗積博士の諸氏立會の上、寄附金授受の手續を終了したる由なるが婦人にして斯る多額の寄附を爲せるは世間多く聞かざる所なるのみならず、其金員の一に勤儉貯蓄の結果に出でし事なれば、また近來の美事といふべし。

●女學生の陰德

年頃の女子と云へば眉を顰む

る者さへある今の世に、爰に奇特なる女學生こそ顯れたれ。麹町區土手三番町の女子高等裁縫學校普通科生の藤井サダ子(十六)は、常より心優しく、去る六日の朝早く通學の途中、牛込門外に差蒐りしに、折柄姉弟と覺しき二人の幼兒が、互に手を攜へて涙に咽び居りしに、サダ子は漫ろ愛憐の情に耐へず、迷兒に相違あるまじと看て取り、さま／＼と賺し宥めて、空腹にもあらんかと、土手上にて、午餉にとて攜へたる行厨を悉く二人に與へつゝ、さて宿所を尋ねれど、二人ながら頑是なくて、兎角埒明かねば、餘儀なく牛込署に連立て其保護を賴み置きて後、常の如く登校したりしが、サダ子は爲に其日晝食を爲さず、且つ朝の事を人にも語らでありけるに、午後二時過ぐる頃、幼兒の父



なる麹町區紀尾井町六番地竹村梅吉といへるもの態々禮を述べんとて學校に來りければ、爰に始めてサダ子が陰德の明かになりて、校長は衆生徒の模範にもと、直に一場の演說を開けりとは、實にさもありなむ。

●廣島の孝子　家貧しうして孝子出づと。宜なり廣島縣廣島市京橋町百五十七番地平民 商 亡田中力藏長男熊吉(廿六)は、その性質溫順にして幼時より父母の命に從ひ、曾て命令に背きたることなく孝養を怠らざりしが、家もと貧困にして父力藏(五十五)母しな(四十七)妹きわ(廿一)妹しげ(十九)妹つや(十三)弟忠一(十二)の七人の家族ありて、日々の活路に白晝は味噌を、夜間は蕎麥、饂飩等の行商をなし、漸く其日の煙を立て居たるが去る明治二

十八年七月、母しげは不幸にも赤痢病に罹り、比治山避病院に收容せられしが當時熊吉は二十三歳にして十三日間病床に侍し、殆んど寢食を忘れて看護に餘念なかりしかば、母の病氣も次第々々に快方に赴き、遂に全癒の上退院するに至れり。其後同三十年五月より妹しげが病氣に罹りしより、看護藥用等に出來得る限りの心を盡しゝが、其甲斐なく翌三十一年十月死亡し又同三十二年二月、父力藏は胃患病に罹り、常に病蓐にありしが是れ亦熊吉が看護に身心を傾けしも、不幸にして翌年四月死去したり。斯く父母妹等、前後に病氣中看護の傍はら僅少の商業に奮勵して家族の活路と藥劑等の手當をなしたるは孝心深きの致す所なりとて同町近隣藤井新次郎外十七名は同人に對し其孝に酬ゆる處ありしが、更に一般の龜鑑ともなればとて去月三十日市役所へ向け行賞の上申をなしたりといふ。



●●●●●●●

●婦人用新草履の批難　婦人用雪駄も廢たれて此頃は疊を二三枚重ねたる上に、赤紫萠黄などの天鵞絨を敷きたるものを穿ち、漸流行を誇り顔に、ばたばた音をさせ避暑地などへ赴く人が多く見受けらるゝが、恰も女郎屋の上草履めきて、貴婦人には似合はしからずとて、心あるものは眉を顰めて忌み笑へりとぞ。

●●●●●

●夏物と冬物　本年の夏物は悲境の内に終らんとし、機業家及呉服商は、最早冬物に手を出さんと構ひ、京阪地方の大呉服商は、昨今ソロソロ關東地方に來りて仕込を爲すものさへ現はれた

り。而して東北地方にては、夏物仕込みに躊躇せし爲め、時季に至りて品物拂底し、手後れを爲したれば、冬物に對しては多少仕込を早くせんとする傾向ある由。冬物の出盛は新糸の出盛りを待つ事なれば、自然九十月頃なれど、今年は生糸の高價なるより、冬物の値ひも、昨年に比し五分乃至一割方高し、最も目下存在する品は今春の殘物なれば、新糸出盛り後とは多少傾を異にすべけれど、今年の生糸は去る六月上旬餘程の高値を表はし、其後一寸下向きたれど一般當業者は本年の生糸は高かるべしと豫想し居れば、冬物は案外直段を崩すことあらざるべしと云ふ。

外報

●美しき君民の愛　英國サロップのエルシー、メー、ロバーツといへる本年十三歳の少女は、此頃重き病に罹りて病床に在りけるが、此頃戴冠式に關し、左の如き書面をアレキサンドラ皇后に上りたる由。如何に忠愛なる小國民の無邪氣にして、深情の流露せるかを見るべし。

親愛なる皇后陛下、妾は是迄永き間御手紙を差上げ奉らんと存じ居り候へ共或は失禮にわたることを恐れて今に至る迄差扣へ候そは妾は今年始めて十三歳の少女に候故にて候

妾は戴冠式の當日倫敦に參り度き願ひ切なるものに候妾は當日陛下が陛下の人民の忠義心を御覽ありてこれに就て御誇りあるべきを信ずる者に候

妾は此程ツエンロツクの市長アンフチース大佐が妾等の學校に臨まれ妾等一同へ王冠のつきたる美麗なる紀念牌を贈られし事を陛下に申上ぐる事を喜び候妾はいまだ陛下を見奉り候事無きにより右の紀念牌にある御肖像が陛下并に親愛なる王陛下によく肖たるや否やを知り不申候へ共妾は他日必ず陛下を見奉るの日あるを信じ申候

親愛なる皇后陛下、妾は四年前我が愛するヴヰクドリヤ女皇陛下がブリストルに在はせし時親しく見奉るの榮を得たる事を御知らせ申上候を喜び申候親愛なる陛下よ、妾は毎夜陛下の爲めに戴冠式の日に何の妨も起らざれと祈り居り候

妾は我が善良なる王陛下が戴冠式の日に多くの貧民に樣々の御馳走を爲され候由の新聞紙を妾の父が讀み居り候を聽きて喜ぶ

者に候妾は今ま重き病に罹りて此處に在て戴冠式の爲めに何なも盡すこと能はざるを憾み申候終に臨んで妾は只管に陛下と王陛下が御壽長くして幾久しく我等を治め給はん事を切に祈り申候

サロツプのイロン、プリツヂにて

陛下の卑しき小さき臣民なる

エルシー、メー、ロバーツ

されば皇后アレキサンドラ陛下も、いたくこの可憐なる小さき國民の忠義心を愛でさせ給ひて、左の如き優渥なる御書面を下し賜はり、感謝の意を表せられたりと。

英國女皇は非常なる喜びを以てエルシー、メー、ロバーツ孃より贈られたる愛らしき手紙を讀みたりよりて茲にノーリス孃に命じて深く感謝の意を致さしむ

一千九百二年七月十八日

ウインゾール宮にて

アレキサンドラ

今に初めぬ事ながら、英國君民の關係の美はしき有様見えて床しき限りにこそ。

●**キッチエチル夫人の候補者**　此程英國に歸着したる南阿英軍總督キッチエチル將軍は、南阿戰爭の功勞に依り、殆んど軍人の得與ふ有らゆる名譽を英國王より與へられ議會は巨額の年金を贈ることに決議したるが、將軍は尙獨身者なる由にて同國の婦人中には將軍の妻たらんことを希望するもの頗る多く、其競爭激烈なりと云ふ。右に就き、英國の一新聞紙は曰く、南阿の戰爭を終りたる將軍は今や又巨多の娘子軍と戰はざるべからずといへり。

●**英國中等社會の生活費**　英國にて、一ヶ年千五百圓の收入あるは、先づ中の下の階級にして、今ま其標本として倫敦の一辯護士の會計係にて妻と二人の子を有する者の家計を、表を以て示せば、

家賃並に税金三百十一圓七十錢（内家賃二百六十圓税金五十一圓七十錢）△鐵道賃金七十圓△保險並に慈善會費四十四圓十二

錢△新聞書籍四十五圓△瓦斯、石炭コークス油、薪、マッチ九十八圓五十錢△夏期保養旅行但二週間五十圓△煙草二十二圓五十錢△誕生日並にクリスマス贈物十五圓△郵便並に文房具六圓△食物四百七十四圓五十錢△家内雜用五十二圓△靴六十圓△裁縫師六十圓△妻及小兒の衣服百三十圓△醫藥六十圓六十六錢

合計　千五百圓

而して家賃實に全收入の五分の一を占め居れるが上流社會に於ては、家賃は收入の十分の一を以て定則とするに比して、中の下の社會が斯の如き高價の家賃を拂ふを見れば、下流社會の生活の困難察すべく、彼等は若し家賃の高きを厭はゞ家を郊外に移すべきも、斯くては通勤の爲に鐵道賃金を增さゞるべからざるが故に、結局大差なき事となるべし。かくて歲計表に於て最高額を占むるものは、言ふ迄もなく食物にして、實に全收入の三分一はこれに費さるゝ事なるが更に其一週間の費用を擧れば左の如し。

鳥獸肉及魚類	三圓五十錢	野菜	六十二錢
牛乳	一圓廿四錢	パン	七十四錢
雜	三　圓	合計	九圓十二錢

保險料幷に慈善會費四十四圓十二錢のうち二十圓六十二錢は、兒子の二十五歲に至る迄拂ふ所の積立保險千圓に對する保險料にして、更に千圓の終身生命保險に對しては二圓を拂はざるべからず。而して一圓五十錢は家具火災保險に、二十圓は疾病の豫備の爲め協同慈善會に納むるものとす。夏期保養の五十圓は二週間の旅行に對し餘りに少きの感ありと雖も、經常費はこの外にありて、こは單に旅費宿泊料に宛つるに過ぎず、さればこれにて充分なり。

以上はレヮード氏の調査に係り、コーンヒル雜誌の掲載する所にして、悉く實際より割出され、少しも假捕の事實を交へざるものなりといふ。

●十三歳の小兒杜國の爲に自殺す　レオポルドウインクレルと云ふ十三歳の維納一小學校生徒はさきの自銃を以て自殺したる由。其原因はボーアの英軍に投降したるに依りて落膽したるに在りと云ふ。ウインクレルは昨年學友間に於て、ボーアの爲に盡さんことを誓ひたる一の會を組織し、其内の二人と共にトランスヴアールに向け出發したるが維納を距る四十哩の地にて妨げられ、兩親の許に連れ歸られぬ。彼が自殺前に認めたる書面に「余は死するまで余の誓を保ちてボーアの國旗に忠實なるべし」とありたりとぞ。

●猿と人との中間物　和蘭の一軍醫は瓜哇に於て此程一の骸骨を發見し、之をピセカンスロプスエレクタス(眞直なる猿人)と名づけて、今日まで世人に知られざりし人と猿との中間に位すべき動物なりと稱し居る由なるが、右に就き科學者間には久しく求められたる猿と人との關係を聯結する鎖を得たりと呼ぶものあり、或は又他に之と同樣なる物を發見したりと稱して右發見者の功を奪はんとするものあるなど、喧しき問題と成り居ると云ふ。

●女子に選擧權を與ふ　丁年者選擧法案は、此程濠洲聯邦議會の上下兩院を通過し、愈法律となりたる由。此法律に據れば、濠洲の丁年以上の者は性の如何に拘はらず、聯邦を組織する六個の洲に於て議會議員を選擧する權利を有し又選擧せられたる場合には、議員たる權利を有する事となりたりと。即ち同聯邦に於て、女子は男子と政治上同等の權利を有するに至りたるなり。之は女子に實際の自由を與へたる嚆矢なるべしと云ふ。

●濠洲の旱魃　北半球の諸地方にては、近來降雨頻りなるに反して、南半球濠洲にては、全く

降雨を見ず、非常なる旱魃の由にて、家畜の被害甚しくクインスランドの北方にては、去月中に一萬頭の犢牛中僅に二百頭のみ生殘りたる所ありてヴイクトリア地方にては、家畜の輸出を禁ぜざれば、今冬(今夏)肉の飢饉を告ぐるに至るべしと云ふ。

●外國語を學ぶ新方法　米國の女子二名は、巴里に於て、最も完全に佛語を學ばんと決心し、同地の小學校に入りて、他の生徒と二ケ年間同一の授業を受けたるに、其結果少しの差もなく、極めて完全に佛語を話し得るに至れりと。

●暹羅異風　まづ外國人にして同地に赴くものは、第一に同國の男女を區別するに苦しむ由なり。こは兩性の服裝に甚しき相違なきためにして、同國の女子は散髮なりと。散髮の由來として傳ふる所は、千七百五十七年に緬甸の兵アユシアの城を襲ひたるとき、女子は皆頭髮を斷ちて男裝を爲し衛兵となりて防禦に努めたるため、敵は其兵數の多きに驚きて退去したることありしと、爾來當時の事を忘れざる紀念として散髮となし居るなりと。されば今日にては女子は頭髮を貴しとせず、女子の頭は恰も靴磨を用ゐるブラッシの如しと。

●凋みたる花を再び咲かす法　倫敦の花市にて商ふ花の中には、一度凋みて香をも失ひたるものを巧なる方法にて、裝ひ新しき花の如くに見せしむるもの少なからず、其方法は凋みたる花をグリスリンの液に浸したる後氷の中に入れ其花の有する炭酸瓦斯を通ずるに在りと。

落葉籠

●神戸のむめ子さまに申上げます、私も貴孃の御

説に賛成であります、自轉車に乘らなくても、大股に歩まなくても婦人の用は辨じますから、女らしくして居たいと存します、（木挽町あや子）

●米國婦人の樣に飛んだり跳ねたりと神戶のむめ子さんはお仰いましたが、米國婦人とてマサカそんなに飛び廻つて許りも居ますまいから、飛んだり、跳ねたりとは活潑といふ意味ではありませんか、さういふ意味であるなら、私は寧そ飛んだり跳ねたりするのが善いと思ひます、是迄の日本婦人のやうに内に許り閉籠つて居て、少しも快濶な氣象のないのは、決して文明日新の婦女とは申されません（築地はや子）

●赤阪の大内貞子さまと神戶のむめ子さまへ申します、貴孃方の樣に女大學的の議論をなさるものではありません、今日の世の中では、婦人とても少しは、眼を開けて、物事を御覽遊ばすがよろしいと私は考へます（横濱花咲町中川きよ子）

●今日の報知新聞（八月九日）に小石川の何やらおつしやる御方が、奧樣がほしいとて、お探しなさる廣告が出て居ましたが、その中に但し女學生は一切謝絕すと書いてありました、何故女學生を謝絕なされますか、私は其譯が聞きたう座います（神田小川町小泉千代子）

●私は新聞を讀むのが好きでありますが、三面の記事を聲高に讀みますと、何時もお父さんからは笑はれ、お母さんからは叱られます、どうかお父さんやお母さんの前で音讀しても笑はれたり叱られたりしない新聞を敎へて下さいませ（麻布みち子）

●前號の女鑑の口繪に出て居る、華族女學校の卒業生の御方の髮はみな銀杏髷とか桃割れとかいふものばかりで束髮にお結ひなさつた御方は御一人もないやうに見えますが、華族女學校では、束髮

はお禁じなさつてあるのでありますか、（熊本新屋敷よしの）

▲一寸熊本のよし子孃にお答へ申しますが、さういふ譯ではありますまい、華族女學校の中で、束髮に結うていらつしやる御方をいくらも御見受け申します （か〻り記者）

●妾の先人は桃蹊先生と稱し、長く藩君の師傅を務め、一郷の碩學を以て目せらる、妾や巾幗纖弱の婦女なりと雖も、希くは先人の志を紹ぎて以て、家學の再興を圖らんとし、略ば經史を讀みて、傍ら百家に入るも未だ作詩の法を知らず。方今の女流にして詩學に精通せらる〻人あらば、記者先生幸に其姓名を妾に敎へて、妾をして贄を其門に執らしめよ。（備中青嵐女史）

▲青嵐女史に申上げます、女流の作詩家はいくらもありませうが、矢張り男子の方で詩學を専門とせらる〻向に就いてお學びなさるがよろしい、女は女の師倘でなければならぬとの謂れはありますまい （か〻り記者）

●貧しき女子とても奮發一つでは、學問の出來ぬといふ譯は決してありません。秋田の服部とり子さん氣を落さずにか〻り記者先生の御返事の趣意を守りて御勉強なさるが専一であります、私は貴女に同情を表しますから、一寸落葉籠をかりて、此のことを申陳べて置きます （サルヴエーシヨン、アーミイの一婦人）

●記者の君に御願申します。私は田舍に住む者ですから、みなさんに御面會申すことができません。實に口惜うございます。何卒毎號御載せ下さる和歌や、文章の天とか地とかにおなりの方の御姿を御掲載下さいまし。さすれば居ながら多孃方に御面會致すやうで、樂しい事と存じます。（靜岡松枝子）

▲松枝孃に御答へ申します。その事は皆さまから云ふて來ますから、追て提載いたしませう。(かゝり)

▲學校案内とか脩業案内とかいふて、東京市内諸學校の事柄が洩なく載せてある本があるでせうか。もし有りましたら何所で發賣して居ますか御敎へ下さい。(靜坂子)

●新刊略評

◎文藝(第二號)名からして博文館の文藝倶樂部そつくり也。口繪に藝妓、俳優などの照影を掲げたる亦同じ。大阪に於ける文藝倶樂部と見て先づ可ならん。浪六のやみの鬧は文章も垢拔けがして、鉛粉氣がとれて居るから、大阪の讀書には如何やと思ふ丶節もあれども、東京の讀書界には確かに歡迎される的の價値がある。二度の花を大阪に咲かせんと苦心せる浪六の手際は東京に居たときよりは進歩したに相違ない。長谷川濤涯のながれ彈も中〳〵達者に書いてあつて、趣向も一寸面白い。其他社會雜觀、藝林、諸國物語、花天月地、千紫萬紅などありて見處おほし。此勢で進んだなら關西文壇の牛耳を執る時が來るであらうと思ふ。(定價一冊廿五錢大阪南區心齋橋北詰文會堂發行、東京神田表神保町東京堂發賣)

◎料理講義錄(前期第參號)日用惣菜。交際料理茶事懷石。儀式料理。諸菜切方。西洋料理。支那料理等の講義あり。又食品吟味。食堂心得。料理雜話などすべて斯道の心得方を集む。細君向きの好講義錄といふべし(入會金三十錢一ヶ月二十錢京橋區鈴木町一一大日本割烹學會發行)

●口繪について

●エドワード七世陛下同皇后陛下　本月九日を以て戴冠式を擧げさせられたる大不列顛國皇帝皇后兩陛下の御肖像は則ち是なり。吾人謹んで之を本號の卷首に揭けて、兩陛下の萬々歲を祝し奉るの微意を表す。

●職員及び生徒　口繪第二回は野口裁縫專門女學校職員及び生徒の寫眞なり。同校は京橋區南八丁堀一丁目に在りて、今回規模を擴張し、新に認可を得て、盛んに子女裁縫の敎授を圖れり。校長は前號口繪に揭げたる野口兼吉氏にて、職員には野口鐵次郎、柿沼しまの兩氏ありて、各敎授を擔任し、將來の盛大、期して待つべしといふ。

●平潟港　東京より仙臺に至る常磐線が、大甕の停車場を過ぐるや漸く海邊に近づき、關本勿來等に至らば、白沙青松長く連なり、蒼茫たる太洋を其間より望むなどえも言はれず。平潟灣は實に此兩驛の間にありて、陸前濱街道中、殊に風光を以て賞せらるゝ所也。關本停車場（東京より三等車賃一圓九十七錢）に下りて、新道を東北に歩めば、二十町にして平潟に達す。

平潟の地形は灣の左右より岬角斗出して關門の狀を爲し其形ち箕の如し。

岸頭には半圓線の棧橋を架し、人家之に沿て檐を並べ業を營む、其途中一個の小洞門あり、門を潛りて左方の岬上に登れば玆に八幡神社を祀る。此地を鷹岡山と云ひ白波臺脚を洗ひ境內には椎、樫、銀杏等の老樹茂生し極て幽邃なり、路傍に小碑を建て、芭蕉翁の「此處目に見ゆるもの皆凉し」の句を刻したり。此地の景色總じて廣重の錦繪を見る

が如し、旅店は靜海亭住吉屋阿波屋等よし、元來海魚に富み且つ附近各地へ交通の便宜しき地なれば避暑には適當の塲處なり。平潟より窪田村に至る途中字里浦に二ヶ所の洞門ありて安永三四年の間に成るものと云ふ、或人の詩に一過ニ洞口ー乾坤別、裏有ニ窈窕解語花ーと詠せる以て舊日其地の如何に熱鬧ありしを想ふべきなり。

●新刊寄贈

婦人と子供	第二卷第八號	東京	フレーベル會
兒童研究	第五卷第六號	同	教育研究所
法の母	第百九號	同	夫人正法會
日本婦人	第三十三號	同	帝國婦人協會
大日本婦人教育會雜誌	第百四十六號	同	大日本婦人會
大八洲雜誌	第百九十三號	同	大八洲館
女子之友	第百二十號	同	東洋社
女學世界	第二卷第十號	同	博文館
愛國婦人	第十號	同	愛國婦人會
文藝	第二號	大阪	駸々堂
料理法講義	第三號	東京	大日本割烹學會
はまちどり	第一號	同	日本女學校
裏錦	第百十七號	同	尚絅社
兒童新聞	第十七號	同	兒童新聞社
商家之友	第五號	同	時事新報社
流行	第三十二號	同	流行社
兵事雜誌	第七年第十五號	同	兵事雜誌社
中央公論	第十七年第八號	同	反省社
實業時論	第二卷第八號	同	大日本實業學會
偕行社記事	第三百九十五號	同	偕行社
東京經濟雜誌	第千百四十三號	同	經濟雜誌社
刀劍會誌	第二十二號	同	刀劍會本部



女鑑歌文月次兼題

九月五日　八月廿三日〆切
歌　名所月
文　郊外散歩

九月廿日　九月八日〆切
歌　夕鹿
文　弟を誡むる文

十月五日　九月廿三日〆切
歌　菊久盛
文　栗拾ひに誘ふ文

懸賞

天には三册（一月半分）地には二册（一月分）人には一册を贈呈す。

●女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。字餘り歌は此限に非ず。

題
住所
姓名
…………………
…………………

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題
住所
姓名
……、……、……。……。
……、……、……。……。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿する事を得
○兼題を天地人の三才に分つ

●わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば**誓つて根治**することを確證す殊に本劑にて一且全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神效なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑也▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらん事を乞ふ

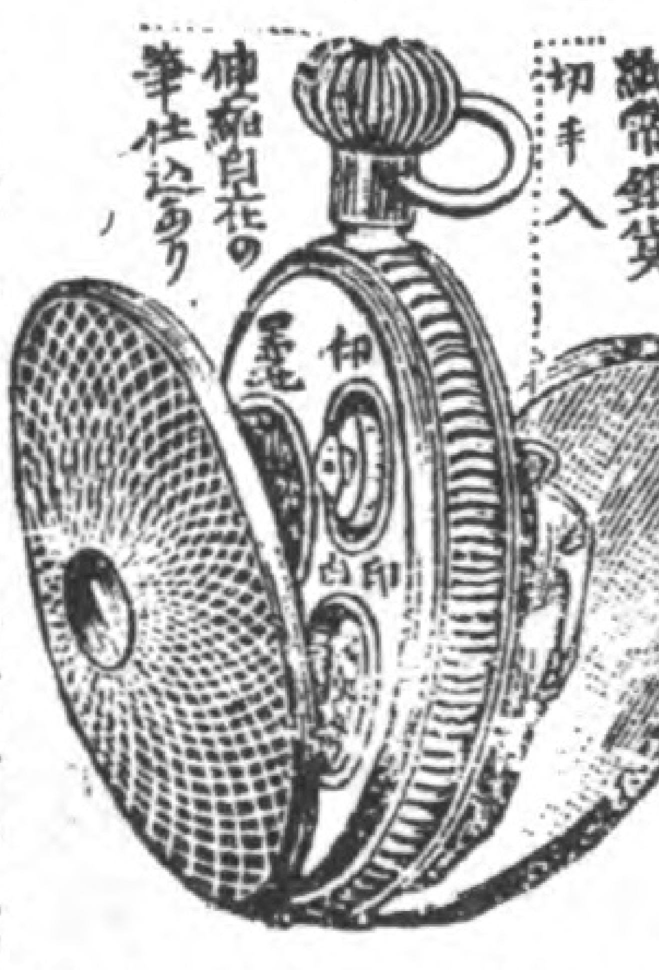
專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

●肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は八拾錢特別製分壹圓四拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

大改良最新式時計形文具兼用錢入發賣



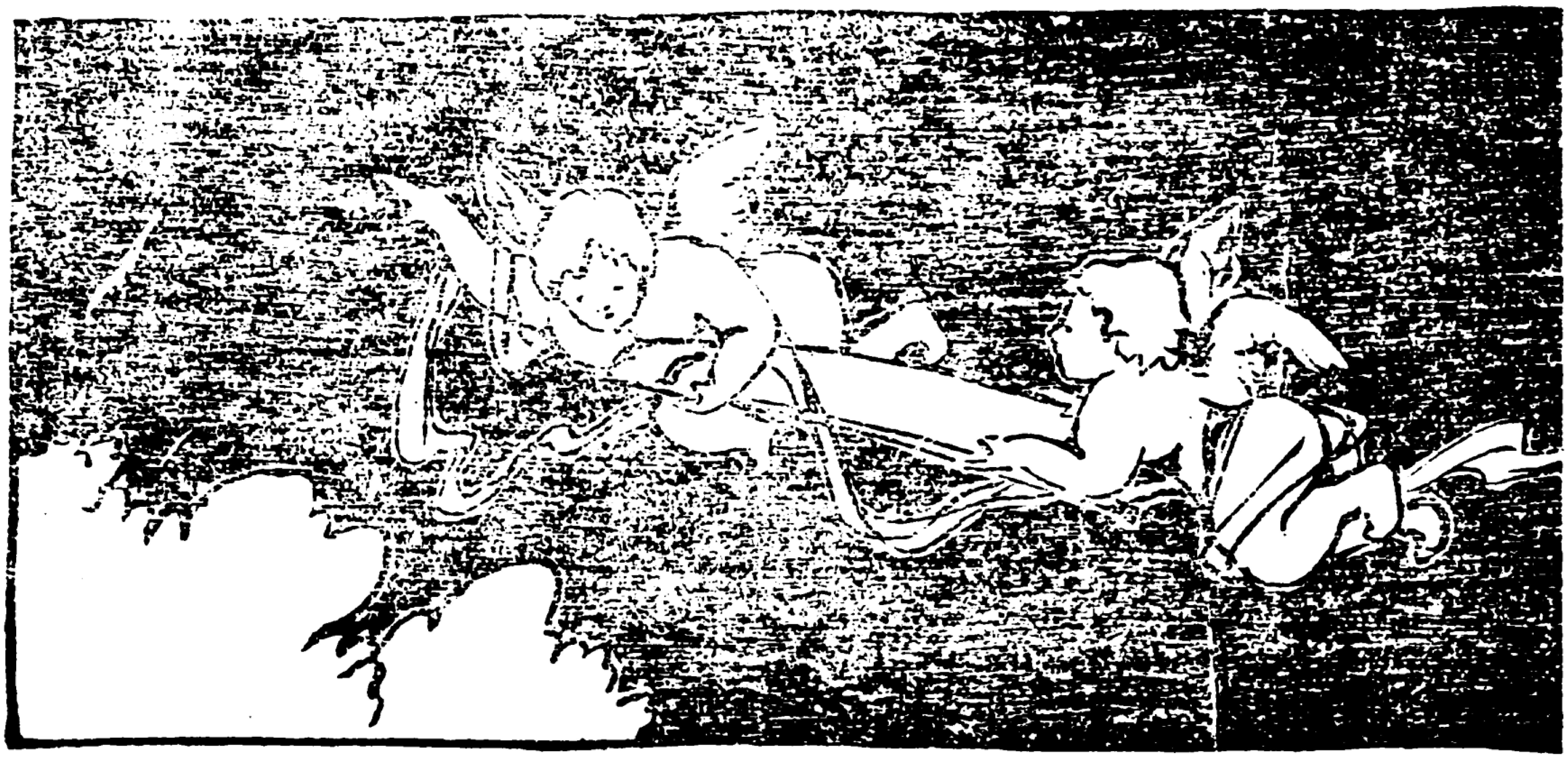
本品は圖の如く龍頭無雙ニッケル側十九形兩蓋開きにて一面は**文具**（墨池肉壺檢印等）を備へ一面は**錢入**（銀貨銅貨紙幣印紙等を入る）龍頭は伸縮自在の**筆**を仕込み體裁頗る優美にて當時流行の**薄形時計**と異らず**景品**披露の爲め千個限り時計鎖を進呈す▲特別上等製美術浮彫り兩蓋開き九拾五錢上製八拾錢小包送料百里内八錢百里外十六錢の割にて添送の事▲切手代用必ず二割増し▲着金即刻送品す▲代金引換小包郵便は面倒手數に付一切御斷り申候事▲着金の上に非ざれば決して送品致さず候

專賣元 東京市神田五軒町十九番地 **日新館商店**





堀内新泉子著



一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤縄を結び、音樂の効により陰鬱柔懦なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向斬新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に

近刊

女樂師

歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲喜忽ち變じ哀樂俄に移り讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは大方諸君の知らせ玉ふ所一本を座右に置かれなば特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで家庭教育を裨益すること疑ひなし

發行所　東京國光社出版部

文學士大町桂月著

常磐御前

定價 金拾五錢

江南の橘は江北の枳となるとかや、王家の庭に移され、更に大藏卿の園に植えられたる源氏の名花は、伏見の雪に千行萬行の血涙を呑みて、遂に他家の枳となり了れるも、その苦節は鐵枴山頭に再び春風を迎へて壇浦の烟波に凱歌を揚げて、目出度く初志に酬ゆるに及びぬ。思ふに義朝を以て夫となし、義經を以て子としたる常磐の一身が、源平二氏興亡の連鎖たるは言はずもがな大町文學士の健筆は優に此間の消息を寫し出して些の餘蘊なし。製本美麗當時流行の細長形袖珍となし、表紙畫、口繪等仔細に意を用ゐたれば、滊車滊船旅行の伴侶たるは云ふも更なり、樹蔭涼を納るゝの時、午窓机に凭るの處讀誦一番、當年を夢みるの概なりて、興味津々禁ずべからざるものならん。

東京築地二丁目

發行所 株式會社國光社出版部

明治三十五年八月廿日發行　毎月二回五日廿日發行　第貳百五拾九號　明治廿五年二月十[illegible]日第三種郵便物認可

…丁目株式會社國光社…